

信仰

はじめに

本章は、明和村の信仰を、採集資料をもとにしてまとめたものである。調査が、全村限なく行われたとはいえないものの、その全容を明らかにすることはできなかつた。

本章は、右のような事情を考慮した上で、調査資料をもとにして、つぎのように分類した。

一、神道関係の信仰

二、仏教関係の信仰

三、屋敷神

四、民俗信仰

五、俗信

つぎに、本村の信仰の中でも、特色ある事項をとりあげてみることにする。

ムラの鎮守として、長良神社が目立つた存在であるが、利根川をひかえていながら、千代田村瀬戸井の長良神社のように、目立つた神事がないのは、どういうことであろうか。ムラの鎮守としての信仰はみられるが、長良信仰固有のものがみられないのである。これは、長良信仰を、その本来の信仰がある水神信仰の面からではなく、はじめから、ムラの鎮守としてまつるようになったためであろうか。

南大島の巖島神社については、中世の懸仮の存在などから、古い信仰を残すことができる。六十年ごとの開帳も注目される。また、俗に弁天様といわれ、民間信仰の性格の強い神として信仰されている。

仏教関係では、念仏がさかんであることと、そのとき、念仏踊りが行なわれたことが注目される。念仏踊りについては、同郡の板倉町の場合が知られているが、薬師堂などの念仏の際の余興として、老女たちが踊つたという。信仰と民俗芸能の両面から注意したい事項である。

十九夜信仰がさかんなのは、本県では、東毛地方と、西毛の碓氷郡松井田町、甘楽郡下仁田町であるが、本村でも、この信仰が目立つてゐる。とくに、安産の神としての信仰が顕著であり、毎月一回、信心の者が宿に集つて十九夜念仏を唱えるという。各地に十九夜塔も建立されていて、古くからの信仰であることを知る。

庚申信仰については、旧十月十六日あるいは十四日を、庚申様の誕生日として、庚申日以外に、特別に庚申講を行なっていることが、東毛地方の一つの特色となつてゐる。本地区においても、作神様としての庚申信仰がさかんで、十九夜信仰と同様に、近世の庚申塔の建立もみられ、古くからさかんであつた信仰の様子を知ることができる。

大師送りは、かつて、邑楽郡地方一帯を舞台として行なわれたということであるが、東毛地方の大師信仰の具体的な例として注目したい。

屋敷神信仰については、広くヤシキチンジユの名でよばれ、オクンチと二月の初午の日にまつることと、初午のときに、スマツカリをつくつてあげることが特色となつてゐる。初午のときのスマツカリを供えることについては、東毛地方一帯の行事であるが、秋の屋敷祭りについて、コビマチ（新里）とか、コミヤマツリ（大輪）といふことに注意したい。このことは、ムラのまつりをオヒマチということに対するコビマチであり、コミヤマツリということであろうか。

以上のほかの信仰面で注意したいことは、道祖神信仰と、石尊信仰

のことである。道祖神については、東毛地方の特色として、足の神としての信仰がみられることが、弁天様との悲恋物語が伝えられていることである。とくに、弁天様との関係において、娘の行列は、道祖神様の前を通らないということである。道祖神が嫁をみてやきもちをやくからという。

石尊信仰も、東毛地方に共通してさかんである。隣村の千代田村と同様に、ここでもコウチゴとの燈籠たての信仰がみられたのである。水神信仰も、利根川沿いの村としての特色を示しているといえよう。富士信仰もさかんであったようだが、関係資料の報告はすくなかった。梅原や斗合田や矢島などの富士塚は当地の富士信仰の姿を示している。また、初山に館林市小桑原の富士嶽神社へおまいりに行くこともむかしから行われていることである。

俗信については、「民俗知識」をはじめ、「衣食住」や「生産生業」関係の各項のところにも、関連することであるが、信仰という立場から(形式上)、本草でも、一節を設けて、取扱うこととした。資料が分散してしまって、本草では、そのごく一部をとりあげたという形になつたが、信仰の延長、あるいは、隣接する部分として、俗信を取りあげたものである。

一、神道関係の信仰

本節では、村内の神道関係の資料をまとめてみた。各大字のいわゆる鎮守様に関する信仰資料を中心にして、その他コウチの神についての信仰などをとりあげたものである。この中では、長良神社の信仰が注目される。長良神社は、旧邑楽郡下のみ祀られているという特殊な神社である。本社でもムラの鎮守様として、また一家のウジガミとして祀られているが、特別の神事とか信仰はみられない。

(井田安雄)



諏訪神社 水害よけに高く土盛りしてある。(江口)
(板橋春夫撮影)

(侯)

諏訪神社 江口の鎮守様は諏訪神社で、祭日は七月二十七日。これが本祭りで、二十六日の晩はヨイマツリ、二十八日は厄神除けであつて、昔は祭礼にはササラが出た。四つのコーチにササラバンがあつた。一年毎にカミ・ナカ・シンデン・シモグミの順にまわる。昭和五十六年はカミがササラバンである。

七月二十六日の晩は旗を上げたり、ハナをこしらえた。これはササラバンの人が中心になってやるが、各戸一人は必ず出ることになつての信仰などをとりあげたものである。この中では、長良神社の信仰が注目される。長良神社は、旧邑楽郡下のみ祀られているという特殊な神社である。本社でもムラの鎮守様として、また一家のウジガミとして祀られているが、特別の神事とか信仰はみられない。

栗島神社 旧佐貫村の郷社。春祭は四月十四、十五日。獅子頭はあるが、ササラ(獅子舞)をした覚えはない。七月十四日(十六日)に厄神除、獅子頭をかぶつて村中回ったことがある。去年から納涼大会をする。

秋祭は十月九日、十日で、食い祭りだった。以前から十月十日に祭るが、オクランチとはいえない。

境内に琴平さま、天神さま、富士岳さま、三峯さま、その他の末社がある。(川

二十七日の朝早く神官が来て拝んでくれた。この時は氏子たちもいた。境内でササラをやったあと、役員の家を一軒一軒まわった。役員というのは、区長、社寺統代四人、協議員（各コーチに一人ずつ）八人の計十三人である。この役員の家をまわった。この日はカミからシモにまわって夜遅くまでササラをやつたものである。昔は夜が明けてしまうこともあった。

二十八日は厄神除けで、厄神除けをやってもらいたいという希望の家だけをまわった。これをウラザサラともいつた。厄除けはカミからシモにまわってきた。神官が切ってくれた幣束をムラ境のカミ（梅原の古森との境）とシモ（千津井との境）の二ヶ所に立てた。立てる時に社寺總代と評議員もついていた。厄神除けをするところに悪いものが入つて来ないという。厄神除けの道順はきちんと決まつていてまだがわぬようになつた。今でもやつていてる。

なお、ササラは笛が四、五人いた。戦後しばらくやつていたが、現



山王様（江口 天川繁家）（板橋春夫 撮影）



青龍神社（矢島）（板橋春夫 撮影）

在はやつてない。道具などは諏訪神社境内の蔵に保存されている。（江口）

山王様 江口の天川繁家の北西に山王様の小祠が祀られている。繁氏の祖父が受けたもので、当家では日枝神社とも呼んでいる。正月に供え物をする程度である。昔は、下の病にかかった女性がおまいりに来て、治ると腰巻きをあけていた。（江口）

雷電様 旧暦五月一日に板倉町の雷電様を行つてお札を受けてきた。この札は麦畑に立てておくと雷よけ、ヒヨウよけになる。（江口）

青竜神社

遍照寺コウチに祀られている。

蛇 蛇を祀つてあるという。お産の神様といわれている。祭日は四月四日と九月四日。遍照寺コウチの人たちが祀つてある。コウチの人が、酒、肴をもよせて祀つていてる。

姫姫 姫姫はあげてある旗を借りていつて、腹にまいた。新しいのをつくつてかえした。（矢島）

長良神社 村社長良神社の春祭りは四月十五日、秋祭りは十月十五日で、神主が立ち合つて、春は五穀豊穣を祈り、秋はお礼をいう。春

秋の祭礼には長良神社の社務所からオネリの一行が出て、神社まで約百mを行く。オネリは神主一人、助手三人（村の人）、太太鼓1、小太鼓2、笛1、その他の村の人が付いて行列をつくる。神楽や獅子舞はなかつたが、秋祭りには万作踊りをした。大正初めころまでやつた。のぼりは長さ十m以上もある大きいのが二本あり、コウチで順番が決まつていて、柱を立てる。最近はのぼり番は女たちが出るので、柱が立たれない。その上、旗幟も道路拡張で片付けたものもあるので、のぼりを立てなくなつた。のぼり竿の先には杉の枝に青い葉が付いたままさした。（大輪）

長良神社の棟に竜の姿をしつくいで作り付けてある。九末社を祀りこんである。

菅原神社
村
木宮



長良神社のぼり（正月）（下江黒）
(関口正巳 撮影)



長良神社（大佐貫）（池田秀夫 撮影）

長良様については、特別の伝承はない。（矢島）
下江黒の長良神社は、瀬戸井の長良神社からの分社であるといわれている。

長良公は、佐賀荘の豪士という。（下江黒）

長良神社は藤原長良を祀る。祭りは四月十五日、秋祭りはナカノクニンチ九月十九日。長良様の中に天王様を祀る。昔は天王様は七月十九日二日に祀り、笛を吹いて毎戸を廻り、祭り当番は若衆二十人位でやつた。この天王様は女性であるという。（大佐貫）

長良様についての特別の伝承はない。大佐貫の長良様は古く、瀬戸井（千代田村）の長良様は、「ここから分社したもの」といわれている。

長良神社の祭典は、春まつりが四月十五日、秋まつりが九月十九日で、ナカノクニンチにおまつりをしている。秋まつりのことは、お日待といつてある。このときは、ムラからわきへ嫁にいった娘たちをよんだり、親戚へ赤飯（重箱に入れて）をくはつたりしている。よそへ出たものは、お土産をもつて、お客様にきた。泊りこみでお客にきたよそへ出た人は、お日待によばれてくるのが楽しみであったという。（大佐貫）

長良神社氏子改帳 明治六年四月二十日に作製した帳面がある。第七大区八小区上野邑業郡大輪村一番、六七七番まで記録してある。（大輪）

八坂神社

祭礼は旧暦六月十日だったが、新暦七月十日・十一日に

岩島神社	村
諏訪神社	堀之内
熊野神社	木宮
羽黒社	石宮
神明社	石塔
三島神社	碑
稻荷神社	東新田
菅原神社・琴平神社	宿
長良様のお祭りは七月二十三日で、昔はポンデンを川の中でもんだ	小出組
といふ。長良様は明治四十三年に諏訪神社に合祀された。（江口）	今宮
長良神社には、春・夏・秋の三回おまつりがある。春祭りは四月十五日、夏祭りは七月十五日。これは天王様のまつりである。秋祭りは十月十五日。現在はそれぞれ十五日に近い日曜日を祭日としている。	木宮

（大輪）

長良様のお祭りは七月二十三日で、昔はポンデンを川の中でもんだといふ。長良様は明治四十三年に諏訪神社に合祀された。（江口）

長良神社には、春・夏・秋の三回おまつりがある。春祭りは四月十五日、夏祭りは七月十五日。これは天王様のまつりである。秋祭りは十月十五日。現在はそれぞれ十五日に近い日曜日を祭日としている。

（大輪）

長良様のお祭りは七月二十三日で、昔はポンデンを川の中でもんだといふ。長良様は明治四十三年に諏訪神社に合祀された。（江口）

長良神社には、春・夏・秋の三回おまつりがある。春祭りは四月十五日、夏祭りは七月十五日。これは天王様のまつりである。秋祭りは十月十五日。現在はそれぞれ十五日に近い日曜日を祭日としている。

天王様（八坂様）のお祭りは夏祭りで、神輿を担いで地元の有力者宅を回った。神輿は明治四十三年の大火でこわれた。（南大島）

天王様の祭りは、夏祭りである。七月十五日の行事。

祭りばん（十五人）の人が、燈籠をはつてたてた。

おみこしをだした。これも祭り番の人がかついた。天王様のみこしは、一戸一戸まわった。しかし、みこしが寄る家と寄らない家とあつた。大尽のうちとか、役員のうちへは寄つた。おさいせんと酒をだしてくれた。天王様には、キュウリをあげた。

こここの天王様（みこし）は女天王様といわれ、あまりもまなかつた。

天王様のみこしがまわつていかないと、そのうちへは、疫病神が入るとしておられた。

なお、ここでは、キュウリのまるぎりは食べるなどといった。キュウリをまるぎりにするときり口の模様が、天王様の紋と同じかたちであるからという。

天王様の翌日にやくじんよけをする。（矢島）

七月十五日が八坂神社の祭日。この日みこしをだした。笛・太鼓でムラ中、毎戸をまわつた。

むかしは、ムラのわかいしゅがかつてゐた。現在はまつりばんの人がかつぐ。

こここのみこしはかざりみこしで、もみ天王ではない。

みこしがまわつていつて、役付の家とか、大尽のうちでは、ご馳走をだしてもらつて、飲んだり、食つたりした。（大佐賀）

笠鉢は八坂神社の祭礼には、上と下から一本ずつ笠鉢を作つて立てた。祭りの前日に笠鉢作りに出て、色紙を使ってきれいに傘形に飾り付け、回りに竹ひごにさくら紙を巻いた花飾りを出した。上の行灯には「八坂神社・天下泰平・五穀豊穣・村内安全」と四面に書いた。八坂神社の参道には灯籠を二十本も立てるが、灯籠には絵や川柳が書かれた。各家々でも家のカドに灯籠を立てた。（大輪）

笠鉢は万灯のこと、祭りの時飾り花を下げる飾り、庭に立てた。子どものころ作つた。（南大島）

巖島神社 南大島の鎮守は巖島神社である。通称は「弁天様」で、みなこちらの名前を使う。氏子は南大島の全戸である。神社の境内には弁天池と呼ばれる池がある。池の主は蛇であるといい、夜、神社に参りに行つた人が大蛇が池から出でてくるを見たという。早魃の時は、この弁天池の水を馬のスソダライ（馬の足を洗うタライ）に入れて、各コウチを回つてその水を掛けで歩くと雨が降るといつた。

祭日は、春が旧四月十五日、夏が旧六月十五日、秋がナカノクンチで旧九月十九日であるが、現在は新暦の月遅れで行つていて。

春祭と秋祭は、ほぼ同じことをする。祭日の前の日をイノリ、イノクチといい、神社総代が来てお宮の掃除など祭の準備を行つた。また、この日、各家では近いシンセキがよびあつて泊る。嫁に行つた娘も帰つてくる。祭日には梅原の三島神社の神官を頼んで祝詞をあげてもらい、終わればみなで飲み食いする。列席するのは、区長、村委会員、神社総代、宮番などである。他の人は各自お参りする。

神社関係の役員などは次の通りである。

○位の割いた竹を刺した。

神社総代……任期四年で各コウチから一名ずつ選ばれる。

宮 番……祭のたびに各コウチから一名ずつ選ばれる。

宮 番……祭のたびに各コウチから一名ずつ選ばれる。

タテ番……幟を立てる役。コウチの回り番である。番に当つたコウチは出られる人がみな出て、幟を立てる。幟の先には杉の葉をつけた。祭りの前日に笠鉢作りに出て、色紙を使ってきれいに傘形に飾り付け、回りに竹ひごにさくら紙を巻いた花飾りを出した。上の行灯には「八坂神社・天下泰平・五穀豊穣・村内安全」と四面に書いた。八坂神社の参道には灯籠を二十本も立てるが、灯籠には絵や川柳が書かれた。各家々でも家のカドに灯籠を立てた。（大輪）

巖島神社は通称を弁天様という。水を鎮める水神で、境内に二つの

池がある。御神体は高さ三〇cmほどの姫神の木像で、六十年ごとに乙巳年に御開帳がある。春四月十五日が大祭、夏祭は旧六月十五日(今は七月十五日)、秋祭は旧九月十九日(今は十月十九日)。明治三十四年まで、夏祭には谷田川に提灯船(長さ四間、幅一間)を二艘出した。船を飾り立ててダンを作り、踊りをしたり、花火を上げて有名だった。船は昭和三十八年にこわした。(南大島)

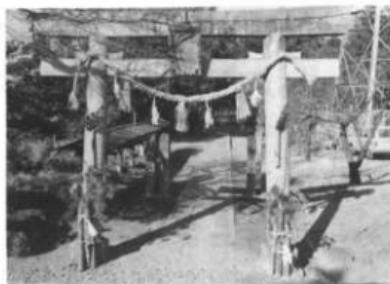
巣島神社は南大島に祀られている。弁天様を祀っているという。(大佐貫)

三島様 千津井の産土神は三島神社で、明治の神社合併で愛宕さま、天神さま、八幡さま、戸倉さま、稻荷さま、雷電神社も合祀されている。三島神社は梅原にも一社あるが、あとは上の方に一社あるだけといわれている。昨年、本社に氏子たちが参拝に行って来た。御神体としては丸い鏡で、藤原——という名のある柄鏡の柄をとつて祀っている。

河川改修で利根川の流れの中に入ってしまった。大正二年に現在地に移転し、今年完成した。(千津井)

三島神社の祭り 春は三月十五日、夏は七月二十四日で、このときは二十三、四、五日の三日間あり、秋は十一月十五日の三回ある。七月の祭り

は二十三日に神社で祭典があり、電害と五穀豊穣の八丁ジメを立てる。高いところへ立てるので氏子がハシゴなどを用意していく立てる。二十四日には早朝、有力者の先輩の



三島神社(梅原)(関口正巳 撮影)

家の庭で舞う。また希望を受けてやる。二十五日はササラをする。サラに参加する者は、青年の場合と村全体の場合とがあった。二十六日は祭りに使った道具を整理・洗たくして、収納箱に納めてから慰労会(ナオライ)をした。例によつてやることで、もらつた御神酒なども処分した。残るとコウチ毎に分けた。(千津井)

ササラ 三島神社のまつりは七月二十三日で、今はやつていないが、昔はサラをやつた。頭は神社に納まつていて。(千津井)

コウチの神 コウチことに神様を祀つていた。下新田は野熊神社、東新田は羽黒山、堀之内は諏訪社、馬御屋は三島社を祀つた。(大輪)

各コウチに祀つている神は、二軒 今宮神社 本郷 八坂神社 七軒 稲荷神社 道祖社 新田 神明宮

八軒 菅原神社 稲荷神社 中 嶽島神社(長良神社、菅原神社、船玉神社)(南大島上)

野木様 冬の寒いとき、あたたかい日が続くと、野木様がおひなたにてて、あつたけそやといった。おひなたは一週間くらい続く。これが終ると、おいけといった。あつたかいいがりが寒くなる。あつたかいい日が続くとそのあと、寒くなるといった。

野木様は百姓の神社という(大佐貫)

春祭り 三月二十五日は諏訪神社の春祭り。ササラは出ず、神官が祈禱をしてくれる程度であった。社寺総代、協議委員、ササラバンが出席した。(江口)

オヒマチ 一年のうちでオヒマチと呼ばれるのは九月十九日の長良神社のお祭りの日だけである。この日は、家から出た子供たちがお客様にくる。(斗合田)

秋まつりのことを、お日待といった。このときは、わきへ行つて、子どもたちを招待したり、あるいは赤飯をくばつたりした。子どもたちは、土産を持って、泊りがけでお客にきた。

また、個人の屋敷神（星数鎮守という）の祭りもお日待といった。

ムラのお日待と同じ日に祀る。（大佐賀）

祭り当番 祭り当番は、ハンドウバンに分れていた。カミコーコとダイコーコ、ヒガシコーコとウシロコーコの二つに分れ、一年おきにつとめた。（田島）

祭典費 年間の神社の経費は毎戸千円ずつ、御神酒は役員の人や商店などから上り、サララの羽の修理などは有志の寄附によつている。祭りのときサララを舞つてもらつと、ジュウス、酒等の外に三千円ほどの金壺封を包んでくれた。（千津井）

ゴフ 神社の祭りのときは海のもの山のもの最低五品を上げる。果物、野菜、米、かしらつき、塩、その他にお供えのもちを上げる。ものは社寺統代の家でつくことになつたが、近年は業者に頼むことが多くなつた。ものは神主に持たせてやるが残りは切つて祭りに参加した人たちにゴフとして配る。（千津井）

社寺統代 千津井で五名、三コウチのうちオギノクボが小さかつたので一名で、他の二コウチが二人ずつだつたが、近年オギノクボは家数がどんどん増えて最大になつたので、各コウチ二人ずつ、計六人になつた。ある程度の年齢になつてゐる学識経験者で、時には親がやりますがやる式の有力者の場合もある。（千津井）

二、仏教関係の信仰

本節では、仏教関係の信仰資料をまとめるところにする。調査資料がすくないので、その一部しかとらえられないが、便宜によつて、資料をつぎのように分類してみた。



薬師堂 (田島) (板橋春夫撮影)

(一) 薬師・地蔵・觀音信仰 (二) 念仏と月待・日待 (三) その他
なお、庚申講については、主として「社会生活」のところで扱つてあるが、信仰という立場から、本節でもとりあげておいた。

(一) 薬師・地蔵・觀音信仰

薬師様 今は祀っていない。

もとは、毎月七日が縁日であつた。特に正・五・九月がさかんで、つまつて、念仏を申した。隣居様が五、六人でて念仏を申した。

念仏をさかんにしたときは、念仏と念仏踊りをした。扇子をもつて踊つたり、手拭をもつて踊つたりした。念仏踊りには、三林あたりからたまごを売りにきたおばあさんが教えてくれたものという。念仏

踊りは薬師様の念仏を申してから、余興にしたもの。

この念仏踊りは、昭和九年ごろまではやつていた。盆を

たたくものがいて踊つた。

盆と正月の十六日には、薬師堂に十王様の掛け軸をかけて祀つた。世話人がばんてで（交代で）出で、子供たちなどに仏教関係の話を聞いて聞かせた。たとえば、絵を見せながら、うそをつくとべる（舌

をぬかれるとか、ご飯をこぼすと、お碗から火がでるぞといつたりした。

十六日には、各家庭では、

五目飯とかすしなどをつくつ

て仏様にあげたり、うちの

ものが食べたりした。(矢島)

薬師堂 三十三年に一度

開帳している。近年では、一度

昭和三十五年に開帳した。

縁日は四月七、八日。(田島)

地蔵さま 墓地の中には

くつかある。個人もちで、

八月二十三日にコウチが集

まつて念仏をし、子どもた

ちにお菓子をくれたりした。

昔のことである。(千津井)

地蔵様は八月二十三日が

葬式のときには、地蔵様に線香とだんごをあげる。地蔵様が死人をいいところへ導いてくれるといった。(大佐賀)

いぼ地蔵 集会所のうらの墓地内に地蔵様が祀つてある。お堂がある。縁日は七月二十三日。この日、むかしは、盆踊り大会があつた。昭和五、六年のころ、八木節大会であつた。

この地蔵様は、いぼ地蔵といわれ、いぼをとつてくれるようになると願生をした。いぼをとつてくれれば、自分の背の高きだけ、だんごを糸につるしてあげますといつてお願生をかけた。(入ヶ谷)

乳房の地蔵様 乳房の地蔵様とよばれていた地蔵様がある。この地蔵様の境内にはイチヨウの大木がある。この地蔵様におまいりすると、乳がでるようになるといった。



中谷集会所 境内の地蔵堂

(根岸謙之助撮影)

姫島が五ヵ月目になると、はらおび(六尺の長さ)をしめたが、このはらおびは、地蔵様から借りていつてしめた。安産になると、一反のきれを買って地蔵様におかれしをした。(矢島)

岩船地蔵 うちのもののがなくなると、岩船地蔵へおまいりにいった。彼岸のうちにおまいりにいつて坊さんにお経をあげてもらい、塔婆をあげてきた。(入ヶ谷)

岩船地蔵は、新盆のときとか、彼岸の中日などにおまいりにいつた。だれが行つてもよかつた。ふつうは仏の近親者がいつた。地蔵様へ行つて、お施餓鬼をしてもらつて、塔婆をたててきた。彼岸の場合は、

岩船地蔵は子育地蔵。個人的におまいりに行く。

人がなくなつた場合には、彼岸のときには、施餓鬼をしてもらい、塔婆をたててくる。(大佐賀)

岩船地蔵は子育地蔵。個人的におまいりに行く。

人がなくなつた場合には、彼岸のときには、施餓鬼をしてもらい、塔婆をたててくる。(大佐賀)



大佐貫 東光寺境内
(池田秀夫撮影)

馬頭観音堂 昔、源義家

が奥州征伐に行くとき祈願

したという。そのとき村の

奈良原作左衛門が家来で從

つて武功をたてて帰つてき

た。恩賞として江黒鹿毛と

いう馬をもらった。それが

亡くなつたので馬頭観音を

祀つた。堂は四方開きであ

る。本尊はこわれてイキ塔

婆でつつかい棒をしておく

修理してぬりかえた。天井に竜の絵が描いてある。そ

の竜が夜な夜な台沼に水飲

みに出た。そのときは、さわさわと音をたてていていた。朝になつてみると、麦でも稻でも六尺くらい寝ていたといふ。(上江黒)

馬頭観世音 川俣公会堂の西に二基あり、向かって左は文政二年卯

辰三月吉日馬持中とあり、右は天保十三壬寅四月吉祥日とあつて、台石に当時の助郷の村名が刻んである。日光街道の往来に馬が使われた名残りといわれる。(川俣)

子育観音 大佐貫の観音様では、腹帯を貸してくれた。これを、妊婦が借りてきて、五ヵ月目のイヌの日をえらんで、腹にまいた。されば半反借りてきた。子供が安産できると新しいきれを買って、倍(一反)にして観音様へかえした。(大佐貫)

大佐貫の観音様の縁日は十七日。

八月十日がにぎやか。もとは旧七月十日が縁日であつた。

こここの観音様は、十一面観音で、子育てと安産の観音様として知られている。

身持になると、観音様のおさごを借りていった。これをお産の前に食べた。安産のあとおさごを倍にしてかえしてきた。

ここのおまもりをうけていつて、五ヵ月目の腹帯をしめるときに、腹帯の中にまきこんだ。

また、さらしも借りていつた。これをまいたもの。一丈借りて、一反(三丈)かえした。

なお、嫁にきたものは、二



念仏講(大佐貫) (池田秀夫 撮影)

日目にムラまわりをするが、このとき、神社へおまいりをしたり、観音様へおまいりしたりした。(大佐貫)

(二) 念仏と月待・日待

念仏講 每月七日に念仏講をやつた。「薬師様のパン」というのがあり、女衆は毎月三人ずつカドバンでまわつた。カドバンというのは家並み順のこと。カドバンは念仏を申す人とは別である。現在、念仏を申せる人は二十人くらい。

薬師様には目の悪い人がおまいりに来て、治ると「め」と書いた絵馬をあげた。

カドバンの人は団子を参詣人に配つた。この団子を食べると風邪をひかない。(田島)

(須賀) 十四日念仏 每月十四日に女衆が揃つてお念仏をする。和讃もある。

百万遍 百万遍はコウチごとにある。雨でも降ると「百万遍やるか」という具合で日は決まつていない。ハツグリは四月の堀ざらいの夕方にやり、ナカグリ、オレイグリとやつた。ナカグリは日は不定。オレイグリは、七月の農休みにやつた。(田島)

十九夜様 七軒耕地の七軒で祀つてている。祭日は二月十九日。難産



十九夜様(斗合田)
(上野勇撮影)

除外の神様であり、女の人方が主体で祀つてゐる。(南大島)

お産の神様は十九夜様。産婦の

おなかが大きくなると、十九日に月まつりをする。十九夜様は、館林の上三林に祀られている。妊娠した人は、子どもが生れるまで月まつりをした。十九夜様からたすきをかりてきて、産婦は腹帯をした。子どもが生まれると、お礼まいりをした。子どもをつれて、たすきを倍にしてかえしてきた。おさいせんとおさごをあげる人もあつた。

十九夜様の縁日に、夜おまつりに行つて、知り合い、一緒になつた（結婚した）人もあつた。この日は、青年男女がおまいりに行つた。（入ヶ谷）

昔は毎月一回まわり番の宿に集まり、赤飯、煮物、おだんごをつくつて十九夜様を祀つた。子どもの安産と無事な成長を祈るもので、十九夜様の掛軸をかけ、供えものをしてロウソクを立てる。供えものにはオサゴもあり、長い念仏——十九夜念佛を上げる。オサゴはもらつて帰つて炊いて食べると安産になる。またロウソクも借りて行つてお産のとき立てると早く生まれるという（千津井）

十九夜様は、女神様である。館林に十九夜様があつて、十九夜念佛が行われた。若い娘はみなおまいりに行つた。それを目当てにして若い衆も遊びに出かけた。そこは若い男女のデートの場所であつた。（中谷）

千津井の上組、沖之坪、下組の三コ一チに十九夜念佛の組がそれぞれあつた。下組は現在はやつてないが、上組と沖之坪では今でもやつている。

昔は毎月旧暦十九日に、夕飯を食べてから宿の家に集まつた。掛軸をかけ、ロウソクをつけて拝んだ。このロウソクは、特に短くなつたのをもつて帰り、お産の時に、その短いロウソクが消えるまでに生まれるようにといまじないに使つた。

十九夜では、主に姑が出た。夕食後あつまり、夜十時頃解散した。十九夜様には女衆しか集まつた。（千津井）

十九夜様を祀るのは、毎月十九日で、きょうはどこの家と順番を決

めて宿を回つて、集まつた。今は回らないで、年一回だけ新年会をこめて、料理屋でしている。安産祈願のために頼む人と、お礼参りの人ために頼む人となる。宿に掛軸を掛け、十九夜念佛を唱えるが、ろうそくとオサゴ（米約五匁）は持ちよる。ろうそくは念佛を申しながら短く燃えるまで置いとき、そのろうそくをお産の時に使う。そのろうそくは火をつけたままと燃え尽きるまでに生まれるというので、早く生まれるように短くして持ち帰る。オサゴは供えてから持ち帰つて、お粥をたいて産婦に食べさせて、安産を祈る。十九夜塔（三島神社境内にある）にお参りに行く。（千津井）

三夜待ち 仲のよい女性同士がする。宿は交代。旧の一十三日の晩にする。

おなべをしまつてから宿へあつまつた。

三夜様は女の神様という。

娘たちが三夜まちをしているところへ、わかいしゅが遊びに行つた。（矢島）

二十三夜待ちのときは、月待ちをして若い人が男も女も集まつてオダをあげ（にぎやかに談笑して）た。（千津井）

機織りして夜おそくまでやつているとき「三夜さまが出て来たからやめろ」といわれたことがある。（千津井）

お三夜待ちは女の神様であり、目の神様もある。三夜待ちには寿司を作つて食べる。女衆がハタを織るので、ハタオリの夜なべがすんだから「今夜は〇〇の家で宿をすつから、集まつてくれや」と近所にふれる。各自お金を出し合つて、御馳走の材料を買い、おでんやカルメヤキなどを作つて食べた。三夜待ちは若者の祭りで、男も女もいつしょであった。娘がハタを織つているところへ若い衆が出来かけて行き「はあ夜なべなどよして、三夜様をすべえ」と言つて誘う。冬期には娘が火鉢を足もとに置いて、暖をとりながらハタを織る。そこへ若い

衆が出かけて行つて、火鉢を取り上げて、娘をせかせたりした。(中谷)
十一月二十三日をサンヤマチといい、女衆のまつりで若い娘が宿に
よつた。お月様があがるまで騒いでいた。(千津井)

観世音

一、きみようちよらいかんぜおん

むかしわしほみようによらい

みらいもこうみようくどくぶつ

十だいがんも海ふかく

いまこのしやばにじげんして

いきとしいけるものため

だいじだいひのてをたれて

しじゆにさいどなしたもう

なむだいしかんぜおん(三べん)

二、たといばよろすのみずみで

一つのつきにうつること

かんのうれいげんあらたなり

きくもほうけのふもんほん

三十三に身をわけて

十九のせつぼうありがたや

七なんさんくみなめつし

にぐりようぐんもじょうじせり

なむだいしかんぜおん(三べん)

三、もしひとげんせわあんのん

ごしよもぜんしょもおもへなば

つね／＼ほさきをねんずべし

ねびぐあんのんのそちから

いかなるさわりものぞこうり

五

二、なむだいしかんぜおん(三べん)

わたりにふねをいむならん

れんげのだいじさゝげきて

ずいぐわんせうじやうとげしめり

これこのばきつをしんぜずば

ねん／＼うたがうこゝろなく

まことにちようらいいたすべし

むじようじんじくみよほう

ひやくせんまんこうなんそうぐうが

こんげんもんとくじゆじ

ぐあんげんによらいしんじつき

なむだいしかんぜおん(三べん)

三、かんのんぎよう

かんぜおんなむぶつ

ようぶつういんよぶつ

うえんぶつぼう

そうえんじょらく

むりようふくとくあつまりて
春のあしたになくとりも
あきのゆべのむしのねも
なむだいしかんぜおん(三べん)

ひつきようほんのんかいちゆうをん

もんしようごとうののりのこい

げにやあをぐもろかなり

さてまたきよじやのりんじうわ

なむだいしかんぜおん(三べん)

わたりにふねをいむならん

れんげのだいじさゝげきて

ずいぐわんせうじやうとげしめり

これこのばきつをしんぜずば

ねん／＼うたがうこゝろなく

まことにちようらいいたすべし

むじようじんじくみよほう

ひやくせんまんこうなんそうぐうが

こんげんもんとくじゆじ

ぐあんげんによらいしんじつき

なむだいしかんぜおん(三べん)

がじょう ちようねん
ねん／＼じゅうしき
ねん／＼ふりうしん
かんせおん

ありがたや さぬきと
だいし かんのんの
ひだりに高き 大もんの松

不 動 尊
ごまのある時におがむ
のうまく さんまん
だばさらだん
せんだ まかろしや
そわかや うんたら
たかんまん

不 動 尊
きみようちようらい ふどうそん
まことのしんじんする人わ
雨のふる日も風の夜も
雪のふる日もいといなく
道の小草をふみわけて
こうみようしんごんとないつつ
きたるゝ人わまことなり
なむありがたやふどうそん
だいしよいのるちから
げにゆわや石の中にも

ゞくらくぞうあり

西国三十三番 ごみか

第一番 きのくに なちさん
ふだらくやきしうつなみわ
みくまのゝちのおやまに
ひゞくたきつうせ

第二 きみる寺

ふるさとをはるばるこゝにきみい寺
はなのみやこもちかくなるらん
第三 小川寺

ちゝはゝのめぐみもふかきこかわ寺
ほとけのちかきたのもしのみや

第四 いつみのまきのうじ
みやまじやひばらまつばら
わけゆけばまきの寺にこまぞいさめる

第五 かわじのふじい寺
まいよりたのみをかくるふじい寺

はなのうてなにむらさきのくも
第六 やとのつぼさき寺

いわをたてみずをたゝみてつぼさかの
にわのいさごもじやうどなるらん

第七 やまとのをか寺
けさみればついをか寺のにわのこけ
さながらりの光りなりけり
第八 どうごくはせ寺

いくたびもまいるこゝろわはつせ寺
山もちかいもふかきたにかわ

第九 ならのなんゐんどう

はるのひわなんゐんどうにかゞやきて

みかさの山にはるゝうすぐも

よもすがらつきをみむろとわけゆけば

うじのかわせにたつわしらなみ

第十一 やましろうじのみむろ

けさまでわをやとたといたをいするを

ぬいでおさめるみのこたにぐも

だいじだいひのかんせんほさつしゝ十だい

五百しょめつみだじよどそくしんじよぶつ

おんぼけ

おんぼきやべいろしやの

まかばだらまにはんどま

じんばらはらばりたやうん(三べん)

おんあらびきやそわか(三べん)

おんかあかあかみさんまえそわか(三べん)

おんころ／＼せんだりまとうきそわか(三べん)

ふうどしやかもんじふうげん

じぞをみろくやあくしかんのん

せいしあみだあゝしくだいにちこくぞ

なまいだ／＼なまいだぶつなまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだんぶつ

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ(三べん)

なんまいだなんまいだ(三べん)

御茶上ける

一、わかきとてすいをはるかにおもうなよ

二、むじょうの風わ時をきらわぬ

三、のべまでわあまたおくりわおうけれど

これよりさきわひとりゆくなり

三、ありがたやのうけのじぞうだいぼきつ

四、あわれさよこいしきこきようをあとにして、あの世へ

御茶上ける

一、わかきとてすいをはるかにおもうなよ

二、むじょうの風わ時をきらわぬ

三、のべまでわあまたおくりわおうけれど

これよりさきわひとりゆくなり
ありがたやのうけのじぞうだいほさつ

みちびきたまいみだのじよどい

四、あわれさよこいしきこきようをあとにして、あの世へこさるゝか
なしさよ

一心ちよらい

一心ちよらいまんとくえんまん
しやかによらいしんじんしやり
ほんじほつしやほうかいとうば
がとうらいきょういがげんしん
にゅが心にゆうぶつがじこがしよう
ぼうたいぶつじんりきりやくしゅじよう
はつぱたいしんしゆぼさつきよ
どうにゅうえんじやくびようどだいち
こんしうちよらい(三べん)

一、せいしふうしやの

こうみようわ
ねんずるところを
なもあみだぶつ(三べん)

二、かんのんせいしの
こいをたづねて
なもあみだぶつ(三べん)

三、しゃばかいようわ
いとわばくがいを
なもあみだぶつ(三べん)

みながんにしくどく

ふきよう一切がどう
よしそうかいぐう
じよぶつどう
おんあらびきやそわか。(二へん)

大師様

一、ありがたやたかのゝ山の岩かけに
だいしのみやこをしたわんと
しょくくしきよの人びとわ
はるばる海山たどりつき
ついをちからに野に山に
雨のふる日も風のよも
いとわざ小道をふみしめて
こうみようしんごんとないつ
まわるしゅじょうをたすけんと
だいしわいまにおわします
きみようちよらいへんじよそん
昭和二年のやよいなる

御年六十二歳にて

たかのゝおくのゆわかけの
こんどうじやらにいりたもう
だいしみかどのおんゆめに
わかをえいじてたかのやま
むすぶいはりにそでくちで
こけの下にぞありあけの
つきとよまれしおんうに
ひわだいやうなるおんこも
おりたまふていまのよに

だいしのながれののりのみづ
うつるかおりのしようじよわ
いくちよまでもうせわせじ
なむ大師へんじょそん(二へん)

一、きみようちよらい ねんぶつで
しほうがためを いたすにわ
とうざいなんぼく しまりて
ひがしわせいしかんぜん

みなみはやくし しじうにん
にしわさいほう みだによらえ
きたはしゃかむに さんむんで
ごんちうしんに ふどをそん

しほうがためを いたしてわ
まをなすものわ それぞなし
きみようちよらい ごとうけの
おんとこのまにわ つるとかめ

をにわのかたを
おいうえまつが にほんたち
したわからまつに ひめこまつ
なかにとうぐいす すゞをかけて
こな一つが一どに みなはいて
御かないそろうで をよろこび

おんえわますます ごはんじよ
こらをめでたや をめでたや
きみようちよらい ごとうけの
あきのかたから ふくじんが

三、

こがねつくりの ゼにぐるま
ぜねにわはなさく かねがなる
よろづのたからを つけこんで
えんやらやらと ひきこんで
おんえわますます ごはんじよ
おかねがとしどし わくばかり
こらおめでたや おめでたや

昭和五十四年

とうばん じよう様

きくさんとおでんさん

春のひがん

三月二十四日

しづさんとたか

八月十三日

よしさんとふじさん

八月十六日

せつさんとおてさん

八月二十三日

じぞう様

昭和五十五年

とよさんとくまさん

とうばん じよう様

はなさんとちいさん

春の彼岸

三月二十三日

きくさんとおでんさん

ふじさんとしづさん

八月十三日

おくり盆

八月十六日

よしさんとたか

じぞう様

〃二十三日

おてさんとせつさん
秋、ひがんおくり

九月二十六日 昭和五十六年

とよさんとくまさん

とうばん 一月十六日

じょう様

三月二十四日

たけさんとちえさん

春彼岸
はなさんときくさん

庚申様

庚申様は五穀豐穰を祈る神で、もよりで庚申講をつくつた。

四〇軒の集落で三組あり、一組一四軒くらいの気の合った者同志で講ができる。ひと月一回ずつ回り番で宿をする。正月はうどん、二月はケンチントン汁・油揚・とり魚、三月は草餅などと決まつて。四月から忙しくなり休んで、取り入れが終えてから秋は毎晩のように続く。今夜はアンコロ餅、その次ぐ晩はオラ家でやるというようにして、一年間に順番でやつちやう。

庚申講はふんだんに食るのがよいので、宿でアンコロ餅を黒山に盛つて食べてしまう。食糧不足で配給の時代に（戦時中）持チ寄セ講を一回したが、お粥だった。

庚申講が終らないうちに地震があると、やり直しをしたので、三晩続いたこともある。

庚申様の箱に宿の順番が書いてあり、掛軸と黒壇の箸が箸箱入りで二〇膳くらいある。（大軒）

庚申講は、一〇軒内外の家で組んで行つて。この組合せは屋並みによるものではなく、とびとびであった。氣のあつた者同士で組んでいた。

庚申待は、暦をみて、六十日ごとの庚申日にした。この日のことをアタリビといつた。

庚申待は、暦をみて、六十日ごとの庚申日にした。この日のことをアタリビといつた。



右侧 天保七年丙申十月吉日
五百庚申塔
左侧 大佐賀村主惣講中施主
篠木藤右衛門（大佐賀）
(池田秀夫 摄影)



(銘文) 奉造立青面金剛庚申
講供養二世安樂祈所
企時宝永三丙戌天九月吉
祥日施主下江黒村中
(下江黒金剛院前)
(都丸十九一 摄影)

宿はくじびきで交代でつとめた。宿がまわりきると、最後の宿でくじびきをした。なお、宿は、シボク、チボクをかけた。その場合は、つぎの番の人と交代してもらった。

庚申の日になると、前の宿から庚申様の掛軸と枕（箱の中に入つて）をつぎの宿へもつていった。

庚申待には、親戚の者とか近所の人たちも招待した。近所の人たちは、めんいたを持つて手伝いに行つた。

庚申講の組の者はことは、トウニンズウという。

宿では、庚申様の掛軸をかけて、庚申様をまつった。庚申様は神様（作神様である）なので線香はあげなかつた。掛軸がかかつてゐるう



「明治参拾六年旧拾月拾日奉
納野本忠吉」とある下組の庚
申軸（千津井）

（板橋春夫 撮影）

ちに地震があると、その宿でつぐ晩にやりなおしをしなければならなかつた。

御馳走は、うどんが主であつた。宿へよつてうどんをぶつた。むかしはよつびて庚申待をしていたので、夜食にあづきめしをして食べた。

御馳走は、一度食べると、そのあと施主が強いた。客がもうたくさんだというのを、無理に強いた。はくほど食べさせられたといふ。

旧十月十六日も庚申様のアタリビとつて庚申待をした。このときは、ヨセドといつてもち米などをもよつてもちをついた。一軒で五合くらいの米をもつてきました。あんころもちをつくつて食べた。おそなえをつくつて、庚申様にあげた。これはあとで切つてわけた。このときき歩姿をしたものもあつたといふ。

庚申様の晩には、子どもをつくつてはいけないと云つた。今夜は庚申様だからやすめといつた。十六日の晩には、十六人も子どもができるといつた。「おはちかかえて断食」ということばがある。庚申様の晩には、亭主は禁欲しなければならないといわれた。

なお、庚申待の日に、庚申塔のところへはおまいりに行かなかつた。

（大佐貢）

庚申講 戰前までは七人くらいで講をつくつて庚申講をやつていた。庚申講は年に講員の数だけやつた。たいてい農閑期にやる。

御馳走は、うどんが主であつた。宿へよつてうどんをぶつた。むかしはよつびて庚申待をしていたので、夜食にあづきめしをして食べた。

御馳走は、一度食べると、そのあと施主が強いた。客がもうたくさんだというのを、無理に強いた。はくほど食べさせられたといふ。

旧十月十六日も庚申様のアタリビとつて庚申待をした。このときは、ヨセドといつてもち米などをもよつてもちをついた。一軒で五合くらいの米をもつてきました。あんころもちをつくつて食べた。おそなえをつくつて、庚申様にあげた。これはあとで切つてわけた。このときき歩姿をしたものもあつたといふ。

庚申様の晩には、子どもをつくつてはいけないと云つた。今夜は庚申様だからやすめといつた。十六日の晩には、十六人も子どもができるといつた。「おはちかかえて断食」ということばがある。庚申様の晩には、亭主は禁欲しなければならないといわれた。

なお、庚申待の日に、庚申塔のところへはおまいりに行かなかつた。

（大佐貢）

庚申講 戰前までは七人くらいで講をつくつて庚申講をやつていた。庚申講は年に講員の数だけやつた。たいてい農閑期にやる。

大師様 矢島の薬師様のお堂の中に大師様が祀つてある。大師送りのときには、ここへもおまいりにきた。

今でも、三月二十一日には大師様といつて、大師様のおすがたを集会所にかざつて、おまつりをしている。

当日には、各戸から米を一合ずつあつめ、当番の人があづきをだし、あかいごはん（あづきめし）をたいて、おむすび（三角）にして、おまいりにきた人たちにだしてやる。（矢島）

大師送り 旧三月二十一日、館林の善導寺を出発して、邑楽郡中の大師様へおまいりしてまわつた。

人の福を聞いて、自発的に参加したもの。寺でえりかけ（製装）を

夕食前に宿の家に寄つて、床の間に掛軸をかけてロウソクをあげた。

お膳もつけた。庚申講の御馳走は、ウドン・ボタモチ・ケンチン汁・五目飯などで

あった。庚申様は作神で、仕事の早い人のことを「庚申様みたいだ」などといふ。庚申の日に、子が産まれるとよくない。（千津井）

ヒガシコーチでは今も庚申講をやつていて。庚申講は五六六人の有志でやつていて。

昔は一年に六回やつた。宿はまわり番で、庚申様の掛軸を床の間にかけてやる。庚申箸で小豆飯を食べた。夜食はウドンだった。

庚申の夜は寝ていけない。その晩は夫婦が同衾してはいけない。庚申の晩に身ごもると生まれた子供は悪縁になるという。

庚申様の誕生日は旧の十月十四日という。（上江黒）

青面金剛供養塔 下部に庚申信仰の三猿が刻まれたりつぱなもので「天文五庚申天雷月吉祥日 施主村中」とある。（川俣）

（三）そ の 他



不動堂 (大佐貫) (池田秀夫 撮影)



昆沙門 旧本陣家で祀る (川俣)
(間口正巳 撮影)

(大佐貫)
不動尊

長良神社の北隣に不動尊の堂があり、西脇に弘法大師を祀る。前方に八坂神社と道祖神の社があつたが、現在は南の道端に移してある。(大輪)

昆沙門さま
育ての神として隣村からも毎年ショウガを上げに来る人がいた。(川俣)

弁財天

「須賀西池埋立組合一同建立」と裏にあり、起工昭和三年一月十六日となっている。西池の埋立地の端に立つて、右に開田

碑がある。文政六、七両年度の利根川破堤により洪水となり、北池・西池ができる所を昭和三年に開田したものである。(須賀)

弁天様の主

文政六、七年の水害で大きな沼ができる。大輪の西池が一町八反、北池が八反ほどあった。北池は大正三年の御大典記念の事業として、ナラ山の泥を運んで埋めた。西池は昭和三年の御大典記念事業として、利根川の堤外から泥を取りてトロッコで運んで埋めた。一月十五日から作業を始めたが、けが人が出た。沼の主が埋められるのを嫌つてか人が出たのだろうということで、池の端に弁天様を祀つたら、次ぐ日からけが人が出なくなつた。作業が進んで



もらつて、それをかけてまわつた。一日でまわりきつた。

「ナムダイシ ヘンショウコンゴウ」と唱えながらまわつた。(矢島)

薬師送りは、むかしあつた。年寄の人が、白い手甲に脚絆をつけ、白装束で、菅笠をかぶり、「南無無照金剛」といしながら、あるいはまわってきた。

ムラムラでは、大師様(弘法様)を寺に飾つておいた。そこへ寄つておまいりをしたものである。ムラの人(寺世話人)がでていて、まわってきた人を接待した。おにぎりを飯台に一杯つくつておいて、あまりに来た人をもてなした。これは、三月二十一日一日だけ。

このことを、大師めぐりとか、大師送りといつた。弘法大師を信仰する人たちがまわってきたもの。子どもたちは、その人たちがまわってくると、「大師だ」といつて、その行列のあとをついていつたりした。この行列(一行)は鶴林の普濟寺を出発した。明和村関係では、新里—中谷—大佐貫—矢島—青柳の順であつた。

大師送りは、太平洋戦争がはげしくなつてきて、とりやめになつた。



弁天様 (須賀)
(土屋政江 撮影)

五反ばかり残すほど進んで来て、水をかい出して魚をたくさん獲った。最後にウナギと同じ格好した長さ五十cmほどの魚が泳いでいたのを、ウナギカキで引つかけて獲った。ほかの魚と一緒に鯨林の魚屋へ売つたが、そこから太田へ転売された。さらに転売された魚屋で料理するため製こうとしたら、コケが生えていて恐ろしくて負けない。これはウナギではないといつて、大輪へ戻されて来た。神官の家へ持つて行つて鑑定してもらつたら、「これを獲つた時に竜巻が起つたでしょう」といわれた。いわれてみると、当時は堤防の上に飯場事務所があつて、そこに春一番の竜巻があり、ガラスが外れて舞い上つたり、竹藪が倒れるほどだつた。そこで、これは弁天様の主だということになつた。

その後も、魚がおもしろいほど獲れた。養蚕用のザマ籠の中に一杯入れて、幾つも獲れた。マコモの中で手づかみでフナを取つていたら、ひとりがウナギがいたと手に取つて、トロッコの線路の向こうにはん投げた。よくみたら青く光ついていたので、「こりやウナギではないぞ」といつて、のめっこいからつかめないので、二匹を一緒にアルコール漬けにして、弁天様の御神体として祀つた。弁天様の石官の台座の中に、丸型のガラス瓶に入れて置いた。あとで、館林農高の博物学の倉野貞助先生がチヨウの採集に来た時に見てもうたら「これはカワヘビだ。ウナギではない」といられた。長い年月がたつうちに瓶の中が濁るようになつた。

今年の正月七日に弁天様のおおい屋を立て替えた時、ガラス瓶を子供がこわしたので、別の容器に入れかえて穴を掘つて地中に埋めた。弁天様のお祭りは正月七日で、くじ引きで世話人を決めて、参詣人ミカンをくれて祝つた。村に来た娘はお参りに行くし、初参りに回る人もいる。子どもが生まれる時には、安産にできるように、弁天様に頼む。(須賀)

弁天様 家族に具合のわるい人がいたので、行者に見てもらつたら、蛇がたかっているといわれたので、屋敷稻荷の中へ祀つた。塩や卵を供えて拝む。小泉の行者(男)でカチカチと拍子木を鳴らしながら「南無妙法蓮華經」と併んでくれた。この行者は亡くなつた。(川俣)

十王様 一月と盆の十六日に、十王様の掛軸を、集会所に飾る。この世話をするのが当番の人たち(荒寒と中内手から二人ずつ、合せて四人である。任期は一年)。掛け軸を飾つておくだけ。ムラの人がそこへおまいりに行く。(矢島)

三、屋敷神

屋敷神は稻荷様を祀るのが一般的である。その地の神として、八幡様とか天神様などを祀つてゐる例もみられる。(江黒)

屋敷神については、屋敷鎮守というのが一般的である。これも、本地方の特色といえよう。そのほか家ごとの屋敷神の祭りのことを、コビマチというのも、ムラの鎮守の祭りのことヒマチということに対するものであろうか。

屋敷神 屋敷神は、屋敷のイヌイのすみに祀るのがふつう。屋敷神のことは、ヤシキチンジヌミともいつてゐる。屋敷神としてまつてある神様はいろいろある。稻荷様を祀つてゐる家八幡様を祀つてゐる家、その双方を祀つてゐる家などがある。ムラの神社と同じ十月十六日(むかしは、旧九月二十九日のシメグンチ)と二月の初午の日に祀つてゐる。

初午の日には、スミツカリをつくつて、つとつこに、赤飯とスミツカリを入れて、屋敷神(稻荷様)に供えてゐる。ほかに、おしらきに豆腐を三角にきつたのと人参をあげる家もある。

むかしは、年の暮には一年ごとに、お宮(ワラミヤ)をつくりかえた家もあつた。



屋敷鎮守 板宮が多い (斗合田)
(都丸九十九一撮影)



屋敷鎮守 (須賀) (関口正巳撮影)



屋敷稻荷 (南大島上) 孝 (阿部撮影)

る。(大佐貫)
屋敷神は稻荷様を祀っているのがふつ
うである。屋敷のイヌイの方角に祀つて
ある。わら宮のうちもある。朱ぬりのお宮を
つくっているうちもある。屋敷神のこと
を、ヤシキチンジュ

なお、初午の日に、本家の稻荷様へ、分家の者がおまいりに行くと

(矢島)

屋敷稻荷は、初午にまつりを行なった。このように各戸毎のまつりのことをコビマチと呼んだ。屋敷稻荷を祀る方角は北西(いぬい)が多い。毎月一月一日はお参りをした。子供たちを守ってくれる神といふことだった。(新里)

屋敷稻荷は初午にお祭りをする。その時の供えものはスミツカリを上げる。大根、豆、油揚げ、酒を使ってスミツカリを作る。初午に出ないときは一の午に行なう。スミツカリは初午以外は作ってはいけないという。したがって、その一部を残しておいて次々と作る。豆は節分の年越の豆を必ず使うことになっている。大根おろしはオニオロシという道具で作る。(南大島下)

屋敷鎮守 篠木久司家では、屋敷鎮守として、八幡様を祀っている。おまつりは、もとは旧九月十九日で、ナカノクンチの日。この日には、もちをついて、おそなえもちにしてあげる。一緒に、ナミノハナ、おみきもあげる。主人があげていく。ふだん、かわりものをしたときにも、八幡様にはおはつをあげてい

といっている。

二月の初午の日に祀る。スミツカリをつくつて、だんごと一緒にわらのつとこにい入れてあげる。

縁に行くときには、本家とか分家のおばさんなどがつれて、屋敷神におまいりした。

子どもは、生後二十一日目に、うちの姑がつれて、屋敷神におまいりした。

子供の夜泣きのときには、あぶらげをあげて、なおしてくれとおがんだ。

おびときのときも、屋敷神と天神様(鎮守様)へおまいりした。(入ヶ谷)

屋敷鎮守は、昔は四本の柱を立て、わらでふいたものであるが、今は木製である。秋のお祭りのとき祀るのが普通だが、このオヒマチに対して、別の日に対する場合はコビマチという。また初午に祀る家もある。このように家によって祀る日が異なる。(入ヶ谷)

屋敷神のことを屋敷鎮守といい、台に石垣などを築いて高くし、木宮や石宮を上に置く形式が多い。隣に弁天様などを祀る家もある。(大

(輪)

屋敷鎮守として、駒宮家では八幡様を祀る。(大輪)

屋敷鎮守は稻荷が多い。初午に赤飯、スマツカリをツツコに入れ供える。

分家した時は本家と同じものを祀る。引起し、絶家の場合は、そこには残していく。(南大島)

屋敷鎮守の祭りは、二月初午の日にする。家によつては「正一位稻荷大明神」のハタを立てるが、特別の心願のある人も立てる。スマツカリをツツコに入れ、赤飯をたいて供える。(千津井)

屋敷鎮守とは、屋敷神のことと、稻荷さまを祀っている家が多いが、中には他の神さまを祀っている家もある。オカリヤを毎年つくるのがいいというが、五万・十万円も出して石の祠、木の祠をつくって祀っている。木ならまだいいが、石では永久になってしまふからよくないというが、オカリヤはなくなつた。新宅に出たときなどは、本家の稻荷さまの砂をもらつて行つて祀りこむとよい。(千津井)

屋敷神の一例（下江黒）

苗字	屋敷神名称	屋敷神	祠	祭日
青 山	屋敷鎮守	屋敷鎮守	祠	十二月、大安日
小 林	竈 稲 稲 天 八 稲 蕃	稻 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭	木 木 木 木 木 木 木 木 木	大みそかの前日と初午 一月二十五日
中 村	稻 稲 天 八 稲 蕃	稻 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭	木 木 木 木 木 木 木 木 木	初午
中 村	稻 稲 天 八 稲 蕃	稻 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭	木 木 木 木 木 木 木 木 木	初午
二十里	稻 稲 天 八 稲 蕃	稻 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭	木 木 木 木 木 木 木 木 木	初午
佐 藤	稻 稲 天 八 稲 蕃	稻 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭	木 木 木 木 木 木 木 木 木	初午
青 小 柿 沼	稻 稲 天 八 稲 蕃	稻 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭 荷 神 燭	木 木 木 木 木 木 木 木 木	初午

四、民俗信仰

本節では、神道や仏教の儀軌を離れて、民間信仰的要素の強いと言われる信仰例をとりあげてみた。俗信關係の資料については、別項を設けてまとめてることにした。

なお、他の章においてとりあげている信仰（たとえば、田の神信仰とか山の神信仰など）もあるが、本節においても、他の信仰との関係もあるので、本節においても、一部の資料を収録することにした。
道陸神様 どうろくじんさまは、足の神様という。長良神社の境内に石宮として祀つてある。慶応年間の建立である。おまつりはとくにない。

足がいたいときは、わらじをつくつてあげますから、なおしくださいとおがんしようをかける。なおれば、お礼として、わらじを片方だけあげる。むかしは、石宮のところに大きいわらじがあがつていた。どうろくじんさまについては、弁天様との恋物語が伝えられている。

屋敷鎮守は、稻荷様が多いが、八幡様もある。お宮は木のお宮だつた。(上江黒)

稻荷 南大島の八軒コウチの島田誠司氏の屋敷の一角にある。初午に八軒中で祀る。(南大島)

稻荷大明神を、南大島の七軒コウチで祀る。もとは、上赤生田字別当にあったのを宝暦十四年に移ししたという。コウチで掛軸をもつており、祭日の初午には宿に掛ける。(南大島)
田島のウジガミサマは長良様で祭日は七月二十三、四日。二十三日は宵祭りで二十四日が本祭り。本祭りには屋台を出した。昔は長良様から観音堂まで引いてきた。道が狭かつたのでコサ切りをしながら来た。(田島)

どうろくじんさまは、弁天様が好きになつた。ところが、どうろくじんさまは片足であつたので、一本橋が渡れなくて、弁天様のところへ行くことができなかつたという。(様木たい)大正二年二月二十日生れ)

館林市下三林に道祖神様が祀つてある。そこへ足の悪い人がおまいりに行つた。わらじを片方あげてくる。なおると両方にあげる。祭日は知らない。(入ヶ谷)

文字で道祖神と書いたものがある。道の神さまと思う。正月十四日にオタキアゲ(ドンドンヤキ)をする。古い御幣やお札、正月さまなど(ヨシでつくつてつるしたもの)を集めて燃した。(千津井)道陸神様は片足であつた。弁天様と恋をして、道端にまつてあるのだという。

嫁さんは、道陸神様の前を通らない。どうしてかというと、嫁さんが通ると、道陸神様がやきもちをやいて、縁切りをさせられる。そのため、むかしは、嫁娘は(下三林の)道陸神様の前を通らなかつた。御祝儀のときなど通らなかつた。(入ヶ谷)

道祖神はドクロクジンともい、この神様は足の病気をもつてゐるという。これにつけますと腹を立てられ足が痛くなるという。長良神社の境内に石宮があるが別に祭りはしていない。人ヶ谷の隣、館林市下三林の道祖神祠には多数のワラジが供えてある。足の悪い人が進ぜたものである。(大佐貫)

道陸神は足の神様といふ。足の悪いときは、道陸神様におねがいした。大きいわらじをつくつて片方だけあげた。

嫁の行列は、道陸神様の前をとおるなどといった。(矢島)

石尊様

大山石尊を祀る。以前は旧の六月二十七日、現在は新の七月二十七日に、コウチごとにコウチ内の決まつた場所に木製の燈籠をたてて、毎晩コウチの人が順番でお燈明をあげに行く。旧の七月十七



石尊様(南大島上)(阿部孝撮影)



「石」と刻んだ石尊様のトロウカ
(田島ダイコーチ)(板橋春夫撮影)

日、今は新的

八月十七日に

燈籠を取り払

う。燈籠をた

ての日と取り

払う日の晩は、

回り番で宿を

り飲み食いす

る。以前は、

回り番で宿を

決めて集まつ

た。(南大島)

入ヶ谷では、

石尊様の灯籠

は、集会所の

前に一ヵ所だ

け立つてゐる。

灯明つけは、サシバンの家からはじめた。（入ヶ谷）

石尊様のトウロウは、七月十七日にあげて、八月十七日に下げる。

コウチ中の人々が寄つてあげた。田島には四つのコウチにそれぞれあつた。竹や注連を用意する当番が四人いた。トウロウを下げる時は翌年の当番がやつて、四人のうち代表の家に翌年まで保管しておく。

トウロウをあげるとか御神酒をあげた。明かりをつけるのはカドバンでまわつた。石尊様は豊作の神。（田島）

石尊様は、阿夫利神社を祀る。もとでは灯籠を立てて、回りに竹垣を

結い、繩にキリハギを垂らした。ここには講はない。（川俣）

機神様 埼玉県羽生市下村君の機神様（オモンジユサマともいつた）

に正月中におまいりに行つた。使い古した針を持つていく人もいた。

境内に生えているクマ笹をもらつてきた。（千津井）

織姫様 機を織つていの頃は、栃木県足利市の織姫様までおまいりに行つたこともある。（田島）

水神宮 提防工事はつい最近

神社に納めておいた。最近できたが、その間は水神宮さまは三島水神宮提防工事はつい最近

神社に納めておいた。最近できたが、その間は建設省の許可が必要で、書類を出して認めてもらひ現在地に建てた。八月十九日がお祭りで、水あびに出てまちがいないように拝んだ。昔は盆おどりをしたりした。（千津井）

利根川の堤防の上に水神さまを祀つてある。水難にあわないよう村中で祀る。八月十九日にハタを立て、輪番で当番をし、一戸三十円くらいのオサイ錢を集め、酒を一升買ひ、手ごしらえの酒の肴（テンブラ・ナ・スヨゴシなど）で飲んだ。子どもにはお菓子をくれた。集まつて来る村の人たちは、「今日はお祭りでおめでとうございます」といつて挨拶する。（千津井）

水天宮様は、新堀川のそばに祀つてある。

水難事故を守つてくれる神様という。夏のころにおまつりをした。（入ヶ谷）

欠損

千津井の上組の水神様は現在、提防の上に祀られている。（千津井）

水神は水難に遇わないようによく祀つたもので、堤防を守る神。（川俣）

弁天様 昔は沢山蛇がいた。家を新築するときに蛇がいると弁天様の境内におさめに来た。青大将は弁天様の使だといつて殺さないで家から追い出す。

水塚にも沢山蛇が集まるので弁天様におさめに来たことがある。

昔は各家とも家の回りが竹やけや

きの林だったので蛇が住みやすかつたので多くいた。だから、機屋が

家に来たたんて天井から落ちて来たのでかくなつて避け帰つたことが

あった。やまかがしのことをズムグリという。（南大島下）

産婆稻荷 南大島八軒の木村巳一方の屋敷内に祀られている。八軒

ゴウチの神様として祀られていて、このゴウチから嫁に行く人、この

ゴウチへ嫁に来た人は、この稻荷様におまいりをする。組合のとしよ

りの人（女性）が嫁さんをつれておまいりにくる。オサゴとお金をもつておまいりをする。

一つのお宮の中に、八幡様と稻荷様が一緒に祀られている。安産の

神様であるとのうので、さんばいなりとよばれている。

祭日は、二月の初午の日。（南大島）

火伏せ稻荷 南大島の新田コウチで祀つてある。（南大島）

厄除け 七月のお祭りのとき、村の境（各字との境）に八丁ジ

メを立て、ここでササラ獅子舞をやつた。道中ササラの笛の音、太鼓のたたき方がちがう。十五年ほど前にやめているが、最近昭和会とい

うのが世話をして復活しようとしたがまだ実現していない。（千津井）

板倉の雷電神社にカドバンで一人ずつ日参してお札を頂いて来た。

田村仙藏

（左）



（正面）

欠損

（右）

お札をムラの境四ヵ所に立

てた。(田島)

八丁メ 正月に神主が切
つくれ、家の稻荷様にシ
メ繩をなつてこれを立てる。

十六枚に切つて、二枚で一
ボッチ、これを八枚である。



厄神除け 道路をはさんで両耕地で建てる
(中・本郷) (南大島上)

(阿部 孝 摄影)

落雷の注連 雷が落ちた

ところに竹を四本立てて注
連繩をはつた。こうすると
被害が広がらないという。

十六枚に切つて、二枚で一
ボッチ、これを八枚である。

十六枚に切つて、二枚で一
ボッチ、これを八枚である。



富士塚の上の富士嶽神社
(斗合田 長良神社境内)

(都丸十九一 摄影)

落雷したところに小祠を立
てることはない。注連

は先達に切つてもらって押
んでもらった。(千津井)

赤生田の蚕影さん 館林市赤生田の蚕影さんは五月一日がおまつり
になった。この行者がなくなるとき、富士山のほうから、富士山の姿を
田の中にうつしてくれた。塔の下の田のことを、みかけだとよんでい
る。この土地をつくると、よくないことがあるといわれている。

むかし、行者がやつてき
て、ここで病気になつてしまつた。この行者がなくなるとき、富士山の姿を

田の中にうつしてくれた。塔の下の田のことを、みかけだとよんでい

る。この土地をつくると、よくないことがあるといわれている。

ふつうは、ふじさんとよん

でいる。

厄神除け

道路をはさんで両耕地で建てる
(中・本郷) (南大島上)

(阿部 孝 摄影)

家に福を守るために、北西

の隅に造る。家の向きによつては玄関前にある家もある。(大佐貫)

魔除け 時期はかまわないが、鯉を食べるしつばを切つて、トボ
グチ(玄関)の壁にべたりとはりつけておく。猫がとつて食べたりし
ないかぎりそのままにしておくが魔除けといわれている。いまでもす

ることがある。(千津井)

山の神 埼玉県羽生に大天白神社があり、秋祭りには花火が上がり、
お参りに行つた。四畳ぐらい離れている。今もお祭りがあり有名である。
(川俣)

雨乞い 昔はオカボを作つていたので、日照りが続くとオカボがよ
れてしまう。そんな時、区長と協議委員がフレガシラになつて各コ
チをフレて歩いた。雨乞いは板倉町の雷電神社に行つて水をもらつて
きた。もらつてきた水の使い方は不明。

雨乞いのために稲葉で蛇の形につくつてムラ中をもんで歩いたこと
もあつた。(江口)

島

供養碑のおまつりはとくにない。(矢島)

赤生田の蚕影さん 館林市赤生田の蚕影さんは五月一日がおまつり
で、この辺からも出かけて行つた。蘭玉を持つていつたが、借りるこ
とはなかつた。お札を受けてきて蚕棚に貼りつけておいた。(千津井)

高鳥天神様 板倉町高鳥の天神様は正月十五日が大祭で、字が上手
になるようにと半紙に「正一位高鳥天満宮」と書いてあげててきた。(田
島)

家の神 家の神は家によつてちがいがみられるが、おおよそつきの
とおりである。

天照皇大神宮 神だなにまつる

ノリ



土間に飾る稻穂（今成久雄家）（南大島）
(池田秀夫 撮影)



足の悪い人が祈願して治るとカネのワラジを権現様にあげた。
(江口 諏訪神社境内)

(板橋春夫 撮影)

モロコシの箸を麻でゆわえて、便所の天井裏にはさんできた。(大佐貢)
来使うと安産で、楽にいくという。如意輪さまは昔から祀られていて、道路工事をするときにもそのままにしておいた。(千津井)
子の権現様 足の悪い時には、館林市赤生田の子の権現様におまいりする。なおるとカネのワラジをあげた。(田島)

秋の仕事も終つて骨休みみにするのである。団子は他家にやるのである。団子は他家にやるのだけアンコでくるみ、あ

メ繩は取外してもこれは取り去らずにおくのですすけて、多く残つている。(入ヶ谷)
オカマのダンゴ オカマ様(イロリの神様)を祝うもので十月二十五日(十一月二十五日の頃に行う。(または十月一日・十一月一日・ルスンギョウでするともいう)米の粉四升(六升)で一口団子位の大きさのものを作り、重箱に山盛りに入れアンコでくるみ、親類中に配る。この日子供達(男女共他所に出た子も嫁に行つた子も)を呼ぶ。

正月にシメ繩を毎年一本ずつあげる。他の神様にあげたシメ繩は取外してもこれは取り去らずにおくのですすけて、多く残つている。(入ヶ谷)
稻刈り、米つきなどすべてを終えてから、(カマアガリといふ)鎌二便所神 いろり・かまどの所
釜神様 井戸神 リ
かまどの神 便所神 台所
便所神 井戸
稻刈り、米つきなどすべてを終つた時にする鎌のお祭り。箕の上に稻刈り便所
丁を箕の上に並べ、オカマのダンゴを供える。(大佐貢)
カマアガリ 稲刈りが終つた時に供する鎌のお祭り。箕の上に稻刈りに使つた鎌を並べ、お灯明をあげて、赤飯または餅を供える。怪我をしないようにお祭りするのだといふ。(梅原)

カマガリは、カマアガリともいふ。稻刈りを終ると稻穂四、五本(または一株)と使用した鎌を全部箕に入れ、床の間または縁側におきこれに御馳走を供える。(入ヶ谷)
カマノフタ 盆の月にはいると、カマノフタがあくから、水浴びをしてはわるい(あぶない)といった。(入ヶ谷)
オヘヤ様 カマド神のこと呼び、火伏せの神であるが、別に供え物はしない。(川俣)

便所神はきれい好きといふ。

お七夜のとき、うちの便所へおまいりした。オサゴとかつふしと、しておいた。(入ヶ谷)

安産の神 如意輪さまが安産の神で、タスキを借りて

権現様 諏訪神社の境内に権現様の小祠がある。権現様は足の神様で、足の悪い人がおまいりし、治るとカネのワラジをあげた。子の権現が権現様と呼ばれるようになつたと思われる。(江口)

天神様と子の権現様 板倉町高鳥の天神様と館林市赤生田の子の権現様は仲が悪い。天神様の祭日が静かな日だと子の権現様の祭日には大風になるという。(田島)

今宮権現 南大島の一軒コウチで祀る。祭日は、正月十一日である。

十二社権現 十二社ゴウチにまつてあった。今は八幡様に合祀してある。(入ヶ谷)

ニユウジュサマ 六部を埋めたといふ。南大島の稻荷山で、八月十日に観音様、地蔵様と一緒に祀っている。(南大島)

五、俗信

本節には、俗信関係の資料をまとめておく。このことについては、別に民俗知識の章があつて、関係資料をとりあげているが、「信仰」においても、「応俗信関係の内容を含んでいるので、ここにも、「信仰」の中の一節として、「俗信」の項を設けることにした。したがつて、多分に便宜的なものであるが、「民俗知識」という新しい分類の仕方を尊重しながら、信仰に関連する事項として、「俗信」をここにも含めて扱うこととした。

(一) 予兆・占い・呪い

本項では、予兆・占い・呪いについての、資料をまとめてみる。この関係資料も、「民俗知識」の中でとりあげているが、「俗信」の構成上、ここでも、若干の資料をとりあげておくことにする。

予兆 予兆関係の資料には、つぎのようなものがある。

朝グモは縁起がいいといった。福グモといった。夜のクモはヌスツトグモといつてきらつた。(大佐貫)

カラス鳴きが悪いと、誰かが死ぬといった。(大佐貫)

うろこのついたものの夢をみると、縁起がいいといった。うろこのないものの夢は縁起が悪いといった。(大佐貫)

ひとだまがとぶと、だれかが死ぬといった。

ひとだまにひとだまをみなければ、その人は一生ひとだまをみないと出世前にひとだまをみなければ、その人は一生ひとだまをみないといった。(矢島)

占い 占い関係の資料として例をあげておく。

大正年代に千津井に御嶽さんという人がいて祈禱をしたりして

いた。病気のときとか、九死に一生というとき、想像につかないことがあつたときなどに頼んで拝んでもらつた。ママ(不幸なこと)ばかり続くときは何かタリがあるのではないかというのでみてもらわう

人はいまでもいる。(千津井)

地震による占い むかしは、地震のあつた時間で天候を占つた。

「五七が雨に、四つひでり、六つ八つとなれば、風と知るべし」。

矢島 呪い 呪い関係の資料は比較的多い。くわしくは「民俗知識」を参考されたい。

煙の盃難よけに天王様の旗を借りてきてこれを烟に立てた。旗は白地でそこに「奉納 八坂神社」と書いてある。返すときは二本にして

返す。(下江里)

かみなりよけとしては、蚊張をつけて、線香をあげる。(矢島)

折りくぎについては伝説で聞いている。ある人が重い病気になつたが不思議なことがあるので祈祷してもらつたら出たので、クギを探して抜いたら病気が直つたという。(千津井)

ふかしもの ふかしもんをするとき、塩をつまんで、かまどの前に三ヵ所においた。とくに、正月にふかしもんをするときにそうした。

ふかしそごのないようないいことである。(入ヶ谷)

あつけの場合には「足の裏にキュウリをすつてぬれ」といった。(矢島)

(二) 衣食住関係の俗信

衣服の俗信 ここでは、衣服に関する俗信を扱うことにする。このことについては、「衣食住」や「民俗知識」の章でも扱っているので、関係の箇所を参照されたい。

着物を縫うとき 糸の先にはふし(むすびめ)をつけろという。ふしせつけないで縫うのは、死んだ人の着物(さらしの着物)を縫うときだという。(矢島)

新しい着物をはじめて着るとき(仕立でおろしのとき)、しつけ糸をとつてから着るものだという。しつけ糸をつけたまま着ていると、恥をかくといった。(矢島)

人に着物を着せてやるとき、二人で着せるものではない。これは死人に対する着せ方だから。(矢島)

洗濯もんをとるときには、竿に袖をとおしたほうへはずせ。さかさに抜きつけなしにするなど。(矢島)

洗濯した着物は、一旦たんんでから着るものである。(矢島)

着物を縫つて悪い日というのは特にない。

着物を裁つては悪いのは仏滅の日。また、女の体がけがれているときには、いい着物は裁つたといつた。(大佐賀)

新しい下駄(はきもの)を、座敷からはきおろしてはいけない。下に一旦おろしてからはくもんだといつた。縁起が悪いといつた。仏様は座敷からはいてくるからだといつた。(矢島)

なわ帯はする。むかし、罪人はなわ帯をしめたからといつた。(矢島)

きれの長さは、本裁の場合には、四尺に裁つ。こうしておけば、ど

てら、ねまきにもなるといった。古くなつたときのことを考えて布を裁つた。(大佐賀)

それを裁つときに、三尺にたつた。(矢島)

それは、「二尺二寸の長さに裁つた。棺桶の長さと同じであるから」といふ。たとえ五分でも長くいろといった。(矢島)

てばり 人がでかけるとき(外出するとき)でばりを使うなど。(矢島)

食制関係の俗信 ここでは、食制に関する俗信をとりあげることにする。関係する内容としては、べつに「衣食住」や「民俗知識」の章でモリあげているので、関係するところを参照されたい。

箸と箸ではさみこをするな。これは、骨拾いのときのやり方だから。(矢島)

朝は汁かけ飯を食べるな。よそへでて恥をかくという。汁の中に飯をいれて食べるのならよいといふ。(矢島)

赤飯に汁をかけて食べるな。結婚式のときには雪が降るといつた。(矢島)

秋なすは嫁にくれるな。秋なすはうまいから。(矢島)

一月十五日のアズキガユをふいて食べるな。田植のときには、風が吹くといふ。また、花が散るともいう。これは、稻の穂が散るときのこと。(矢島)

おはちのぶちを、しゃくしてたたくな。オトウカがくるといった。(矢島)

オサキドウカがくるから、泣くなといつた。(矢島)

一月十五日のアズキガユを食べた茶碗を洗つた水を、うちのまわりにまけば、長虫がうちの中に入らないといつた。(矢島)

また、アズキガユを煮るときに、おかざりを燃す。そのときの灰をうちのまわりにまけば、うちの中に、長虫が入らないともいつた。(矢島)

米の飯 むかしは、月の一日、十五日には、かならず米の飯を食べ

た。(矢島)

人間の一生の食い扶持はきまつてゐる。そのため、大食すると、早死にするといった。(大佐貢)

土用(麦)もちは、肉になるからついて食えといった。(大佐貢)

アズキは脚氣の薬。(大佐貢)

住居関係の俗信 本項では、住居に関する俗信をまとめるにす

る。このことに関連する事項は、へつに「衣食住」や「民俗知識」の章でもとりあげているが、本項では、「俗信」という主項から、若干の資料をとりあげてある。右の関連する章も参照されたい。

家を建てる場合に、四二間の家をたてるなという。これは、間口四間に奥行一間というような家のこと。たとえ一尺でものばしてたてろといった。(矢島)

宝形づくりの家は、一般家庭ではつくるなという。(入ヶ谷)

入母屋づくりの家はよくない。出世がとまる。しんどまりになつて、その上大尽にはならないといった。(矢島)

古い家を買うとき、便所は買うものではないといふ。(矢島)

古い家を買った場合には、そのうちの先祖はもつてくれるものではないといった。(大佐貢)

古屋を買ったときには、梁など一本くらい古いものを使えといつた。(入ヶ谷)

家を建てる場合、つぎ棟はよくない。(矢島)

タツミ井戸はいい。イヌイの井戸もよい。いい水が出るといつた。(矢島)

土蔵は屋敷のイヌイの方角につくれ。(矢島)

屋敷神は、屋敷のイヌイの方角にまつれ。タツミ向きにまつれといふ。(矢島)

屋敷に植えて悪い木、ビワとギンナンは、屋敷に植えるものではない。この木は、寺で植える木であるから。また、ビワを植えるとうな

り声を聞くという。ただし、ねどころの前に植えるのならよい。ねどころのうしろに植えてはいけないといつてある。(矢島)

屋敷に植えて悪い木は、つぎのような木であるといふ。

シロの木は、裸になるから悪いといふ。

サルベリは、寺へ植える木だから悪いといふ。

そのほか、ビワ、イチジクも、屋敷に植えては悪い木だといふ。(大佐貢)

垣根の段は四段をきらつた。三段か五段にしろといった。(矢島)

ほうきをまたぐなといふ。(矢島)

便所をきれいにしておくと、いい子がうまれるといつた。(矢島)

いろいろに水をまくな。荒神様がいやがるといふ。(矢島)

かまつくどの中でなわをもすな。(矢島)

竹簾は、うちの中に入れるものではない。(矢島)

白は口を北にむけておくな。(矢島)

鉄瓶の口も北にむけるな。(矢島)

しようごとか箕の口も北にむけておくな。(矢島)

北枕に寝る。死人の寝せ方だから。またよすぎるともいふ。(矢島)

臼の口は北に向けておくなといふ。葬式のとき、とぼ口のところに、臼を北に向けておくからといふ。(大佐貢)

台所を南北に人がでかけに、台所などはいってはいけない。(矢島)

(三) 忌むべき日・忌み詞・その他

日常生活の中で、特別に忌むべき日として、特定の仕事などをしてはいけないといわれている日がある。そのおもなものをあげてみる。

また、特定の日などに、いつてはいけない言葉がある。これは忌み詞として、特別の注意が払われている。そのあとに、他の禁事項をまとめておく。

忌むべき日 忌むべき日としては、つぎのような日があげられる。

半夏の日には、田植をしてはならないという。しかし、この日は、

田とか、畑とか、どちらか一方づけて仕事をすればよいという。

むかし、はんげさんという人がいて、あんまり忙しかったので、田

と畠と両方へまたいで仕事をして、あせで死んでいたという。

そのため、半夏の日には、田と畠の両方の仕事をしてはならない。

一方づけて仕事をしろといつてある。(矢島)

二月の初午の日にお針^{ハリ}裁縫^{ハタツ}を使つてはいけない。座敷アリが入つ

てくるといった。(矢島)

三隣亡^{ミツリミナシ}の日には、むすびをつくってはいけない。くねぬいはするな

といふ。この日は、屋根屋さんは仕事をやすんだ。

ご祝儀も悪いといった(縁結びだから)。(矢島)

のみをまくとき、サルの日はよくなない。サルにかづらかされるか

らといふ。(矢島)

イヌの日に麦まきをしては悪いといふ。これには、つぎのような話

がある。

むかし、弘法大師が中國へ行つて、しこみ杖の中にムギたねを入れ

てもつて来ようとしたら、犬にみつかつてほえられた。それで、弘法

大師は、その杖でイヌをなぐり殺したと。

このようなわけで、イヌの日には、ムギをまいてはいけないといふ。

(矢島)

イヌの日はムギまきをするなどといった。この日ムギまきをすると、

食わないものができるといつて、まきものをしなかつた。(大佐賀)

子供^{こども}がうまれて、里へお客様に行くときに、三月がかり(生まれてから三月目になること)はいけないといふ。そのため、三月がかりに

ならないうちに、早くお客様に行けといわれた。(矢島)

よそへ出たとき、七日がえりはよくない。仏様の供養は、七月七日

であるから。(矢島)

よそへ出かけたときは、七日がえりはするものではないといつた。

(大佐賀)

忌み詞^{キミ} 忌み詞としておもなものをあげてみる。

かいこを飼つている間は、ネズミという言葉を使うな。ネズミのこ

とは、ヨメゴ^{ヨメゴ}といえといつた。(矢島)

夕方、塩のことは、ナミノハナといつた。(矢島)

醤油のことはムラサキといつた。(矢島)

酒のことは、オミキといつた。これは、神様にあげるときにいう言葉。(矢島)

(矢島)

お正月、大判^{オオバン}もちをきることを、もちをたてるという。もちたてと

いつた。(矢島)

死ぬことを、ふつうは、なくなるという。悪口には、くたばるといつた。または、「くたぶつた」といつた。(矢島)

その他の禁忌事項 右のはかの禁忌事項をまとめておく。俗信の項

として、補遺的な立場からとりあげたものである。

生き木に釘をうつな。折り釘のやり方だから。(矢島)

へビを指さすな。指が腐るといつた。(矢島)

四月ゴボウはまくな。人が死ぬといふ。ゴボウは、二月末ごろまで

にまけといつた。(矢島)

川の中には水天宮様がいるから、川にごみを捨てるな。(矢島)

ミミズに小便をかけるな。陰部がはれる。ミミズを水洗いしてやつ

て、おわびをすればいいという。(矢島)

ひなさまを長く飾つておくと、そのひなさまをもつてている子は、縁

が遠くなるといつた。ひなさまは、なるべく早くしまえといつた。(大

佐賀)

つるつるたけは扇屋敷^{シヤンヤシ}というところにある煙である。まつしかくの

形をしていて、仕事のしやすい烟。

むかし、ここである人がツルを殺したことがあつた。そのたたりで、

この煙をつくると、悪いことがあるという。この煙をつくる人はよく

かわった。(矢島)

四 その他の俗信

俗信の中で、以上のはかの資料をまとめておく。
この中で、いわゆる川俣の「三人葬式」といわれる事項が珍しい。
このことについては、県下各地に同様の事例があるが、特定の地域とか、特定の寺院の檀家を指定して、世間でこのようにいっているのは、どういうことであろうか。

一年に、一軒のうちで二人の死人ができると、「一人目のときに、わら人形をつくって、棺箱に入れて墓に埋めた。人形は、隣家の人がつくった。(矢島)

川俣では、一人なくなると、その年にはかならず三人なくなるといった。(矢島)

人がなくなつて、まもなく生れた子どもは、なくなつた人の生れかわりだといった。(矢島)

オカマゲエロがいるから、川へは行くなといつた。(下江黒)

矢田川にはカツバがいて、お盆になると、カツバが人をボンザカナとしてひっこむから、お盆には川へ行くなといつた。(下江黒)
ネコの体重が一貫匁になつたら、赤飯をたいてお祝いをする。赤飯を、ネコをくれたうちへもつていくもんだといった。(大佐賀)
ムジナはあとからついてくる。

さかななど買つてくると、その人のあとをつけてきたという。(矢島)

民俗知識

はじめに

民俗知識という術語の定義は、「民俗文化財の手びき」（文化庁内民

俗文化財研究会編著・第一法規）によれば「民俗知識とは、古老たち

が長年生活の知恵として持ち伝えてきたもので、文字に残されるよりも、言葉や行為を通して伝承してきた技術であると規定している。

実は、これは民俗全般にあてはまる文章でもあり、必ずしもその定義が明確にされているとは言いたい。

そして、民俗知識という項目の資料は衣食住か人の一生、生産生業などと呼ばれている分野の調査から付隨的に得られることが多いとい

われている。

民俗知識の項目は「松井田町の民俗」（群馬県民俗調査報告書第九集・昭和四十二年）以来採用され現在に至っている。ここでは、民俗

知識の項目を検討するのが目的ではないので、民俗知識の定義を紹介するにとどめておく。

さて、明和村における民俗知識をまとめるに当つて、「民俗文化財の手びき」に準拠して項目を次のようにたててみた。

一、しつけ・作法

二、醫療・衛生・保健

(一) 民間療法

(二) 家伝薬

(三) 呪的療法

三、曆法・自然現象に関する民俗知識

(一) 気象 四、ト占・まじない

五、数理

六、その他

あまり細分化すると、かえつて煩雑になるので、できるだけ大項目にすることにした。

明和村は、利根川の中流域にあたり、水とのたたかいの連続であつたので、いわゆる洪水圏の民俗らしく気象については比較的資料がまとまって採集された。それが単なる「潜在民俗」としてではなく、古

老たちの知恵として今も生きているようであった。

それゆえに、雨については「雨の民俗知識」とでも項目立てができるくらいの量がある。「……すると雨が降る」といった類のものは約三十種ほど報告されている。

また、気象関係で「富士西の三把櫛」という言葉が伝承されているが、苗取りの苗を三把と田植えの苗三把の二種類報告されている。これには林邑桑地方独特の言いまわしであろう。

兵隊のがれのまじないなどは一回性のものではあるが、新しく生産された民俗であろう。このようなところに民俗の再生產を垣間見ることができる。

数理関係の資料が不足しているが、他は比較的まんべんなく報告されている。これらの民俗知識の事例から漏れたものは地元の人々の手によって記録されていかれることを願うものである。

（板橋春夫）

一、しつけ・作法

衣生活のしつけ・作法など

せにつくびに着るものでない。(江口)

ゼネックビは襟が内側によっている。不可。(斗合田)

左前に着物を着るものではない。(江口)

死者と同じになる。(田島)

左前はいけない。(斗合田)

オビヒロマエは帯をしないで歩く。不可。(斗合田)

シタソメエツサガリは下前下り。不可。(斗合田)

己の日には裁縫をしてはいけない。(江口)

己の日にたつのは、身を切るので悪い。(斗合田)

二尺四尺は、「死人」に通じるのでよくない。(江口)

四尺はよくないので一分でも伸して裁ち切れという。(田島)

尺はきちょうどにするものではない。たとえ一分でも長くしろという。

(江口)

結び玉を作らず縫つてはよくない。葬式の時のことだから。(田島)

シツケ糸をつけたまま着ると恥をかく。(田島)

仕上がらない着物を着てはいけない。(江口)

着物は必ずたんんでから着る。(江口)

初めて買った着物は北を向いて着るものではない。(江口)

たつこぎにひもを結んではいけない。(田島)

北向きに干してはいけない。水かけ物みたいだから。(田島)

着物は北向きに干すものではない。(江口)

洗濯物は一度たんんでから着る。(田島)

食生活のしつけ・作法など

御飯をよそる時は一杯飯はよくない。(江口)

もりつけ一回は仏の茶わんといって、必ず一回くらいでもりつけをした。(千津井)

左膳は仏のものだから、人はしない。タテ膳は悪い。(斗合田)

赤飯にお汁をかけると結婚式に雪がふる。湯をかけると雨が降る。

(江口)

御飯に汁をかけて食べる恥をかく。(江口)

御飯を食べる時に、茶碗をたたいているとゴキタキといつてしかられた。(千津井)

御飯茶碗をたくと地獄まで聞えるという。(江口)

茶碗を箸で叩いてはいけない。(斗合田)

木の箸と竹の箸を混せて使つてはいけない。(斗合田)

食事の際、箸を持つてあれこれつづくのは迷惑箸といつてきらわれた。(千津井)

飯と汁の茶碗を同時に持つな。(斗合田)

箸を飯に立てておくのは仏様のものだ。(斗合田)

御飯に箸を立てるものでない。(江口)

箸と箸で物をつまむものでない。これは仏の骨をつかむのと同じだ

から。(江口)

箸と箸で物をつかむ。骨あげの時と同じだから。(千津井)

箸と箸ではさみこしてはいけない。(斗合田)

がつがつ食べるな。(斗合田)

しゃべりながら食べるな。(斗合田)

御飯を食べる時は貧乏ゆすりをするものではない。(江口)

御飯を食べながらカントリ(頭)をふつていると「初市のトラみたいだ」としかられた。(千津井)

食事中に伸びをするものでない。御飯がちがう所にいつてしまふ。

てしまうといわれた。(千津井)

おかわりをする時には、一口でも残しておかわりをする。(千津井)

御飯を食べてすぐに横になると牛になる。(江口)

食事後、すぐに横になると牛になる。(江口)

親が死んでもゴク休み。(千津井)

茶柱が立つと縁起がよい。(江口)

赤飯の中に塩を入れてふかすとよくたけるという。(江口)

住生活のしつけ・作法など

敷居を踏むのは親の頭を踏むのと同じ。敷居は主人の頭といわれた。

(田島)

入り口の敷居を踏むと主人の頭がいたくなる。(江口)

畳の目を踏んではいけない。(田島)

畠具は静かにあけたてすること。

一馬鹿の三寸、まぬけの五寸、のろまのあけつ放し——。(斗合田)

座敷をかけつてはいけない。(斗合田)

便所に唾をすると口の中に腫れができる。(江口)

便所で唾をするとオデキができる。(田島)

イロリで髪・ツメ・綱の毛をもすものではない。(田島)

イロリの中に爪を入れるな。(江口)

イロリの中に髪の毛を入れるな。(江口)

髪の毛を火の中にくべてはいけない。(江口)

イロリの中に唾をしてはいけない。(江口)

イロリで柿の種を燃すのはよくない。(江口)

カギツルシ(カギ竹のこと)に鉄びんの口を北に向けるな。(江口)

空湯をわかすと隣りが大尽になる。(江口)

グシ餅を焼いて食べるヒ火難にあう。(江口)

棟上げの時に雨が降ると火伏せになるので縁起がよい。(江口)

エンジュを鬼門に植えると鬼門除けになる。(斗合田)

ビワを植えると家にうなり声が絶えない。寺の木だといふ。(斗合田)

馬鹿と旦那は東向き。(上座に坐らせてること。集会などで遅く来た者

は上座に坐らせること。)(南大島上)

禁物など夜爪を切る時は、「犬の爪、猫の爪」と唱えればよい。夜爪は世を詰めるという。(江口)

夜爪はよくない。(田島)

爪と唱えればよい。夜爪は世を詰めるという。(江口)

夏の日までには稻は植えちゃえ、といつてていた。(上江黒)

半夏生には、田植えが終わってもオカ(烟)の仕事はするな。これは「ハング」という人はえらい忙しくて、田とオカに片足ずつ足をいれでどっちをやつていいかわからず、そのまま死んでしまった。」からだ

という。(南大島)

卯の日田植え、年神様に進せるモチゴメは卯の日に植えてはよくな
い。ウルチのことは特にいわない。(江口)

苗間は卯の日にふらない。(種稻を時かない)。(南大島)

田植えは卯の日にやらない。(南大島)

辰田植え 辰の日田植えはいけないという。理由は不明。(江口)

戌の日 麦は戌の日にまいてはよくない。猿にちからされるという。

(江口)

戌の日には麦まきして悪い。食えないものができるから。(上江黒)

麦蒔きは戌の日はするな。(南大島)

申の日 大麦の間に陸稻や綿・大豆を蒔くサクイレは申の日は避け

る。(南大島)

作物禁忌 中谷の坂上イッケは、瓢箪を作れない。むかし瓢箪の棚
が作つてあつたところへ坂上家の馬が入つて来て、棚の中へ首をつ
こんで死んだからである。(中谷)

田部井イッケは、トウナス(南瓜)が作れない。たゞし屋敷以外の
畑は良いという。また、もつて食べるのもさしつかえないという。

(梅原)

胡瓜は輪切りにするものでない。天王様の紋だから。(上江黒)

二、医療・衛生・保健

(一) 民間療法

チゴクソバ ドクダミのこと。柿の葉に包んでむし焼きにすると、

ドロドロにとける。これを、できもの、切り傷、その他何にでも外用

薬として用いる。土用三日目にとつてきて、かけ干しにしておいて、煎じて飲むと赤痢の特効薬である。(中谷)

どくだみのことを、ここでは地獄そばといい、せんじて飲むと血の循環がよくなるといった。(南大島上)

トウギミの毛 トウモロコシの実についている毛糸を煎じて飲む

と、腎臓病の薬になる。(中谷)

梅干を黒く焼いて湯を注いで飲むと風邪によいという。(南大島上)

バコツ 馬の骨を削つて湯で飲むと風邪に効くとされていた。これ

をバコツと呼んでいた。(南大島上)

モチグサ ヨモギのこと。かけ干しにして煎じて飲む。熱さましで、

風邪薬として重用された。一年中飲んでいると、娘の顔や肌の色つや

がよくなるという。(中谷)

キンカン ハシカの時には、キンカンを食べさせたり飲ませたりし

た。(千津井)

ハシカにはキンカンを煎じて飲ませる。(田島)

ユキノシタ 耳の病気には、ユキノシタの水をしぼつて入れると治

るという。(千津井)

耳が悪い時は、ユキノシタの汁を耳の中に入れると治る。(江口)

耳だれ の時はユキノシタの汁をつける。(田島)

耳だれ ユキノシタをつける。(合田)

梅酢 ひきつけた時、赤い梅酢を口のまわり鼻などにつけてやると

すぐ気がつく。

また梅酢は婦人の病気にいい。うすめて飲むと悪血を下げる。生理

痛、頭痛にもいい。(大輪)

ゲンノショウコ 薬草でひどくにがい。腹薬にする。夏の土用三日

目に採取してきて、かけ干しにしておき、煎じて飲む。(中谷)

ゲンノショウコをとつておいて、かけ干しにしたのを煎じてのむ。

(大輪)

ほうそう ほうそは見目定め、はしかは命定めといわれた。(千津井)

目やに 赤ん坊が目やにがたくさん出たりすると乳をつけるとすぐ治った。大人でも目の中にゴミが入った時に乳をつけると治るといふ。

(千津井)

歯痛 歯が痛い時には、セイロガムをくわえるとよい。(江口)

歯が痛い時には、モチクサの葉を塩でよくもんで痛い個所につめてかんでいれば治つた。(千津井)

歯痛にはアロエをつければよい。(田島)

寝小便 寝小便のくせのある子供には、赤ゲエロ(蛙)を焼いて食べさせるとよいといふ。(江口)

寝小便をする子供にはドブネズミを焼いて食べさせると治る。(江

口)

ヤケド ヤケドをしたら、ジャガイモをおろしてつける。(千津井)

蜂さされ 蜂にさされたら、アンモニヤがよいといふ。なかつたら小便をつけておけといつた。(千津井)

打ち身 打ち身にはハコベをウドン粉と酢を入れて練つたのをつけとよい。(千津井)

エボ エボができる時には、ママの花の汁をつけるとれる。(千津

井)

干葉湯 おできができるたら干葉湯をたてて入るといふ。(千津井)

あかぎれ 赤ぎれには富山の薬屋が置いていく赤ぎれ膏を塗つて焼け火箸でなざるとよいといふ。(江口)

赤ぎれの時には、コウヤクをつけた。赤ぎれの所に焼け火箸でつけた。(千津井)

しゃっくり なかなか止まらない時、柿のへたを煎じて飲む。(斗合田)

砂糖をひとしやくし飲むとしゃっくりがとまる。

サイダーとかビールを大口で三口くらい飲むとよい。胸つかえの時も同様でよい。(千津井)

成田山の粉薬 切り傷には成田山で買ってきた粉薬をついた。(江

口)

蜂さされ 蜂にさされた時、イモガラ(里イモ)のじくを折ると水が

力ぜ 玉ねぎを刻んでガーゼに包んでのどに巻く。または長ネギを

焼いて布に巻いてのどに当てるといふ。(大輪)

タマネギ 夜、ねむれない時には、タマネギを半分に切って枕元に

置いておくとよく寝れる。(千津井)

二 家 伝 薬

家伝薬 ふくべの薬という家伝薬が戦後まで国保元七氏の家で作つて

ていた。薬剤師まで頼んでやつていた。この家伝薬は昔、六部が来て

世話になつたお礼に教えていたと伝える。はつきりした製法は聞か

ないが、なんでも六月頃、ツツクサという草を探つて乾燥して用いた

といふ。黒色で量が多くあつたが、よく売れていた。効能は知らない。

ムラに多くの人が来て道を聞いたから遠くへ知られていた。(南大島上)

ふくべの薬という家伝薬を稻荷山で作つていた。胃の薬で、青くふくれた顔の人には効くといわれた。これは昔、六部の人が教えたといふ。

(新里)

南大島の小松原という家で秘伝の目薬をつくつていた。昭和初年まで作つていた。(江口)

田島の日比野家で、ネズツボ(オデキのあととのチヨウのこと)の薬をつくつていた。真黒な練り薬であった。(田島)

本郷には目薬の家伝薬があった。貝の中に入れてあり、ピンク色を

していく。これに乳をしぶり込んで目につけた。はやり目、やん目に効いた。(南大島上)

(三) 呪的療法

眼病 目が悪い人は、田島の薬師様におまいりに行つた。治ると「め」という字を書いた絵馬をあげた。(江口) 眼の悪い人は薬師様に祈願した。治ると「め」という字を書いてあげた。(千津井)

やんめ送り出し 豆を炒つて半紙に包み三本辻に、やんめの人がおいてきた。これをやんめ送り出しといつたが細いことはわからない。

(南大島上)

オサンゼン(お賽錢)を包んで、三本辻に送り出す。(斗合田)

メケエゴ メケエゴになると半紙をカンジンコヨリにして目のところにつけ、「メケエゴやあ!」と言いながら、カンジンコヨリを結ぶ

よい。それは燃した。

また、つげの櫛をあぶつて、目のところを三回なざるとよい。(千津井)

箕の先の方を見せ、直れば全部見せる。笊やメケエゴを被るとできる。

(斗合田)

メケエゴができると、井戸に箕を半分見せて、「治つたら全部見せます」と言つた。治つたら全部見せた。

また、メケエゴには、木の櫛を疊の目ですつてあたたかくして、目のところをさわると治るという。(江口)

さるをかぶると目かごが出来るから、かぶるものでないといわれた。(新里)

メケエゴは女の人の使う櫛を焼いてつけると治る。(田島)

メケエゴは井戸に箕を少し見せて、治つたら全部見せるといった。(田島)

目の中のゴミ 目の中にゴミが入つてしまつた時には「ゴミ儀出る。すみだわらどける、ジジとババでかん出せ」と言いながら目を布でふくと治る。(江口)

鼻血 鼻血が出た時は、盆の窪の毛を抜くと止まる。盆の窪をたた

くとも効果がある。(千津井) クサ(クサガ)ができると諏訪神社に行つて木を借りて来た。「クサ

カリ」といった。治ると倍にして返した。(江口) 口のまわりにクサができるたら、馬にくれる草でそこをふくと治る。

(千津井) シャツクリー シャツクリーの時には砂糖をなめればよい。また、茶碗

の上に箸をのせて、「ハシの下の水を飲みます」と言いながら飲むと治る。(千津井)

シャツクリーがでた時は、頭のつむじのあたりを押せば治るという。

(江口) シャツクリーがでると、茶碗の口に箸を十文字にして四つかどうぞめば治る。(田島)

しゃつくりにかかった場合は、箸を頭の頂上に立てて天井の方を見ると治るという。(南大島上)

抜歯 下の歯がとれると屋根棟に投げた。上の歯は縁の下に投げた。

この時に「俺の歯は弱いから鬼の歯と取り替えてくれ」と言つた。(江口)

コウデ コウデになつたら、「コウデヤマの伊達男」と言えはなる。
(千津井) 隙子の穴から、こうでにかかつた手を差し出して、男なら女、女なら男の末の子に手首を糸で結んでもらうと治るといわれた。(南大島)

コウデの時は、隙子の穴から手を出して、男の人は女の子、女人のは男の子に縫い糸でしばつてもらうと治る。(江口)

足に何かささつた時のはじまない。足の裏に何かささつてしまつた場合で、特に古くぎの時はカナヅチでささつた所をたくと化濃しないという。(江口)

足がしびれた時 足がしびれてしまつたら額に唾を三回つけて乾くうちになおるという。(江口)

工ボ 工ボができると石打の觀音様に行つて拝んで来た。治るとお礼まいりに行つた。治ると自分の身長くらいの団子をあげますといふ。(江口)

えぼはえぼ地蔵に、背たけの団子をあげる。背の長さの竹の上と下と、真中に団子をつける。(斗合田)

イボができたら、石打のコブ觀音に行く。(田島)

コブ コブをつくつてしまつたら、生米をよくかんでコブの上につけおくと治る。(千津井)

コブができたら水でひやして、「カラスのコブになあれ」と唱えた。(江口)

「カラスの子分になあれ」といつて痛いところをなさせてくれた。(南大島上)

トゲ トゲがささつたら唾でなめておけといつた。(江口)

風邪 風邪をひいたら、半紙に息をかけて丸めて中に豆を入れた。(江口)

四つ辻に持つて行き、「これを食つた奴は風邪の神をしよう」と言いいながら捨ててきた。捨てたあとは後ろを振りむかないようにした。振り向くと風邪の神が追つかけてくるという。(江口)

カゼをひいたら卵酒を飲めばよい。(田島)

カゼをひいた時は、カゼの神をおくるといって、豆を炒つて息を吹きかけたのを半紙に包んで三本辻に捨てた。ぶり向かずに帰る。(田島)

セキが出る時は、ネギを焼いてのどにまくとよい。(田島)
風邪を引いた時には豆をいって半紙に包んで三本辻におくり出した。(千津井)

山王様 婦人の下の病に効くといつて、おまいりに行く。治ると紅を塗つた。(江口)

はしか 「はしかは命さだめ」という。ハシカクグリの呪いはなかつた。館林市青柳にはしかし神がある。(大輪)

かくらん かくらんになると裸にして立たせ菅笠をかぶせて冷い水をかけてくれた。又、キユウリの種を足のうらにすり込んでくれるとよいといい、そうする人もいた。(南大島上)

鍋で、足を洗う。井戸端で、菅笠を被せ、水を三杯かける。(斗合田)

カクランの時には菅笠を被つて上から水をかけるとよい。(田島)
夏大根を、足の裏にすりこむ。(斗合田)

カクランになった時には、キユウリを足の裏にすりこむとよい。(千津井)

夜泣き 夜泣きをすると「サルサワの池のほとりに住むキツネ、親は泣けども子はなき」と三遍唱えて線香をあげると治る。(田島)
夜泣きをして困るときには、「サルサワの池のほとりに鳴くキツネ、星は鳴けども、夜は鳴くなよ」と書いて、子供の寝ている部屋に逆さに貼つた。(江口)

カンの虫 カンの虫には、手のひらに「馬」という字を三回書けば治つた。(千津井)

寝小便 寝小便をして困る時には、寝小便をしなくとも毎日蒲団を干すとよい。(千津井)

三、暦法・自然現象に関する民俗知識

(一) 気象

富士西の三把橋 南の方に富士山が見えるが、それより西に出た雨雲は降つて来るのが早く、橋を三把まるく間もないほど速い。しかし、時期を考えると橋刈りのころでなく、麦刈り田植えのきかな頃だから

ら、苗を三把植える間と云うことか、ともい。 (千津井)

麦の取り込み頃に、稻を三把植えないうちにやつてくる夕立のこと

を「富士西の三把福」といった。 (千津井)

富士山の方からくる夕立ちは苗取りの苗を三把とらないうちにやつてくる。(田島)

「三ば稻に夕立が来る。」とい、三ば稻を束ねない中に夕立がやつて来るといつていたが、最近は違つて昔のようでない。方角は富士山より少しほずれた方からだつた。 (南大島)

昔はフジニシから来る雷をいつたが、今はこういう雷はこない。逆に赤城方面から来る。三把の稻を植えるうちに来る雷である。氣象状況が変わつたのだろう。昔は、堤防の向うがわには桑を植えた。この三把稻に出あうといへん、せつかく取つたのを運ぶ途中でぬらしてしまつことが多かつた。 (斗合田)

フジニシ(西南)から来る雨は、稻三把植えないうちに降る。 (斗合田)

苗代の苗を三把取るうちにやつてくる夕立ちをこういつた。 (江口)

苗三把植えないうちにくる雨。 (上江黒)

雨と風の呼称 ミミズが鳴くと雨。 (田島)

ミミズが泥をしょつていると雨が降る。 (田島)

ミミズがなくと雨が降る。ミミズはオケラのこと。 (江口)

ミミズが歌をうたうと天気になる。 (千津井)

蜂の巣が高い年は、出水が多い。 (斗合田)

蜂が木の上の方に巣をつくると水が多い。 (千津井)

蜂が高いところに巣をつくると大水になる。 (田島)

蜂が木の上に高くに巣をつくると水が多い。 (江口)

羽根蟻が出てくると近いうちに大雨になる。 (田島)

蟻がどんどんまいりをすると雨。 (田島)

羽根蟻が電燈のまわりに飛んで集まると雨が降る。 (江口)

蟻がどんどんまいりをすると雨が降る。蟻があちこち行列で行つたり来たりすることをどんどんまいりといつた。 (千津井)

蛙が鳴くと雨が降る。アオングエル(青蛙)が鳴くと雨。 (田島)

雨蛙が木の上に登ると水が多い。 (千津井)

蛙がなげば雨。 (江口)

タチモグラがもぐつていると雨。 (田島)

モグラがもぐると雨が多い。 (千津井)

モグラがもぐもぐと掘つて歩くと雨が降る。 (江口)

ツバメが低く飛ぶと雨がふる。 (田島)

燕が低く飛ぶと雨になる。反対に、燕が高く飛ぶと天気が続く。 (千津井)

燕が家中に巣をつくると水が多い。 (江口)

ケヤキの木の根元が二尺くらい濡れてくれると雨になる。 (田島)

ケヤキの木の芽が伸びると雨が多い。 (千津井)

五月頃、アラシ草というのが大きくなるが、この葉にくびれがあるとアラシがくる。 (田島)

猫が顔を洗う(耳をかく)と雨が降る。 (千津井)

猫が耳のうろから顔を洗うと雨が降る。 (江口)

蛇が出ると雨が降る。 (江口)

蛇がたくさん出ると雨が降る。 (千津井)

蛇が出ると大雨が降る。 (田島)

尾長がギイギイ鳴いて家のまわりに来ると雨が降る。 (田島)

尾長が鳴くと雨が降る。麦刈りするな。 (上江黒)

赤とんぼが群をなして飛んでゆくと嵐がある。 (上江黒)

ひばりが鳴かなくなると雨になる。 (千津井)

春先、西風が吹くと必ず三日以内に雨が降る。もし、降らない時は、静かになつてから大水になる。 (田島)

土用の三日目に雨が降れば、その年は雨が多い。(千津井)

ウシトラ風が吹くと近いうちに雨になる。(田島)

七夕に雨が降らないと流行病がある。七夕には一粒でも雨が降ればよいという。(千津井)

赤城山の煙が南に流れると天気になる。北に流れる雨が降る。赤城山に雲がかかると風になる。(田島)

ダイドコがびっしょりになると雨になる。(田島)

四十女と七ツの雨はやみそうで止まない。(千津井)

ツムジ風が右にまわると雨、左にまわると天気になる。(田島)

朝虹があると雨が降る。朝虹は西にでる。(田島)

西虹は雨が降る。(田島)

西に虹がたつたら川(利根川)をわたる。(上江黒)

「東に虹が出たら橋を渡るな」東に虹が出ると大水が来るのが早い

という。(千津井)

虹が川をまたぐと水が多い。(江口)

朝焼けは雨になる。夕焼けは天気になる。(田島)

朝焼けはその日の雨。(千津井)

朝焼けはその日の雨。(江口)

夕焼けは次ぐ日の雨。(江口)

夕陽焼けは翌日のアケ、朝焼けはその日の雨。(千津井)

朝起きて、サルツビがあると雨が降る。サルツビというのは太陽の

上に雲があつて反射して太陽が二つに見える状態をいう。(江口)

月傘は雨になる。その中に星がひとつあると一日もつ。(田島)

月が傘をかぶると雨が降る。傘の中に星がひとつあれば一日たつてから雨。二つあれば二日経つてから雨になる。(江口)

月傘は次ぐ日の雨。月傘の中に星がひとつ入つていれば、それほど早く雨は降らない。(千津井)

日傘も雨が降る。(江口)

三日目が、おつ立つと、米があがる。(斗合田)

巳年には水が多い。(江口)

オシメリ祝い。しばらく雨が降らずにいて、待望の雨が降ると、オシメリ祝いをした。区長が寺の留守居役に命じて、ムラ中にふれさせた。留守居役は大声で「あしたはシメリの祝いだからあすばれ(遊ばれ)よお」と言つてふれて歩いた。人々は仕事を休み、ごちそうを作つて食べた。(中谷)

ニシカゼ 北西の風をニシカゼといつた。赤城おろしともいつていた。(千津井)

サンゴジュのクネを結う。(江口)

赤城の西に雲があり、下が晴れている時は、西風が吹く。(斗合田)

ウシトラ風 北東の風で西風になる前に吹く。天気の変わり目に吹く。(江口)

東北風。台風の風はウシトラから吹き始めて、フジンに至つて終る。(斗合田)

シタケ 北東から吹く風をシタケと呼んでいた。(千津井)

ツナミ 南東から吹く風をツナミカゼとかタツミカゼと呼んでいた。(千津井)

春四月ごろ吹く。よい風。東南風。(斗合田)

フジコシ 富士山方向から吹く。東南風。(斗合田)

赤城の雷 赤城の方からくる雷は北雷ともいつた。なかなか来そうでこない。それで約束しても来ない人のことを「北雷」などといつた。(田島)

北なりの雷は来そうで来ない。また「北鳴の雷」のことわざあり。「着たつきり」のしゃれである。(上江黒)

赤城の方から来る雷は遅い。(江口)

赤城へ雪が出たら田植をしづに寝ていろ。(上江黒)

雷のことを雷様といった。雷様が鳴ると「クワバラ、クワバラ」と唱え、蚊帳の中に入った。線香もあげた。(田島)

「ジンショウ、シウイコウエイ、ウンランウンビ、ゴオバクジュタイ、ウウネンビ、カンノンジユキリウキユウ」と唱えれば雷避けになるといわれ一生懸命に覚えた。又、麻の蚊帳の中に入つてクワバラ、クワバラともいった。(南大島上)

雷が鳴る時には、竹の先に鎌をつけて庭先高く立てた。(田島)

雷が鳴つたら、「クワバラ、クワバラ」と唱えれば落ちない。また、竹竿に桑の枝をしばり、その先に桑鎌を結わいつけ、庭先に立てる

と雷よけになるといった。(千津井)

長い棒の先に鎌をさかさにして縛りつける。雷がするとかまいたちが下がつてくるので、これでかつきるのだといふ。(上江黒)

長竿の先に鎌をつけて立てた。蚊帳をつり、中に入る。桑原桑原と唱える。線香を立てる。(斗合田)

雷が鳴ると「クワバラ、クワバラ」と唱える。(江口)

雷が鳴るとクワバラ、クワバラといふ。(上江黒)

初雷のときは、年越しの豆を食べる。(上江黒)

雷が落ちたところには竹を四本立て、注連をはつた。こうすると被害が広がらない。お宮をつくることはなかつた。竹と注連は個人でやる。(田島)

雷が落ちると、落ちたところの四方に真竹をたてて、しめをはり、雷電神社でもらつてきたお札をつけておく。こうしないと、被害の個所がひろがる。(上江黒)

ヒヨウ ヒヨウが降ると釜のふたを出しておく。ヒヨウが降らなくなるというまじないだつた。(江口)

ヒヨウが降つてくるとカマップタ(釜のふた)を庭先に投げると止まる。(田島)

まる。(田島)

地震 竹藪に入つて、マンザイラク、マンザイラクと唱える。縫い物している時、地震にあうと、無理しても縫い通す。庚申待の時は、やり直しをする。(斗合田)

地震の時には笛やぶに逃げればよいという。(千津井)

地震の時には、「マンゼロク、マンゼロク」と唱える。(江口)

地震の時には、「マンゼロク、マンゼロク」と唱えた。子供が遊んでいて木をゆすつたりする時に「マンゼロク、マンゼロク」といいながらゆすつたものである。(田島)

(二) 天文・方位ほか

月食 月食の時は、お月様が人間のかわりに病んでくれるという。(千津井)

月食はお月様が人間の変わりに病んでくれるという。(江口)

月食は人間のかわりに月が病氣をしてくれるといわれている。(田島)

暦 伊勢暦が主に使われていた。昔はすべて手の指やにぎつた時の指の根元の凹凸を数えたり、節を数えたり、指の指紋などをとにじみ代わりをしていた。具体的にはわからないが、三段目とか四段目といつて数えていた。(南大島上)

白の口、箕の口は北に向けるな。(江口)

箕を北に向けるものではない。(千津井)

白の口を北に向けるとよくない。(千津井)

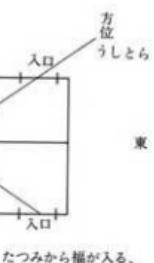
ヤカンの口は東を向けてたてるといった。(千津井)

あまり変わつてゐる人のことを「北向き」などといった。(千津井)

雨つぶりに髪の毛を洗うとゲジゲジになめられる。(田島)

初午には火をたいてはいけない。火にたつという。(田島)

三隣亡に何かするとよくない。(江口)



たつみから福が入る。

四、ト占・まじない

あけるとわるいので
いなりをまつる。
四

- 夢には、正夢とモゾ夢がある。「富士一鷹三ナスピ」という。
(千津井)
- 夢見「夢は逆さ」といわれていた。(田島)
- 朝方の夢は正夢。(江口)
- こけのない魚の夢はよくない。(田島)
- こけのない魚(ドジョウ・ウナギ)の夢は悪い。(江口)
- こけのある魚の夢は良い。(田島)

葬式の夢を見ると子供ができる。(江口)

日の出の夢は良い。(江口)

馬や牛が逃げ込んだ夢は良い。(江口)

金を拾った夢はなくしものをする。(江口)

さおのない舟の夢は悪い。(江口)

扇の夢は良い。(江口)

扇の夢は良い。(江口)

火事の夢は繁盛する。(江口)

火事の夢は良い。(田島)

蛇の夢は良い。(江口)

蛇の夢はいいことがあるという。(田島)

蛇の夢はいい。(斗合田)

蛇の夢はいい。(斗合田)

歯が抜けた夢はものすごく悪い。(田島)

歯の欠けた夢は悪い。朝起きたら、櫛の歯を一本おつ欠けという。

(斗合田)

盜難除け 盜難除けに天王様の旗を借りてきて田ん畠や畑に立てた。旗は白、それに「奉納八坂神社」と書いてある。これをなす時は二本にしてなす。(上江黒)

なくしもの 無くし物をした時は、かぎつるしに頼んで、その上の

部分を繩で結び、見つかって解きますという。(南大島下)

粉太棒があつた時は、かぎ竹に糸か紐を結びつけて見つかればとき

ますと願をかけた。(新里)

物がなくなつた時には、カギツルシをワラでしばつて頼むとでくる。(江口)

火事と腰巻 火事の時は、女人の腰巻をはずして棒の先に旗のよ

うにして振ると、振った方へは火が移つて来ないといふ。スソ火を防ぐといった。(新里)

火事の時、赤い腰巻をふつていると火が来ない。(田島)

火事の時には女の赤い腰巻を広げて、火事の方に向けるとよい。(江口)

□

兵隊のがれ 兵隊のがれの御利益があるというので、八里も離れた古河の東の北向き八幡に、三人で自転車で行つて祈願した。結局検査の結果は即日帰郷で帰された。

またマヨケとして某女性の兵式のときの反物、晒をもつて検査のとき裸にして着ていくと、兵隊のがれになるといわれた。(大佐貫) 微兵のがれのために、つぎのようことをしたという。微兵検査にいくとき、母屋の敷居の下に、クルミを入れておいてそれをまたいでいくと、兵隊検査をのがれる(不合格になること)ことができたという。

また、十九歳の娘の陰毛をもつて、紙にくるんで肌に抱いていくと、弾丸よけになるといつた。(大佐貫) イモリの黒焼き 男がイモリを黒焼きにして粉をほれた女にかけると女は男にほれるようになる。(田島) 墓地で転ぶとあとをひく。転んでしまつたら着物のツマを口でかむとよい。(千津井)

酔と小便 「酔を買つて家に帰る途中小便をするな。」といわれた。それは小便をすると酔の味がなくなるからだとのことだった。(新里) 長居客を早く帰らせる方法 お客様が長居をしている時は、ホウキを逆さにして手拭をかけておくと早く帰る。(江口)

五、数 理

一人前の基準 米俵を一俵担げれば一人前といわれた。一日に烟をエンガで五畝うなえれば一人前。女は機が織れなければ嫁に行けなかつた。(千津井)

力試し	米俵を使って力試しを行なつた。コボウぬきといい、三俵並べて、両側の俵に足をかけて中央の俵を担いた。その場合イチノフといい、俵に三本なわが掛けたてある手前のなわに手を掛けて担ぐことが一番むずかしかつた。中央のなわが二ノフ、遠い方がサンノフとなつた。
符丁	その次にむずかしいのが一升枠の上に立つて、マスカケという方法でイチノフ、ニノフ、サンノフという担ぐ段階があつた。(新里)
一 チヨウ	一 チヨウナラ
二 ベン	十二 チュニンベン
三 ウロ △	十三 チヨロウ
四 イゲタ井	十四 チヨウイケ
五 メノジメ	十五 チヨウツラ
ハ ン	十六 チヨウボオ
六 ポウ	十七 チヨサイ
七 サイ	十八 チヨウバ
八 バンドウ	十九 チヨウキユ
九 ガツケエ、キヤ	二十 ベエン
十 チヨウ	
十一 ハンガタ (五) 買つてくれ	
十二 ハンガタ (五) 買つてくる	
十三 など	
十四 桑の仲買人は、よく袖の下で符丁を使って取引を行なつていた。そ	
十五 バッカ (手した)	
十六 は主に馬喰が行なつた。(南大島下)	

符牒 館林の市に行つて覚えて来た符牒は

丁ズベ、チョウ

イウロ、キリ

メイゲタ

ナハキ

ズベ

ハキ

キキ

ナハキ

キキ

馬喰は袖の中で馬主と手と手をにぎつて、符牒で値を決めていたが

よくわからなかつた。(南大島上)

盆には嫁姑が仲よくなれる。(ぼたもちが、いたむのでむりに嫁に与えようとする。普段は姑が嫁に何にも与えないが捨てるのももつたいないので与えるので仲良くなつたように見える。盆のぼたもちは三日もたない」とい、しまいには毛が生えるという。秋ナスは嫁にくれるな。それほどまう。(江口)

小姑一人、鬼十四(江口)

死人には、足袋を左右反対にはかせる。(江口)

「坊さんのたたりは七代たたる」という。(江口)

長虫のたたりは三代続くといふ。(江口)

朝蜘蛛は縁起が良い。夜の蜘蛛は「よくも来た」といつて殺してし

まえという。(江口)

女の人が一番先にお客に来るとき女の口あけといつて縁起が良い。商

家ではよろこんだ。(江口)

出かけに靴ひもが切れると何か変わりごとがおきる。(千津井)

猫が死ぬと三本辻に埋けた。(江口)

猫が一貫目になるとお祝いをした。(江口)

忌調 人が死ぬことを「オカクレになる」という。(田島)

人が死ぬことを「モグラを取りに行く」という。(江口)

塩ナミノハナ(江口)

梨アリノミ(江口)

スリバチアダリバチ(江口)

蛇長虫(江口)

「織つちやあ、とつちやあ、買つちやあ食い」機を織る時はこんな

風に聞こえるという。(千津井)

「トッチャクイ、カツチャクイ」と機の音が聞こえる。(田島)

民俗芸能

はじめに

今回の調査資料を、本章では次のように配列した。

- 一、獅子舞
- 二、祭囃子・踊り
- 三、民謡
- 四、念仏・和讃
- 五、その他の芸能・娛樂

以下、これらの中でも、特徴的な事がらについて述べる。

獅子舞について

明和村で獅子舞を伝承している地区は、斗合田、下江黒・千津井、江口、梅原の五ヶ所あるが、このうち調査日程等の関係で、直接に調査できたのは斗合田と下江黒であった。斗合田の獅子舞は、その由緒等比較的に明らかになつてゐるが、下江黒の場合は、あまり明確でない。しかし、両者とも獅子舞を行ふ祭日の日程、行事とも共通している点が多い。また舞子は両者ともタツツケ持でなく、長袴を着用する点も共通している。演目も、うず女、カネマキ、橋わたりなど同じであるが、斗合田ではこれに加え「弓ぐぐり」を演じている。このように共通点が多いのは同村にある獅子組同士としての影響のし合いであるが、また、当初からの流派等による共通点であろうか不詳である。

また獅子舞が雨乞いにお使われた例は県内でも各地に見られるが斗合田の場合、板倉の雷電神社の御神水をもらい受け、これをたらいの

中安置した獅子頭（古い方の獅子頭）に拂りかける。そして、他の獅子頭で獅子舞を行う。明和村地方は雨乞いの場合、板倉の雷電神社から御神水をらい、雨の降ることを念する地区が多い。そして無事に田植えが終ると「オレグリまいり」と称して、雷電神社にお参りをしている。雷電神社への雨乞いと、獅子舞とが結びついている点は、地域的な特色を示す民俗伝承として注目される。

また、中谷では夏祭りのとき、神こしと共に、一頭二人立ちの獅子が出たという。一頭一人立ちの獅子は県下でも多いが、一頭二人立ちのものは比較的少なく、珍しい例である。しかし、この獅子が舞いを演じたかどうか、詳細については聞き出すことができなかつたが、注目したいことなので、今後の調査課題として特記しておく。

祭囃子・踊りについて

祭囃子と踊りは大輪（上）と中谷地区で調査することができる。両者とも夏祭り（天王様の祭り）に演じられている。この中で共通する踊りとして特筆したいことは「ひよつとこ踊り」である。この「ひよつとこ踊り」は東毛地方に見られる特徴と思われる。この地方では、桐生の賀茂神社を中心とする宮比神楽の影響もあると思う。また板倉に「ひよつとこ踊り」の名人がいたと伝えているので、この方の影響も、直接的には強かつたと推測できる。今回の調査では他の調査員からも、ひよつとこ踊りの好きな人たちが、板倉をはじめ、赤羽根、田島、赤生田などに集つていたという報告が寄せられている。

この、ひよつとこ踊りの曲は、筆者の聞いた範囲では、太田地方では八木節の囃子にも組み入れられている。また館林では祭囃子の一つであるニンバにも、この踊りの曲が組み入れられていることが、今回

の調査で明らかになった。ニンバについては後述するが、東毛地方における「ひよっこ踊り」とその囃子の伝播状況については更に今後の課題として注目したい。

大輪では由緒不詳であるが、踊りに使う木彫の面が多数保存されていることに注意したい。この面は現在でも使用されている。写真に見られるように、なかなか品のよい出来ばえの面である。

中谷の祭囃子で興味をひかれたのは、ここニンバ曲が館林へと伝播し、いわゆる「館林ニンバ」になっていることである。館林ニンバの録音テープを聞かせてもらつたが前述したひよっこ踊りや八木節の囃子などもアレンジして取り入れはなやかで、ぎやかな曲に変っている。しかし、太鼓の打ち数は、中谷のそれよりも少なくなっている。ともあれ、芸能が伝播していく条件として、それを他から積極的に取り入れ、自分の土地のものとしていくリーダー格の人の存在と、その人の創意工夫が必要であることを、今回の調査で実感して知つた。

また、祭囃子の中に、本県ではかなり普及度の高い「サンテコ」が、今回の調査の限りでは聞かれなかつたことに注目したい。サンテコは、埼玉方面では上州囃子とも一名呼ばれているそうである。とすれば明和地方の祭囃子は埼玉、栃木、茨城方面からの影響が強いと考えられる。祭囃子の系譜については浅学のため明確にはいえないが、筆者なりに興味をひかれる問題である。

民謡について

民謡は村内の「民謡保存会」的な組織にささえられ、かなり盛んに歌われている。この中で特に「麦打唄」があげられる。実際にクルリ棒(フリ棒)を振りながら歌える話者がまだ多い。つまり、唄が作業と一緒になつて、まだ生きていたのである。やがてクルリ棒が忘れて去られるにつれ、この麦打唄も、歌うだけのための民謡になつていいであろう。しかし、作業に伴う、あの力強いリズム感を唄の中に、

いつまでも「保存」して伝承させたいものである。

堤防普請関係の唄も採集できたが、すでに歌詞が忘れ去られていく傾向にあった。即共性の強いこの種の唄の特性ともいえる。

盆踊り唄として八木節のほかに、「この地方の特色」と思える「さんた節」「ドコショイ節」のことが採集できたのは収穫であった。特に、この中で注目したいのは「さんた節」である。このさんた節は楽器の編成や囃子方の衣裳等はなやかで、やぐら上で演出効果は十分である。この点は八木節と共通する。流行した年代は、八木節の流行した初期の頃と一致するようである。話者の話の限りでは大正末頃までは、八木節と並存していたと考えられる。西・北毛等に見られる八木節以前の盆踊りは囃子とともに素朴なものである。これに対し、八木節と並存する形で、このように演出効果十分の盆踊り唄が存在していたのは、群馬の平担部(東毛)に見られる特徴であろうか。それとも八木節とさんた節との相互影響の結果であろうか。

念仏・和讃について

念仏関係については日程の都合で直接的には斗合田、田島、須賀の三地区だけの調査しかできなかつた。かつては十四日念仏が盛んに行われていたようである。斗合田では「地蔵菩薩念仏帳」「葉餌如来勅行誦」と題して各種の念仏・和讃を記録した綴りを見せてもらうことができた。この地方の念仏・和讃の様子等を知る上での貴重な資料なので、本報告書の中にも「資料」として収録した。ご参照ねがいたい。

(金子緯一郎)

一、獅子舞

(一) 斗合田の獅子舞

由緒・伝承 斗合田の獅子舞はいつの頃から行っていたか不明である。しかし道具を入れる長持の裏に「天下一獅子舞日光文狭流・



斗合田の獅子頭
左より雌獅子、中獅子、雄獅子（斗合田）
(金子緯一郎 撮影)



獅子の頭（古い方の頭）（斗合田 天神社）
(都郡十九一 撮影)

館林宰相石馬頭・宝永三年六月二十四日」と記載してある。宝永三年とは西暦一七〇六年に当る。したがつて、今から二七五年前か、それ以前にすでに行われていたことが推定されている。また、この獅子舞は、昔火男面をつけた道化役がいたり、真剣を使って踊る者がないたり、道中には天狗の面をうけた者がいたりするところから、山伏が教えたものと伝えている。また栃木県今市文挟から踊りが伝えられたといわれているが、確かにない。

踊りの特長は「羽附ささらは跳ねささら、初谷ささらは揃みささら、斗合田ささらは飛びささら」といわれているように、飛ぶ動作が多い。また、神事芸能的なものとして、祓い淨めたり、悪魔を屈伏したり、空に向って折る仕草が多いのが特長とされている。また衣装の袴もタツケ袴でなく、普通の長袴をはいて踊るので、格式の高いものとされている。

この獅子舞は通例夏（現在七月二十三日・二十四日）に行われている

が、かつては雨乞いにも参加した。前述した「天下一」と名づけられたことについて、次のように伝承がある。

その昔、かんばつがついて、農作物が枯死寸前になつたとき、館林城下で雨乞いが行われた。そのとき、斗合田の獅子も参加した。この獅子が雨乞いを行うと、たちまち雨が降り出した。このとき殿様が「この獅子（斗合田の）こそ天下一の獅子である」とほめられた。以来、斗合田の獅子は天下一と称されたという。

また、近年になり、機村政一氏が区長時代にも雨乞いを行つたといわれている。このときは、板倉の雷電神社から御神水を

もらい受け、これを大らに入れ、更に古い獅子頭を中に浮かせて、獅子舞を踊りながら、何回も御神水を獅子頭にかけ、雨乞いを行つたところ、雨がものすごく降り出したという。

（明和村の文化財と歴史）による

流派

日光文挾流と伝えている

獅子 一頭一人立三頭組（雄獅子、中獅子、雌獅子）獅子頭はそれぞれ白鷲（白鳥の尾毛を利用）をつけているのが特徴である。

曲目 うす女（雌獅子とり）、鐘巻、平さら、橋わたり、弓くぐり、

梵天、笛がかり

楽器 箏道具類 縹太鼓（三）、笛、万燈花世（四）、ちょうちん（四）、

旗、桶、弓、釣鐘、ヘビ、衣装一式（わらじ、ひもつきの足袋・長袴、

着物（半切れよりや長いもの）、甲あて・手甲）

新習い・練習はじめて獅子舞を練習する者を「シンナライ」とい

う。新習いは小学校五、六年生位の男子で、昔は長男に限られていた。

新習いは現在一年おきに三人ずつ入ってくるが、昔は毎年で、練習も三日からはじまつた。現在、練習は十日頃から一晩おきにつけられ、祭りの前の夜は、摺込みといって、まつり番に練習をした獅子舞を見せてもらう。師匠は雄獅子、中獅子、雌獅子のそれぞれの獅子に、正副

の師匠が当る。

花こしらえ・祈り 七月二十三日には朝から村の者が集まつて、万燈の花つくりや、また獅子つくりを行う。つまり祭りの準備をする。これが約半日かかる。

準備が終ると、「祈り」と称する獅子舞を行う。まず獅子舞いは同じ敷地内にある八坂神社と愛宕神社に奉納される。そして、村社の長良神社→天神様→稻荷神社（下赤子）→松井田權現様→八幡宮→湯殿様→稻荷神社（上赤子）と廻って、舞いを奉納して行く。これを「祈り」という。舞う曲目はヒラザサである。

本祭・厄神除け・お札 七月二十四日は本ササラ祭りである。獅子はまず愛宕神社→八坂神社→本堂→戦没者供養塔の前で舞う。昔はこの後に、前日の「祈り」と同じ各神社を廻つたが、現在では省略している。

この後、「厄神除け」と称して村境を廻つて廻る。昔は二十五日であったが、現在では、二十四日にこれを行つていている。廻るコースは次の通りである。

下江黒境→土手に入つて千津井境→水神様（三カ所）→飯野境→あみだ様→西江黒境
これを斗合田を中心にして、東西南北でいうと、東は飯野境、西は江黒境、南は利根川、北は岩田境ということになる。

ヤクニワ 厄神除けが済むと、ヤクニワといつて、昔は神寺総代の家と師匠の家へ廻つて、いわゆる、「ヤクニワ」を舞つた。この舞は子どもでなく、経験をつんだ青年たちが行つた。「弓ぐぐり」とか「カネマキ」等、相手の希望に応じて舞つた。現在では区長の家と、社寺総代及び師匠の代表の家、各一軒ずつで舞うことにしている。なお、ヤクニワでヒラザサラを踊るときは、笛は「イリハ」の曲となる。

お礼ササラ ヤクニワが済むと、観音様（中内コーチ）を経て、万日堂で「ササガカリ」を舞う。ここで舞つたものは、前記したヤクニ

ワを以後つとめることができる資格のようなものを持つしきたりになつてゐる。

更に「お礼ササラ」といつて愛宕様でスリ、更に薬王寺の本堂でスツでこの日の行事は終りとなる。この頃には日も暮れ、終了までには夜おそくなるのが普通であつた。

道中笛のこと等 獅子が移動するときの、道中の行列は、つぎのように組まれる。

旗—花がさ（四）—笛—獅子（雄獅子・雌獅子・中獅子の順）

出発するときは、「ブツソロイ」と称する笛が吹かれる。つぎに笛は道中笛となり「オカザキとなヒツトヤ」などのメロディになつて、行列は進行する。そして、目的の神社の入口にさしかかると、笛は再びブツソロイの曲に切り変わる。そして神社ではヒラザサラと称する舞が演じられる。以下、このようにして獅子は移動して歩く。笛吹きの服装は思い思いのもので、むぎわらぼうしなどをかぶる。むぎわらぼうしなをかぶると、ぼうしが他の者の笛の音をさえぎるので、自分の笛が吹きよいといふ。

また昔は昼になると宿泊（ヒルヤド）と称する家に立ち寄り、そこで昼食をとる。昼食は「サシメシ」といつて、炊きたての飯に水をかけて食べる。おかげはナスの油みそなどであった。この飯は青年たちが炊いた。
シシ洗い 七月二十五日はシシ洗いといつて世話人（各班から八名）がよつて、獅子舞の衣装などを洗濯する。洗濯は引きつがれた方、つまり新しい世話人がすることになつてゐる。昔はこの役を青年がやつたといふ。洗濯をするものは、甲あて、掩着物、手甲、足袋などである。これらは、激しい舞いのために、汗にまみれている。

（二）下江黒の獅子舞

由緒・流派 不詳



下江黒の獅子頭
左より雄獅子、雌獅子、中獅子（下江黒）
(金子緯一郎 撮影)



「橋がかり」を演ずる時に使う橋（下江黒）
(金子緯一郎 撮影)



獅子舞の時の万灯に使う般帳の一部。
絵柄はサノオノ尊のオロチ退治の
場面（下江黒）
(金子緯一郎 撮影)

獅子の当番役といつた。これには一年交替で三軒の家が当つた。

新習。練習。新習
いはまずヒラとオンベを習う。小学校の

三年、四年生から六年生までの子が新習いとして入ってきた。

昔は長男が全部入ってきた。

獅子舞の練習は六月三日から一日おき

に、十三日までつづいた。師匠について、区長や宝寿寺、師匠の家などで練習をした。

折り 旧六月十四日を折りといつて、この日には獅子舞の準備をした。午後一時頃集まつた。下江黒の「男あるぎり」（男全部）集まり、獅子を組む者、花笠をつくる者等、各係に分れて準備を整えた。

本祭り 旧六月十五日。この朝、むらの人たちは朝飯を食べずに八坂様に集まつた。そして供物に上つた赤飯を食べた。

このあと、獅子は行列を組んで村を廻り、主要な箇所で、獅子舞を行つた。

行列の順序は次の通りである。

花笠—笛—獅子（雄獅子・雌獅子・中獅子）—諸器具の係（かかりのもの等を舞うときの大道具、小道具等）

廻る順序や各所で演ずる曲目等は次の通りである。
八坂神社を出発するとき、まず笛は前奏曲を奏する。出発すると笛

の第三日曜日に行われているが、以前は旧六月十五日が本祭りであった。以下の記述はこの頃のものを中心とした。話者からの聞き書きによるものである。

寄合 旧六月一日には、毎戸一人寄り集まつて、祭りについての相談をする。祭世話人はコーチ毎に二人出る。若衆組の中老（三十歳以上の者）がこれに当つて、祭りの運営方面的世話役となつた。また

この獅子舞は、むらの八坂神社の祭りの時に行われる。現在、七月の祭りはこの頃のものを中心とした。話者からの聞き書きによると、この獅子舞は、むらの八坂神社の祭りの時に行われる。現在、七月の第三日曜日に行われているが、以前は旧六月十五日が本祭りであった。以下の記述はこの頃のものを中心とした。話者からの聞き書きによるものである。

新習 練習 新習
いはまずヒラとオンベを習う。小学校の三年、四年生から六年生までの子が新習いとして入ってきた。

獅子舞の練習は六月三日から一日おきに、十三日までつづいた。師匠について、区長や宝寿寺、師匠の家などで練習をした。

折り 旧六月十四日を折りといつて、この日には獅子舞の準備をした。午後一時頃集まつた。下江黒の「男あるぎり」（男全部）集まり、獅子を組む者、花笠をつくる者等、各係に分れて準備を整えた。

本祭り 旧六月十五日。この朝、むらの人たちは朝飯を食べずに八坂様に集まつた。そして供物に上つた赤飯を食べた。

このあと、獅子は行列を組んで村を廻り、主要な箇所で、獅子舞を行つた。

行列の順序は次の通りである。

花笠—笛—獅子（雄獅子・雌獅子・中獅子）—諸器具の係（かかりのもの等を舞うときの大道具、小道具等）

廻る順序や各所で演ずる曲目等は次の通りである。
八坂神社を出発するとき、まず笛は前奏曲を奏する。出発すると笛

は道中笛に変る。道中笛は「一つとや」「子守唄」(ねんねこぶし)「数え唄」等五種類ほどある。

長良神社の境内に入るとき笛は「二八」の曲となる。ここでは獅子はオンベをスル(舞う)。次に八幡様(長良神社境内未社)で、チュンロレをスル。次に氏子衆の碑前(同社境内)と金剛院の不動様の前で、同じくチュンロレをスル。次に戦死者の供養塔等の前でチュンロレをスッて午前の部は終りとなる。

昼にはサシメシを食べた。

午後は上江黒の宝寿寺で「本二ハ」をスル。本二ハとは前述した曲のうち、オンベ、ヒラ以外のものである。例えば「橋がかり」のようなものである。次に同寺の境内にある馬頭観音の前で本ニワをスル。次に区長宅→師匠宅と廻って本ニワをスル。(現在では省略している)次にスリコミと称して以前は獅子宿で宿札として本ニワをスルが、現在では金剛院の庭で間に合わせている。

厄神除け 旧六月十六日、この日は最初に獅子はむらの神社と希望するむらの家を一戸一戸廻った。獅子は縁側から家に入つて各部屋をめぐつて、ダイドコロに下り、トボロから表に出た。これが済むと辻廻りといつて、部落の境界へオンベを納めてくる。このオンベは「オンベ」をスッた時のオンベを使用することになつている。

花分け 旧六月十七日は「花分け」といつて六月十四日に造つた花笠の花を、むらの人たちに分けてやる。この花は魔除けになるといつて、もらつた人は玄関の柱などにかざつておく。

(三) その他の地区的獅子舞

須賀 天神様の祭礼は春三月二十五日、秋十月二十五日だったが、その後、四月十五日と十月十五日に祭るようになつた。鎌田神主の都合である。赤飯を親戚とやりとりした。当日は集会所に神主や世話人



獅子頭 (江口 諏訪神社) (板橋春夫 摄影)

が集まり、獅子舞の装束を付けて、ショウ・笛・太鼓をたたいて行列を組んで、オネリして天神様へ行つた。昭和初めごろまでしていたが、戦争中に中止した。その後は、神社で式典をして終る。獅子舞はしなかつた。(須賀)

川俣 水前(明治四十三年の洪水以前)には獅子頭の黄色い布の中に入り、笛・太鼓を鳴らしながら各戸を歩いた。

雄獅子(2)、雌獅子(1) 棒使い(2)で構成し、道具持ちが付いて行く。演じる人は長男が多く。小学校四、五年生のうちからやつた。

最初に棒使いをしてから、獅子舞に移る。(筆)は高さ一㍍ほどの草刈籠形の籠の中に一人入つて蛇を持ち、笛の曲に合わせて蛇を出し入れて行く。

するが、しまいには回りで舞つてゐる獅子が、その蛇を飲む所を作をする。「カネマキ」という名稱である。「花」は花笠をかぶつた四人が四隅に立ち、互いに縫うように踊る。

「弓くぐり」は二人で長さ二㍍の弓を引張つて、くぐつて踊る。獅子舞の笛は竹製で、朱塗りのいい笛があり、座敷に上つて吹く。

七月二十四日が三島神社夏祭の本番で、獅子舞は申し込まれた人々を回つて演じた。魔除け

けのため、お祓いを持つて座敷に上り奥まで一巡してから、庭へ出て踊つて行く。家族が獅子頭をかぶつてもらうと悪魔除けになるという。家では賽錢を出した。獅子頭は鳥の羽根を付けたもので、歌はない。笛はテープに吹き込んである。(千津井)

二、祭囃子・踊り

(一) 大輪(上)の祭囃子と踊り

この村の祭囃子と踊りは、むらの八坂神社の夏祭りのときに演じられる。祭りは以前は旧の六月十日であったが、現在では七月十四日(宵祭り)と十五日に行われる。各舞組から一人ずつ出る計十三人の世話人と、この中から決められた三人一組の年番を神社継代等が中心になつて、祭りは運営される。祭りの費用は、各戸から平等に徴収される祭典費と、特殊寄付でまかなわれる。大輪下の戸数は現在、百戸ぐらいである。

囃子についてのこのむらへの伝播経路等については不詳であるが、江戸の方から伝つてきたものと語られている。踊りについても不詳であるが、約三百年ほどは経つていると、伝えられている各種の面をかぶつて踊つている。(写真参照現在、原口日出男氏、吉本謙次氏、早川惣一氏らが師匠として、約二十五人位の子どもや大人たちに教えている。

現在では、舞台を作りその上で演じられている。それ以前は屋台の上で演じた。また屋台になったのは正十五年からで、それ以前は万灯をかざつたカサボコであつたという。屋台は二間×三間ほどの大きさで、車輪がついており移動できる。屋台は夕刻から、子どもや青年たち、また消防団の者が引いてむら内をまわつた。

囃子の楽器は笛(2)鉦(2)大太鼓(1)小太鼓(2)で編成される。踊りは十二種類ほどあるという、現在、小学校の五、六年生の

男女が中心になって踊つてゐる。屋台の上で踊るが、その下でも踊る子もある。

まず、囃子は「サンバ」が奏され、つぎに「ショウテン」となり、つぎに、「ニンペ」となつて、屋台は神社を出発し、むらを廻る。そして神社の庭にもどつて「四方がため」(神田囃子)が奏され、手打ちとなつて終る。夕刻六時頃からはじまつて十二時頃までかかるといふ。

踊りは、それぞれの曲に合せて演じられる。



サンバ踊りの面(大輪上)(金子緯一郎撮影)



ニンペ踊りの面(大輪上)(金子緯一郎撮影)





トーカ踊りの面（大輪上）
(金子緯一郎撮影)

ニンバの一つにネンコ踊りがある。これは子もり唄の「ネンコロリヨ、オコロリヨ」の曲に合せた踊りである。女人の人

が、子どもを背負って踊った。

また、子ども同士でも背負い合って、踊つたこともある。

また、ひょっとこ踊り（ニンバ）は主として大人が踊る。ひょっと

このお面をかぶり「トーカ」（白ギツネ）のかつこうをして踊る。これ

らの踊りに使う衣装や面は、現在原口日出男氏宅に保管されている。

囃子や踊りの練習は祭りの一ヶ月前ほどから、はじめられる。現在、

男女合せて二十五人ほどの子どもたちが、前記した師匠を中心にして練習をしている。以前は館林や羽生方面へも出向いて踊つたことがあるという。

（二）中谷の祭囃子と踊り

この祭囃子のときに演じられる。八坂神社は、長良神社の中に祀られている。祭日は、現在、七月九日（宵祭り）と十日であった。祭世話人のこのをパンチユウ（番中）といい、一年交代で、コーチの中で六軒一組（六人）が当る。

以前、七月一日を「引き渡し」といつて、新旧の祭世人の引継ぎが行われ、この日から祭りの準備にとりかかった。この日には、寺世話人や村の評議員、区長なども立会う。七月七日には役員が寄つて、祭りに必要なものの買物をする。以前は七月一日から七日まで村中の者

が寄つて、行燈を張り替えその上に絵を描いたりして、祭りの準備をした。昔は、戸数四十戸（現在、約百戸）ほどであった。行燈は七月九日には、寺から村境まで立てられた。行燈の絵には、味そをすつている場面などが描かれていた。これは戦争（太平洋戦争）前までつづけられていた。

七月九日の朝飯前には屋台も組み立てられる。屋台は一間半×二間ほどの規模のもので前部が踊りのステージとなり、後部で囃子を奏する。屋台は明治の初年頃から出るようになったと伝えている。

屋台は以前、村内を廻った（七月九日）まず八坂様の庭から出発し、西の村境まで行き、もどって踏切（東武線）から中谷駅まで行き、長良様の庭、つまり八坂様までもどってきた。この庭は寺の庭にもなっている。以前は区長の家にも行つたという。

子どもたちはつなを引き、大人たちは屋台の本体に付いて、動かした。方向を変えるときは、屋台の前と後に大人たちが分れ、持ち上げた。囃子は屋台上で演奏された。

樂器は、つづみ（小太鼓）（2） 大太鼓（1） 笛（1） 鉦（擦り鉦）（1）の編成である。

演奏される主な曲は「ニンバ」「ニンバくすし」「新ばやし」「中谷追い込み」などである。村の人たちが演奏する。この囃子は保存会の武田ひろし氏等の手によって、伝承されている。

ニンバは東京方面から伝わったものといわれる。しかし、東京のニンバより、中谷のニンバは太鼓の打ち数が少ない。更にこの中谷のニンバは館林村へ移つて、館林ニンバとなつた。この方は、中谷のニンバより太鼓の打ち数が少なくなつている。

「ニンバくすし」これはニンバが一つおり、その中間に、二つのニンバの変形したものが入る曲である。羽生町の祭りのときなどにもこ

きには、これに合わせて踊ったという。

「新ばやし」は節（ふし）の一単位が長いから、むずかしい囃子とされている。

屋台が村を一巡し、再び神社の境内に入る前に囃子はニンバとなる。そして境内に入ると囃子は「追い込み」となる。この追い込みは中谷の独特のもので、太鼓の打ち数の多いかなりテンポの速い曲である。この曲になると屋台の座敷から上部がグルグルと回転し出す。つまりこの屋台は床上の部分から屋根を含めて回転する仕組になっているわけである。かなりはげしく回転するので、乗っている人は足を「ふんぱつて」いないと、振り落とされてしまうという。特に屋台の上にあがっている二人（前後に一人ずつ）は、飛び出して落下しないよう気をつけていたといふ。

踊りは現在「ひよっこ踊り」が伝承されている。屋台上で、囃子に合せて踊る。ひよっここの面をかぶる半てんを着て、一人で踊つた。これは、大人が踊つた。このむらでは足袋屋のおじさんがうまかったといふ。

七月十日には、神主が乗り、前日の同じコースを屋台は廻つた。

七月十一日は、「屋台こわし」で屋台を解体し、神社の境内にある倉に納められる。またこの日は「厄神除け」といつて、村境に、しめ縄（八丁じめ）を張つた。これは神主、区長、寺役人などが立会つた。

三、民謡

(一) 作業唄

麦打唄 麦こなし唄とも呼んでいる。かつてはこの地方では、大麦の耕作が盛んであった。しかし明治四十三年の大洪水のあと、利根川の河川改修工事のために、かなりの面積の田畠が買取された。このときを境目に、ムラは農耕をつづける者と、勤めに出る者等に分れ



クルリ棒を使っての麦打ちの型（下江黒）
(金子緯一郎 撮影)

は庭いっぱいに揚げて「土干し」をする。これを約二、三mほどの竹棒の先に、約一mほどの転回する棒を取りつけた「クルリ棒」あるいは「フリ棒」とも呼ぶ棒で叩かれた衝撃によつて、大麦の実は穂から分離していく。根気と力のいる作業である。

この作業は穂の乾燥度の高い日中の日盛りに行う。この作業にかかるのは、湿氣は禁物なのである。湿氣をもつと粒は穂からうまく分離しないからである。また、六月下旬から七月上旬にかけての暑い時期に行われる所以、この麦打ちが、農家にとって、いかに苦しい作業であったかは想像にあまりある。

麦の量によつても異なるが、ふつう、この作業は近所の二、三軒の人たちが手伝つて、お互に協力し合いながら行う。これを「テマツカリ」とも「モヤッコ」とも呼んでいた。

このときの服装は、女衆は、わらじばかりで股引きをはき、短かいつ

てしまった。それ以後、大麦の生産量も減少したと伝えられている。したがつて、この麦打唄が、ムラ中、盛んに歌っていたのは、明治四十三年の大洪水以前のことであると推測される。

しかし、その後も麦作の多い家では歌を歌いながらの、麦打ちをつづけていたといふ。麦打唄とは、麦の穂から粒を棒で打つて分離させる作業である。まず刈つて

きた麦（大麦）を「サナブチ」をして、穂を落す。穂は庭いっぱいに揚げて「土干し」をする。これを約二、三mほどの竹棒の先に、約一mほどの転回する棒を取りつけた「クルリ棒」あるいは「フリ棒」とも呼ぶ棒で叩かれた衝撃によつて、大麦の実は穂から分離していく。根気と力のいる作業である。

この作業は穂の乾燥度の高い日中の日盛りに行う。この作業にかかるのは、湿氣は禁物なのである。湿氣をもつと粒は穂からうまく分離しないからである。また、六月下旬から七月上旬にかけての暑い時期に行われる所以、この麦打ちが、農家にとって、いかに苦しい作業であつたかは想像にあまりある。

麦の量によつても異なるが、ふつう、この作業は近所の二、三軒の人たちが手伝つて、お互に協力し合いながら行う。これを「テマツカリ」とも「モヤッコ」とも呼んでいた。

このときの服装は、女衆は、わらじばかりで股引きをはき、短かいつ

その着物をきて、たすきをかけ、前かけをかけた。また手甲をつけ、頭には「てねげえかぶり」と呼ぶ手拭いをかぶつた。これは頭のうしろでむすぶ手拭いのかぶり方の一つである。その上に、菅笠をかぶつた。男衆は、わらじばかりで、股引きをはき、シャツを着て、頭には鉢巻きをし、ムギワラ帽子か菅笠をかぶつた。ときには、駒下駄をはく人もいた。下駄で穂をふむことによつて、実が分離しやすくなるからだという。しかしこのときの男衆の主な仕事は「トーミかけ」(後述)で、麦打ちは女衆が主体となつて行つた。

麦打ちのし方は、大きく分けて二つある。一つは「合い打ち」といつて、幾人かがお互に向き合つて打ち合うし方である。もう一つは向き合つた相手のいない打ち方である。この方は、なんという打ち方であるか、名前は聞かれなかつた。どの打ち方にせよ、お互に気持をそろえ、リズムに合わせて棒をふることが大切であつた。特に合い打ちのときなど、調子が狂うと、相手の肩や足などを打ちすぎる結果になる。また、打ちながら次第に移動して行く技術もむずかしい。こうして庭に乾し抜けてある穂を、むらなく打ちつづけて行くのである。移動する巾が狂うと、それだけ打ちむらができる。熟練した正確さと、リズム感を必要とする作業である。

麦打唄は、みんなの気持ちを捕え、作業のリズムやテンポを捕えるために役立つた。また歌うことによって、疲労もまぎれた。唄は合打ち唄の方が、ややテンボが速い。歌詞は合い打ちでない方もとも共通するのであるが、今回の調査では、つきのように区別して、話者は歌つてくれた。

麦打ち唄

(合い打ち)

ハア ドッコイドッコイ

お江戸けき出で春日部泊り

ハアドッコイドッコイ 晩の泊り

は小山か古河か ハアドッコイ ドッコイ 同じ旅電はなごじゃそりや
古河がよい

(合い打ちでない方の唄)

ハアドッコイドッコイ

古河の二丁目の油屋の娘 ハアドッコイドッコイ 油とろとろ

腰までつけて ハアドッコイドッコイ 腰の光で古河の町照らす

ハアドッコイドッコイ (以下略)

嫁に行くと洗濯までしたが へそがでべそでやれ嫌らわれた
右の歌詞は田口きく氏(上江黒)の歌つたものによつた。歌詞はもつと多くあつたと思われるが、他はすでにこの地方では消えてしまつているようである。また歌の終りの方につく囁きことばも「粉んなれ粉んなれ 粉にしてどうする ダンゴにまるめてホーとしょ」とか打ちながら移動するときの囁きことばとして「上町へ着いたら下町へ下がるよ……(以下不明)」という断片的なものを、からうじて聞き出すことができた程度であつた。

さて、麦打ちが済むと、これを男衆が「トーミ」にかける。これは大麦の実といつしょに混在しているノゲや小石や砂、またゴミなどを取り去る作業である。「トーミ」とは一種の手動式の通風装置で、この中を通してさせることによって、大麦の粒とゴミ類は選別されてくる。

一回通すだけではゴミ類が完全にぬけ切れないで、普通二回通す。それぞれ一番ドーミ、(または一番掛け)二番ドーミ(二番掛け)と呼んでいる。二番ドーミが済むと麦粒は俵につめ込まれる。一番ドーミはまだゴミ類がいつぱい混つてるので容易でない。一種の手動の風車を廻す作業であるから、腕に力がいる。特に一番ドーミには力がいる。男衆の体は汗だくになる。それに麦穂のノゲがとんできてはりつく。これが首すじなどにはいると、ものすごく痛がゆくなる。これを

「ノガッボイ」などといつてゐる。男衆は素肌の上にミノをつけたり

して、このノガッポサを防いで、仕事に取り組んだという。

昼食のおかずには、ボーニンの煮たのや焼豆腐などが出た。また、夜はボタモチ、ウドン、スシなどをこしらえて、手伝いに出た人たちに食べてもらつた。これは仕事の終った祝いの意もあった。これらは女衆が準備した。そのため女衆は「ごくろう質」として、男衆より一足先きに仕事をあがつて、ごちそうの準備にとりかかつたといふ。

(下江黒・上江黒・南大島下・千津井)

堤防工事の唄 堤防工事の作業工程にはさまざまあるが、この中に①杭打ち②土羽打ち③タコ掘きと呼ぶ作業がある。作業の順序は番号のとおりである。これらの作業は唄に合せて行われる。唄によつて作業員の気持を揃え、作業能率を高めて行く。また、唄によつて作業からくる疲労感もまぎれる。

まず杭打ちであるが、杭は通常、川と堤防との間(堤防のそなわ部分)に打ちならべて行くが、修理のときは堤防の真中にも打ち込む時がある。この杭は堤防の支柱のような役目をする。

杭はやぐら状に組まれた支柱の真中に下げる、柱状の真棒を上

下させることによって、打ち込まれていく。真棒は多勢の作業員が、綱を引くことによって、まず上に持ち上り、その綱をゆるめることによって、垂直に落とし、その下にある杭の頭に衝撃を加える。この力によつて杭は打ち込まれて行く。作業員の掛け声や唄に合せて、真棒の上下運動はくり返えされ、幾本もの杭が打ち込まれて行く。また、真棒に「見ドリ」と呼ばれる者がいて、的確に杭が打ち込まれるよう、真棒を向つけたり、また、その他必要な指図を作業員に与えて行く。

このときの唄は単純で、むしろ掛け声のようなものが主体になつてい

る。

杭打ち唄
ヤレコノエンヤーラ ヤーレー

ヤレコノエンヤーラ ヤーレー

南は利根川北は渡良瀬
ヤーレー (下江黒)
この唄には、その場の気分や調子によつて、即興的に歌われる要素が強い。歌詞が強い。歌詞というより、「ヤレコノエンヤーラ」という掛け声が主体になつている。その場を通りかかる人のこと等、なんでも唄にしてしまつたという。(下江黒)

土羽打ちは、棒打ちともいつて、長さ二、三m、直径3cm位の棒で、主に土手の傾斜面の土を打つて固める作業である。この作業は女性が主体となる。六人から八人位が一組となり作業が進められる。地下足袋をはき、モンへの上には半切れの耕の着物を着て、帯をしめ、たすきをかける。頭には手ぬぐいをかぶつて、更にむぎわらぼうしをかぶる。こうした身支度で作業に取り組むが、この時に歌う歌が「土羽打ち唄」である。「土羽打」とも呼んでいる。
歌詞は即興的なものが多いが、南大島下で採集できたものは、つぎのようないつた。

土羽打ち唄

えんやこらせー、皆さん頼みだ
それ固めてよう それ固まれます

(バタン／＼ 棒の音・以下略)

力を入れてよう、平にならして よんやや、ならして よう それ固まれよー

固めようー 地底までも

えんやこらせー それ固まれよー (南大島下)

タコ掘きとは、大きな石を幾本かの綱でつり上げたり、落したりする動作をくり返えしながら、主として土手の上部の土をつき固めて行く作業である。綱は六本とか八本等、つき手の人数に応じて、本数を

加減する。繩はタコの足のような状態になるわけである。

この作業は主として農閑期を利用して行われる。タコ掻きは農家の主婦たちの内職的な仕事であった。朝の八時頃から夕方まで仕事をして、一日の賃金は九十銭位（大正の頃）であったという。かなりきつい作業であった。この作業は次のような唄に合わせて行われた。音頭取りも一緒につきながら歌つた。また、このとき男たちはカルコで土運びを専門に行つたという。

タコ掻き唄 (1)

（×のところで石を落す）

よいとーここーらさあよ ×
こらさでまた頼みます ×
皆さんまたお上手だそうで ×
よいとーここーらさあよ ×

よいとーここーらさあよ ×
日光のまた手前でそれ ×
今市でまた泊りだそうで ×
よいとーここーらさあよ ×

タコ掻き唄 (2)

（下江黒）

雨が降つてくる庭の薪は濡れる
背中じや子がなく やれ飯はこげるよ（斗合田）

土搗き唄

いたこ出島の、エーンヤレー このヤーレー
(引手) これわの、ヤーレー
(真棒を、どしんと落とす)

地底までも、エーンヤレー このヤーレー

（引手）これわの、ヤーレー

あの娘、良い子だ、エーンヤレー このヤーレー

機織唄 (引手) これわの、ヤーレー 左の歌詞は話者（明治四十年前後に生まれた人たち）の母親が機織をしながら、盛んに歌っていた歌であるという。
いやだいやだよ機織りやいやだ またも来る来る市が来る アー

チャカリコチャカリコ（千津井）

おそらくこれは實機織りの歌であろうか。機（はた）市が近づいてくると、機屋が實機織りの家を廻り織布をあげにくる。それまでに織りあげなければならない織り子の辛苦を歌つたものであろう。

このほか「四十女が糸一本で負ける」とか「糸のすじようで……」とか色々の歌詞があつたというが、断片的に記憶しているだけで、すでに忘れ去られていた。（千津井）

麦つき唄 人力で麦つきをした頃の唄である。踏み棒を左右の足で交互に踏むと、その先端にある石やすに、杵状の棒が動いて、中にあぐをつく仕掛けになっていた。今回左の歌詞だけが採集できた。
ひきわりご飯に茶つ葉のおここじや、じがら石うすの頭が大蛇に見える、ドッコイ、ドッコイ（千津井）

(二) 盆踊唄・他

八木節 大輪地区では昔から八木節が盛んであった。大正十五年から昭和十年頃まで活躍した人で、松本信一という人がいた。堀込源太の弟子で、ウタシンと呼ばれていた。歌わせると廟の立つ人であった。

また佐貫には金子只八という人がいた。この人も美声で、声が立つたので、チクオンキと呼ばれていた。
この頃は、どこの八木節大会に出場しても一等賞をもらつた。そんな時は村中でお祝いをした。昭和十年頃、館林の分福グランドで行つ

た大会でも一等賞をもらつた。この時は三日三晩歌いつづけた。賞品には米十俵をもらつた。二等は麦十俵であつた。

この頃の八木節をやる人の支度は、ユカタを着て、鉢巻をした。

踊りは日笠、菅笠、ザンザ踊りなどであつた。演題は国定忠治などであつた。

その後もひきつづいて八木節が盛んであつた。現在、むらには八木節クラブがある。会員は大人三十人、子供二十人ほどである。(現会長原口日出男氏)

踊りの振りつけなどは会長の原口氏が考案してやつてある。踊りは大人より、子どもの方が身体が「シナウ」のでうまいという。ちなみに、この地区では八木節クラブのほかに、さつき会、民謡クラブ、カラオケクラブなどがあつて、演芸方面は盛んである。

センス踊り 八木節に合せて踊るセンス踊りは源太の頃からあつたもので、黒紋付きを着て、角帯をしめて、センスを持って踊つたといふ。



八木節に合せて踊る「センス踊り」(大輪上)
(金子雄一郎 撮影)

今回の調査では、川上倉次氏の歌う繼子三次に合わせて、原口氏にセンス踊りを踊つてもらつた。これは同氏が埼玉在の二代目源太

と呼ばれる人から学んだものをもとに、振りつけた踊りであるといふ。また、このとき川上氏の歌つた雑子三次の「止め」の部分に、本田の金山の松などが出てきておもしろいつきのような歌詞である。

……またもつづいてよみたいけれど、最早会所でかわわれの合図山にたとえて申するなれば、新田ごおりはあの金山のこぼれ松葉をしきたところ、野郎だまれの声なきうちにわしの方から段止めまして、あとは大先生におたのみ申すが

オーサイサネー(大輪上)

さんた節 さんた節は邑楽郡の板倉方面から明和村では特に大島が盛んであった。話者の今成久雄氏(明・41・生)が子どもの頃から続いたが南大島(下)の方では大正十一年にはやめてしまったといふ。唯子は四斗樽(三) 大太鼓(二) つづみ(二) 笛(一) 鉢(一) である。樽をたたく人を「タルバンタタキ」といい、鍾をチリカラともいつた。また、つづみは竹を薄く削つたものを何本か麻糸でまいて東ねたものでたたいた。

音頭取りは浴衣を着て、手にはセンスを持った。

タルバンタタキは青や赤の派手な麻の葉の模様のついた角袖の襦袢を着た。そして、サンジャクみたいな帯をした。襦袢の胸は白であつた。そして、ヒキマワシというサルマタミみたいなものはいた。これをきつちりとしめると下腹に力が入つてよい。頭には鉢巻きをして、その上にスゲ笠をかぶつた。ザンザをかぶるときもある。ザンザとは麻糸を色々な色に染めたひもをさげた笠である。

タルバンタタキはやぐらの正面に位置し、一本のたたき棒を、一本づつ左右の手に直角ににぎり、その先端でたてに立てる樽のカガミの部分を突くようにしてたたいた。「エッサ、エッサ」とかけ声をかけながらたたき、はね上がるようにして踊つた。調子にのると、一尺ぐらいはね上る。笠のザンザがゆれて、なかなか意気なものであつた。あまりとびはねて、やぐらの上から落ちた人もあるたといふ。つまり踊り

はタルパンたきが踊つたわけである。

囃子は「チャッポボ、チャッポボ」という感じで、演題は「秩父争動」「継子三次」などであつた。また邑楽郡の「村づくし」もあつた。

以前はむらの「若連」が「七軒若連」などと書いた大きな提灯を持つて、板倉の方へも出向いて、さんた節を踊つた。この頃、埼玉県の羽生方面では、イナゴのはねるみたいな踊りをやつていたといふ。さんた節とも八木節とも、秩父音頭ともつかない柔らかい感じのするものであつたといふ。(南大島下)

ドコシヨイ節

このドコシヨイ節は、昭和十年頃まで歌われていた

盆唄であるといふ。特に館林方面の広い水田耕作の地方に盛んであつたといふ。(以下「伊勢音頭」までの歌詞は後日、南大島下今成久雄氏が送付してくれたもの)

歌詞の一部は、つきのとおりである。

さーさ これからだよ ようみなさんよ 国をどこよと尋ねて聞
かば ドコシヨイ

国は上州邑楽の郡(こおり) 邑楽郡で館林在、其のや東で當若連
だ ドコシヨイ

今年しや世が良い豊年で、広い田圃に稻穂が揃い、村の祭りの太

鼓がひびく ドコシヨイ

世にも名高い板倉電様に、豊作祈願に参詣いたす ドコシヨイ

（南大島下）

伊勢音頭 この伊勢音頭は、結婚式や上棟式、また、孫だき等のめでたい席で歌われたといふ。孫だきには嫁の実家から、米、かんびょう、かつおぶしなどを、とつぎ先の家にとどけたといふ。歌詞はつぎのとおり。

伊勢はない 津で持つ 津は伊勢で持つ

尾張り名古屋は やんれ城で持つ
(囃子) さあさやれとこせ よんやなあ それはのせ あれはの

せ このなんでも伊勢

めでたなあい めでたがあつい 三つ重なれば 床に鶴と亀 や
れ五葉の松 (以前と同じ囃子・略)

おばばなあい どこ行く 三升樽(さんぼんづる) さて 背中にしようつたは そ
りやなんだ お米に干瓢(かんぽう) に腰男節 嫁のなあい 在所に やん
れ孫だきに (南大島下)

唄 相撲甚句 この相撲甚句は、この地区では現在、お祝の席にうたう
相撲甚句 さあさみなさんやりましょじやないか 相撲甚句でもおそそでも
相撲甚句 さあさみなさんやりましょじやないか 相撲甚句でもおそそでも
コリヤコリヤコリヤ

おすもうとりとは大きなとりよ 四本柱の中に住む コリヤコ

リヤコリヤ ほれて通え千里も一里 長い田圃もひとまたぎ コリヤコリヤ

コリヤ (千津井)

(三) わらべ唄

まりつき唄

さんのうはなをお稲荷さんは
何がお好きか当ててみな
ててちよんまめちよんまめ

タベエベス講で
呼ばれていつたら

おだいの吸い物

いっぱいおすすり、すすり
二杯おすすり、すすり

三ばん目には

どんがらめ

(明和公民館保存録音テープより)

名無しのこんべえさん
魚がないとて
いけませぬ、いけません

おはらせをたてては
まづつかんかしもうした（千津井）

一番はじめは一之宮
二また日光中禪寺
三に佐倉の宗五郎

四また信濃の善光寺
五つ出雲の大社
六つムラムラ鎮守様

七つ成田の不動様
八つ八幡の八幡宮

九つ高野のコウボサマ（弘法様）

十デ東京泉岳寺

かえたりした。（江口）
てんてん手まりの

手がそれで
垣根を越えて

屋根越えて
隣りのおうちへ

とんでつた、とんでつた（田島）

いちりつとら
らつとりつとせ
しんがらほけきよの
たかちほの

お手玉唄

大黒様という人は
一に僕をふんまえて

二でにつこり笑つて
三で蓋さしあげよ

四つ世の中よいよいと
五ついつものごとくなり

六つ麦をたくさんに
七つ何ごとないよう

八つ屋敷をまえひろげ
九つここへ蔵を建て

十でとこりでおさまった（千津井）

十一、十二
まだ年しや若いね
ねんねを生んで
だれにだかしよ

おまんにだかしよ
おまんどこへいた
油安いにちよつかに

油屋の前で
すつてんころりんころがつて
油一升こぼした
その油どうした

子もり唄

ののさまいくつ

十三、十七
まだ年しや若いね

ねんねを生んで
だれにだかしよ

おまんにだかしよ
おまんどこへいた
油安いにちよつかに

油屋の前で
すつてんころりんころがつて
油一升こぼした
その油どうした

太郎じやの犬と
次郎じやの犬が
みんななめてしもうた
その犬どうした
太鼓の皮にしてしまった

(明和公民館保存録音テープより)

おおさむこさむ

山から小ぞうが泣いてきた
なんていつ泣いてきた
寒いとて泣いてきた

寒むけりやあたれ
あたればいいびいや
いぶけりやひつされ
ひつされば尻がいて
尻がいたけりや縄をしけ

縄しきやのみがいる

のみがいりや食つぶせ (同前)

ねんねんころりよ おころりよ
ねんねの子もりは つらいもの
雨風ふいても 宿はない
ねんねんころりよ おころりよ (千津井)

「ねんねん猫のけつに蟹が這いこんだ。
這いこんだ。二匹だと思つたら……」
かくて十まで数えるうちに
子供はねむつてしまふ。(中谷)



念仏を唱える人たち (須賀) (金子緯一郎 撮影)



薬師如来の前に念仏を唱える人たち (田島)
(金子緯一郎 撮影)

今回の調査では、調査日程等の関係もあって、須賀、斗合田、田島の三地区のみ直接調査をすることができた。以下、順を追って、これらの地区的念仏・和讃等の様子について記述していく。

須賀では毎月「十四日念仏」が行われている。実際には毎月の十四日前後に行っている。

真言宗関係の念仏で、その仲間たちも現在二十人以上もあり、かなり盛んである。梅原の法印様(長柄英信氏)が昭和三、四年頃、この地区へ来て教えた結果、盛んになったといわれる。もちろん、その前にもすでに行われていたという。また現在、後継者をつくるためにも意をそそいでいるという。

四、念仏・和讃

流派は「金剛流」という。地区の有泉に集まつて行われている。ま

ず本尊様に線香とローソクをあげ、「おさんせん」をあげてから念仏はじめる。延と鈴（れい）を使用する。このときの服装は特別に定められていない。

経文はこの地方の出来ごと等を和讃として詠み込んだ地域性のあるものは見あたらなかつたが、かなりのお題目をこなしているのが特長である。

このうち、追弔和讃の一つを左に掲げておく。葬式後の「あと念仏」とこの地区でもいわれてゐるものである。

追弔和讃

供え奉る追弔和讃

人のこの世は永くて

変らぬ春と思えども

はかなき夢より去りにけり

熱き涙の真心を

みたまの前に拝げつつ

面影しのぶも悲しけれ

しかはあれどもみ仏に

救われて行く身にあれば

思ひわざらうこともなく

とこしえかけて安からん

南無大師遍照尊

（須賀）

斗合田でも、かつては月念仏（十四日念仏）が行なわれていた。毎月

十四日にコーチの宿に寄つて行つていた。宿は回り番であったといふ。

十三仏を掛け、祖先の位牌をかざり、線香をあげてから念仏を唱えた。

親方が証をたいた。一つ念仏が終ると同時に線香をあげ、またつぎの念仏を唱えた。

左の念仏は話者の染瀬いと氏（斗合田）が唱えてくれたものである。

念 仏

きみようちようらい七子が 二親様に果てられて

姉は他国の住居なり 妹は三才がんぜなし

朝日に泣くは我一人 お墓参りにまいります

黒羽二重にひじりめん 帯は当世のしゆすの帶

三重にまわして立八の子 白の脚絆に白の足袋

麻うら草履に身をのせて お花とお香を手に持ちて

お寺の大門いそぎ足 お寺のしょえんに腰かけて

がしゃくしょじょうを唱えれば お寺のお尚が聞きつけて

明かない障子を更にあけ 見れば美しくおさな子で

お墓参りにやまだ早い 泣く泣く顔をふりあげ

これこれ申しお尚さん 私の言葉を聞いてくれ

二人親様に果てられて 姉は他国の住いなり

妹三才はがんぜなし 朝日に泣くのは我一人

お墓参りにまいります 落つる涙は寺々の

お庭の小草の露となる（斗合田）

なお斗合田では、肉筆で書写された「地蔵菩薩諸尊念佛帳」等の縁を

見せていただいた。この縁は昭和九年に作成されたものであるが、この

地方の念仏・和讃等の様子を知る上でも貴重な資料なので、本報告書にも「資料」として収録させていただいた。ご参照ねがいたい。

田島では念仏講があり、旧の毎月七日の薬師様の日に念仏を申している。この薬師様は田島地区全体でまつられており、念仏もこの薬師堂で行われる。講員は現在、二十人から二十三人位いる。交替で、二軒が一組となつて当番となり、世話役をつとめる。この日には菓子を五百円位買つてやる。以前はダンゴを重箱に山盛りにつくつて分けて

やつた。このダンゴは「心怪ダンゴ」といつて、かなり大きいものだつた。

また、この田島では「百万遍」も、年二回、現在でも行つてゐる。

田植の前と後に行う。

田島の字「古」と東と後は公館で、上は区長宅で行つてゐる。当番(宿)はまわり番で、以前は一重箱ずつ持ち寄りだつたが、現在では料理は料理屋に注文している。夕方の五時頃から始められ、「ナンダ」(ナンドー)と唱えながら百万遍のじゅずを回した。そのあとオミキを飲み合いの宴会となつた。

なお佐賀地区でも念仏が行なわれてゐる。これは日程等の関係で公館に保存されている念仏の録音テープを聞くだけの調査に終つたが、「観音念佛」「不動念佛」「村念佛」「送り念佛」等が唱えられてゐる。

五、その他芸能・娯楽

オンギョク 音曲であろう。親音様(四月十日)など、村のちょよ

とした行事のとき、余興として浪花節、祭文、船屋、義太夫、マイコなどを頼んでやつてもらつた。これをオンギョクと称した。このうちマイコはヒヨットコオドリをいう。これは板倉・赤羽根・田島・アコウダなどに好きな人が集まつたので、そういう人を頼んだ。笛・太鼓ではやし・おかめ・ひよっこが出る。出し物として「葛の葉」「阿波の鳴戸」「酒呑童子」などがあつた。今でも大同にやれる人がいる。船屋の踊りは板倉町のコッケイ(大字岩田の中のコウチ名)から頼んだ。(上江黒)

旅芸人 大きな家の宅地の空いてゐる所を借りて、掛小屋をしていて宿をかりてやる。建元(親方)は村の人が中心となつて、三、四日間していた。受付けが人數をこまかすのもあつたといふ。お祝いは十円なら二十円と倍に書くことになつてゐる。

歌舞伎芝居 衣裳がたいへんであつた。旅芸人は、掛小屋だから雨が降れば駄目になる。腹だけくくなつていればよく、秋はいもなどろくなものははたべていなかつた。(大佐貫)

祭文 富永村の菅野からきた。(大佐貫)

三河万才 正月に来るが、村中で三軒廻るだけである。その家は帳面に書いてあり、才藏がついてくる。(大佐貫)

ゴゼ 越後の中頸城郡から昭和初期までオテヒキと二人で来た。民家に泊るがその家も大体決つていて、昼間は流して一軒一軒廻つていた。宿でも唄つた。ゴゼは甘い味噌汁をもらひぐいしているので、うすい味噌汁をゴゼノシヨンベンといった。ゴゼのなかには鮫林市に住みついた人がいた。なお芸者は三味線を張り声に合せて引くが、ゴゼは毎日のことなので弦をゆるめ声を低くするので、下手な三味線をゴゼの三味線みたいだといふ。(大佐貫)

悪魔除け 横木県の佐野から來た。親方がいて一人いくらと払つていた。演ずる者は親方から面を借りて各戸を廻つてゐるのである。(大佐貫)

夜遊び 仕事が終ると、急いで夕飯を食べて、夜遊びに出かけた。明和村はハタ場だから、娘がハタを織つてゐるところへ出かけて行く。夜なべにハタを織る娘をひやかしたり、神社の境内に集まつて、力石をかかつぎ、力くらべをした。体重の倍の重さの石をかついだ。普通の者で三十貫はかついだが、三十五貫かつぐ者は力持ちであつた。一般に背高(せいいたか)のつぼより、ツングリムックリ(背の低い者)の方が力持ちであつた。今どきの若者は、背ばかり高いが、力はない。三十五貫の力石をかかつげる者はいない。(中谷)

盆踊り コウチ(耕地)毎に矢倉を組んで毎晩踊つた。島田栄吉といふ人は二十三歳で嫁さんをもらつたばかりだつたが、毎晩踊りつゝれて一週間ぐらいで病んで死んだ。このくらい熱が入つてゐた。

盆踊りの鐘はコウチ毎にあつて、コウチの集会の合図や葬式の出棺

の合図にも利用していた。(南大島上)

子どもの遊び 玩具を買うことはなかつたが自然の中に遊びがあつた。今の子はホーリーでできても遊びかたを知らない。鳴らせないそだ。昔の子は麦笛も葉っぱも、みんな子どものおもちゃだつた。川へ行けば葦の葉で筏舟をこさせて遊び、普請場から木の端を拾つて積み木にした。

道の草を両から引つぱつてしまつておいて、通る人にいたずらもした。あれもこれもなつかしい思い出になつてゐる。(大輔) 子どものころ雀とりをして遊んだ。麦ブレイ斜にして糸をつけた棒を立てておく。フルイの下にエサを置き、雀が食べにくるとカゲで見てて糸をひくとフルイが落ちて雀がとれる。(須賀) 草ばくち豆がらをくでて編み、刈つた草の中につこんでおく。それを柳の枝で捕して、ささると、刈つた草を取られてしまう。外れれば、反対に相手の刈つたのを取る。(斗合田)

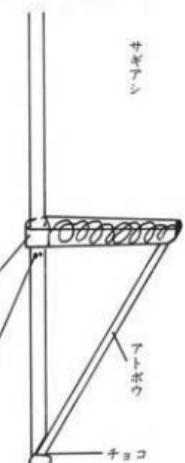
資料「念仏・和讃」(斗合田)

「地蔵菩薩諸念仏帳」「薬師如來勤行誦」

本資料は明和村斗合田の須賀孝三氏所蔵になるものである。かつてこの地方に念仏が盛んであったとき、書き留めたものであると伝えている。

筆写にあたっては次の点に留意した。①漢字は新書体に改めたが、かなづかいは原文のままとした。また漢字によつては、ふりがなが附されているが、これもそのまま筆写した。②かなづかいには、この地

サギアシ

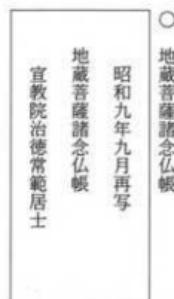


サギ足 ふつうの竹馬
タケ馬 竹の棒にまたがつて進む。後の竹の先は地面をひきする。

前面の先を馬の頭と考える。(斗合田)

竹馬。アトボウをつけ、足をのせるところは、竹を割り、火にあぶつて折り曲げ、繩をまく。片方をかつぐタメカツギ、両方の竹をすり合せるあそびなどがある。(斗合田)

表紙



「地藏菩薩諸念仏帳」の表紙
(斗合田) (金子縛一郎 撮影)



「地藏菩薩諸念仏帳」の内容の一部 (斗合田)
(金子縛一郎 撮影)

何でも比世に居る内は
人にとぎれたことをせず
年寄りどうしが集りて
樂しき念仏まふすなら
是れがこの世の極楽よ
南無阿弥陀仏

大日御庭和讚

帰命頂礼有難
大日御庭の玉椿
七色に咲く花八重に咲く
何が志願はなけれ共
余り比世がじやけんさに
是れがこの世の極楽よ
南無阿弥陀仏

念仏すすめ和讚

帰命頂礼みなさまよ
念仏きらいの人をみな
よく徳ばかりにかまけて
慈悲もなきもあらはこそ
七十まじかになりながら
今にも無情の風吹けば
まふくときいる其身ぞや

大日御庭の玉椿
七色に咲く花八重に咲く
何が志願はなけれ共
余り比世がじやけんさに
是れがこの世の極楽よ
南無阿弥陀仏

岩舟地藏和讚

帰命頂礼いわふねの
地藏菩薩のはすの池
水はなくとも舟はしる
舟はしる金ろは小金

念仏すすめ和讚

帰命頂礼みなさまよ
念仏きらいの人をみな
よく徳ばかりにかまけて
慈悲もなきもあらはこそ
七十まじかになりながら
今にも無情の風吹けば
まふくときいる其身ぞや

大日御庭の玉椿
七色に咲く花八重に咲く
何が志願はなけれ共
余り比世がじやけんさに
是れがこの世の極楽よ
南無阿弥陀仏

山は築山泉水は
ひごいまごいの放しがい
折りよく鶴が舞いをりて
水際で亀が水遊び
其外植物數しれず
さてもりつばの御星形
目出度事は限りなし

金銀帆柱押たてて
六字の名号帆にあげて

觀音菩薩はかじの役
勢至菩薩はみなわ役

地蔵菩薩はきほの役
数多の仏を皆のせて

極樂淨土へすら／＼と
極樂淨土の大門は

金錢すぐでは開かぬが
念佛修行で押しひらく

念佛修行は有難や
南無阿弥陀仏

阿弥陀仏／＼

六地蔵和讃

帰命頂礼地藏尊

六大地藏の名号は
一番地藏の其名をば

延命地藏と申すなり
利益の錦杖杖につき

星の玉をば御手にもち
無現地獄の罪人を

一人たりとも余さずには
救はせ玉ふのありがたや

南無地藏大菩薩
二番地藏の其名をば

無人の地藏と申すなり
難産地藏の利益には

無人地藏の利益には
御手をむねにあてられて

ちく生地獄の苦しみを
教はせ玉ふの有難や

南無地藏大菩薩
三番地藏の其名をば

そうきん地藏と申すなり
そうきん地藏の利益には

百八珠数を御手に持ち
天道地獄の苦しみを

救わせ玉ふの有難や
南無地藏大菩薩

四番地藏の其名をば
水力地藏と申すなり

水力地藏の利益には
施餓鬼の塔婆を御手に持ち

餓鬼道地獄の苦しみを
教はせ玉ふの有難や

南無地藏大菩薩
五番地藏の其名をば

福力地藏と申すなり
福力地藏の利益には

利益のこうろ御手に持ち
しら道地獄の苦しみを

救はせ玉ふの有難や
六番地藏の其名をば

難産地藏と申すなり
難産地藏の利益には

利益の蓮花を御手に持ち
血の池地獄の苦るしみを

救はせ玉ふの御せい願
中にも女人の罪ふかき

深き罪をばそのままに
諸産病の苦るしみを

救はせ玉ふの有難し
南無地藏大菩薩

地藏菩薩の御ん徳
名号にても唱ふべし
よきよう大師の地藏尊

南無地藏大菩薩
をんかかかびさんまえいそわか

六地蔵御詠歌

うきしづみ

ろくじをめぐる

ろくじぞう

だいひのそでの
かわくひまなし

ひきよせて
むすぶこころは

ろくじぞう
わがてにもれな
ろくどうのつし

六地藏御唱

みちのはたの

六地藏

おとないまふした

御いとくで

しじうはつせき

のがれもふして

すぐに淨土へ

なむあみだ

二十三夜和讃

帰命頂札 三夜さま

月に一度の 三夜待ち

二十五菩薩 有るなかに

とりわけ春は 四月より

十二ヶ月は 諸節なり

夏秋冬も つとむべし

二十三夜の よはの月

火水をあらため まつ人は

居まち立まち むかへまち

実に一屋の ささげ水

とりのこくや いぬのこく

いぬのこくすぎに なりぬれば

いかなる願も 成就して

まこと成仏 有難や

南無とくだい セいしさま

延命地藏和讃

帰命頂札地藏尊

釈迦のふぞくをおくねんし

悪趣に出現し玉ひて

衆生のくげんを導びけり

等覺無垢の大士たち

其数あまたしませど

大慈大悲の深きこと

地藏菩薩に若はなし

無始より我等流転して

いつか生死をはなるべし

六趣輪廻のありさまは

車の廻るが如くなり

一念まよひし始めより

無明のくらきやみに入り

長夜のねむり深ければ

ゆめのおどろくこともなし

退沒ごすいの悲みも

生老病死の苦しみも

皆是れ火宅のほのゝにて

むねをこがせる煙なり

妻子珍宝及王位

眷屬牛馬多けれど

魂中に入りぬれば

一つも従かふ者ぞなき

此の時誰をか頼むべき

其の苦を誰かわ助くべき

只だ願わくば地藏尊

まよひを導き玉ふべし

修羅眷屬まんとうじやうも

畜生じちの残害も

因果の道理定まりて

□□便りなかりけり

□□拙なき我等かな

知らずばさてもやみぬべき

己に此の理を辨まへて

後生を恐れぬはかなさよ

飢に臨みて子を食ふ

餓鬼の想ひぞ哀なる

脳を毛きて血を吸へと

心にあく事更になし

想像べし其の時の

くげんの程は如何ばかり

況や地獄の行勢は

心も語も及ばれず

無間集熱大吁喚

猶ほきくだにも恐れあり

正しく魂の獨り行

ほの一に入らん悲しさよ

娑婆にて慈悲名号を

一度唱ふる功力にて

業に引かるる魂魄は

導き玉へ地藏尊

□□のみならば彼の尊の

□□の質字の真言は

□ □ 業のるんゑんと

不生なりとぞ示しける

因業已むなしくば

苦報何處に有ぬべき

因果と共に不生なる

あじくうでんの仏なり

南方大士地藏尊

淨土生如来懐菩薩

淨菩提心如意宝珠

左の御手の宝珠には

置在高懐雨種々宝

世出世間の願を満つ

我等貧里に呻吟ひて

願はさるこそ悲しけれ

又三部の曼陀羅には

觀音じほう金剛堂

一体大悲の門にいで

輪円具足の法性塔

□ □ 無限の錫杖を

□ □ の御手に打振りて

深き眠りを驚かす

一門則ち普門にて

地蔵則ち遍照尊

因果一如の法門は

不二摩訶諦衍の仏なり

毎日晨朝入諸定度衆合離苦生

今世後生能引導

南無延命地藏尊

女人爆產心安穩

南無延命地藏尊

身根具足意自在

南無延命地藏尊

衆病悉除体堅固

南無延命地藏尊

寿命長遠願成就

南無延命地藏尊

聰明智慧持禁戒

南無延命地藏尊

財宝盈溢施貧窮

南無延命地藏尊

衆人愛敬無怖畏

南無延命地藏尊

穀米成就民安樂

南無延命地藏尊

神明加護除災心

南無延命地藏尊

證大菩提成仏道

初対面和讀

帰命頂礼 皆様よ

初の対面 場におくれ

柳樽でも あげたいが

□ □ は出合の場所なれば

鐘としよう木で 礼をする
南無阿弥陀仏 あみだぶつ

四方堅め

帰命頂礼 念仏の

四方堅めの ゆわくには

北は駆逐むに 如来様

東西南北 静まりて

東は千手 観世音

南は薬師の 十二じん

西は西方 御陀如來

北は駆逐むに 如来様

東西南北 静まりて

東は千手 観世音

南は薬師の 十二じん

西は西方 御陀如來

北は駆逐むに 如来様

東西南北 静まりて

東は千手 観世音

南は薬師の 十二じん

西は西方 御陀如來

北は駆逐むに 如来様

東西南北 静まりて

東は千手 観世音

南は薬師の 十二じん

西は西方 御陀如來

北は駆逐むに 如来様

東西南北 静まりて

東は千手 観世音

南は薬師の 十二じん

帰命頂礼 皆様よ

初の対面 場におくれ

柳樽でも あげたいが

□ □ は出合の場所なれば

南無阿弥陀仏 く

帰命頂礼花和讚

姉は小山の玉椿

妹谷間の小梅花

弟吉野の山桜

父は清水の水仙よ

母は信濃の藤の花

親子五人が花揃え

御茶御礼

帰命頂礼 拝當家に

念仏ゑこうで招かれて

花の様なる御座敷で

御茶や煙草で持てなされ

□□は新茶か宇治の茶か

□□□の御手作か

□□ことにうつくしい

種々なる御馳走にあづかりて

此のや御札は何をせん

南京焼の植木鉢

金のなる木を植込んで

大札小札のはが開き

大ばん小ばんの花が咲く

金貨と銀貨の実が成りて

悪魔さいなん更になし

御茶の御札が済んだら

我等もをいとまいたします

うちい帰りて上めや子に

話しきかせてふくませて

かげにても御礼いたします

南無阿弥陀仏

宿礼

ありがたやと立ちよれば

宿のくどくに身を安め

くださる人は観迦如来

即ち茶碗が蓮花はな

はしは光明の光りなり

御茶は新茶か小金の茶か

□□家の御手作か

□□つかれで味せず

此世で善根供徳する人は

此世後世迄日々に唱ふる

むねのれんげも開くなり

花の枯れ木杖につき

六道の辻に人ねれば

体はしゃばのどうとなる

かたみに残す戒名を

其時ぐぜいの舟に乗せ

觀音せいしはるの役

地藏菩薩はともやく

あやと錦の帆をあげて

帆じるは南無阿弥陀仏

名所なり

西へ西へとたなびかせ

西は西方弥陀如來

庭先きに五百らかんだいらかん

□□ばさついちどきに

しょうりちりきをんがく

旗天がいをさしかけて

あみだぶつの御まへに

ぐぜーの舟がつき玉ふ

是れ今日のこころさし

先祖代々菩薩の為め

しうじうじうさいこぎやくしょうめつ

自他びやうどうそくしんちょうぶつ

南無あみだ

よめ和讚

帰命頂礼花よめご

娘よめ入りするときは

たんす長持はさみ箱

きよう台針箱けしよう箱

金しや銀しやの細いと

針のじようずが手をこめて

宝来山を形どりて

つると龜との縫いもよう

仕立あげたる振りそでと

きんらんどんすの帯返も

是れ程持たせて遠るからにや

□□ちゃんならぬぞよ

□□娘のゆふことに

西がくもればかぜとやら

東がくもれば雨とやら

北がくもれば ゆきとやら
 南があいて いたとても
 千石積んだ 舟でさい
 みなと出る時 しづかても
 風のみわるけりや 帰りくる
 わたしだとも 其通り
 むこやしうとの かぜしだい
 風並わるけりや 帰りくる
 そくしん成仏
 せぬうちは
 かららすこぬとは ゆいませぬ
 南無阿弥陀仏

ふりたる宝を 倉につみ
 倉は七福 七をくら
 一には大黒 二にいびす
 ほていふくろく じろうじん
 びしゃもんてんも おはします
 辨天様の ひのはま
 ようらくさげ おわします
 五穀豊熟 國さかい
 御家も栄えて 御目出たや
 御子孫益々 御繁昌

帰命頂礼 御家の
 富貴繁昌の 御さまは
 親をうやまへ 子を思へ
 夫婦の仲も むつましく
 それが世上に ひろまりて
 七福神が 御立より
 宿る御家の しあわせと
 ときはの松の 色まして
 幾万年の 年老へて
 □□扇子の 未ひろく
 □□座敷に 御すはりて
 □□の方を ながむれば
 鶴と龜とが 楽く遊び
 其鶴龜の うたふには
 米ふれ札ふれ 小金ふれ

ふりたる宝を 倉につみ
 倉は七福 七をくら
 一には大黒 二にいびす
 ほていふくろく じろうじん
 びしゃもんてんも おはします
 辨天様の ひのはま
 ようらくさげ おわします
 五穀豊熟 國さかい
 御家も栄えて 御目出たや
 御子孫益々 御繁昌

帰命頂礼 常陸なる
 所は岩間の あたごさま
 来りて社内を 拝すれば
 □□と七九の 森ありて
 □□きよとさいづる 小鳥住む
 昼は森にて 羽根休め
 夜は御堂で 身を休め
 朝早起きて いでるには
 御詠歌にて
 しもばしらこうりのはりに
 ゆきのけた
 あめのたるきで
 つゆのふきぐさ
 これが御家の 火ぶせなり
 御あくまはらいで お目出たや

表紙

○薬師如来勸行誦

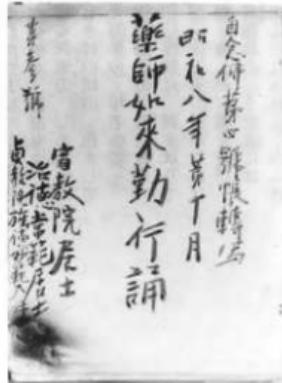
自念仏第四号帳軸写
昭和八年第十月

薬師如来勸行誦
宣教院居士
治徳常範居士
貞教院施徳妙範大姉

第五回
薬師如來勸行誦
宣教院居士
治徳常範居士
貞教院施徳妙範大姉



「薬師如來勸行誦」の内容の一部（斗合田）
(金子謙一郎撮影)



「薬師如來勤行誦」の表紙（斗合田）
(金子綽一郎撮影)

るりこう如来

これ迄は親と思ひし
この枝を

をさめたてまつる
かけまくでらす

うきよのかかみ
末のよ迄も

くもらずけり
薬師如來御真言

おんころくせんなり
まとうぎそわか

御勤

帰命頂礼 やくしさま
薬師如來と まふせしは

仏法修行の
其のために

南天竺へ のほらんと
南天竺の みちすがら

寒氣の強へ くになれば
六根しようじょう

年降りたる そのゆきが
未だ解けきらぬ そのうちに

又当年も ふりつもる
竹の林に すむとらが

食物につれて ふしみたる
良き食物と こころいて

大の眼を
いかにして

岩にて爪を ときますまし
げに紅ないの したをうち
只だ一口に ふくめんと

薬師は少しも をどうかず
汝に取らるる はがいのち

露散る程にも をもはねど
父母より伝はる をんきょうを

八十六卷 なすいだ
しばし猶余 いたせやと

せなにしょつたる 御經を

即ち法華經 卷ほどし
声い高かくと 読みあげて

即ち法華經 卷き納め
虎の頭を はたとうち

虎の頭が 八ツに裂け
□とう立つたる 血げむりの

中に御仏 あらはれて

昔が今に 至るまで

虎ふの薬師は 十二じん
南無薬師如來

三遍唱

帰命頂礼 薬師様
薬師のゆわくを 尋ねれば

小金の木だ橋 うち渡り
なないの家がきの 其なかに

七間四面の 御堂あり

出雲の国伊達内郡
小高井村伊豫山
日本一の虎目のくも
やがて晴れ行く石和田の

東のかたから 日のひかり

西のかたから さやかなり

其外十二の 諸仏さま

わにぐちちゃんと 打ちならし

奥の書院を ながむれば

十七八の おじばさつ

やさしき御手に 筆を持ち

むらさき硯に わいんづみ

月の八日や十二日 二十三日の御国社

不残御帳に とめられて

悪ま下道を ふみあらし

南無薬師如来様

三遍唱

薬師御勅行

帰命頂礼 有難や

薬師如來の 御錄記は

南天竺の 間多羅國

淨飯大王の 御子にて

釈迦無爾如來と 申せしが

悉多太子と 申すとき

仏法修行の 其のために

担特仙に 登るとき

竹の林に 差かかる

此の国余國と 事かわり

寒氣の強き 国なれば

去年降りたる 其雪が

未だ解けきらぬ 其内に

又当年も ぶりつもる

竹の林に 住む虎が

食物につつれて 伏したるに

悉多太子を見るよりも

良き食物と こころいて

岩にて爪を とぎすまし

大の眼を いかにして

実に紅の したを巻き

太子はすこしも をどうかず

汝にとらるる わが命ち

霧散る程にも いとわねど

父母より伝わる 御経を

法華経誦詠 なすあいだ

しばし猶余 いたせやと

即ち法華經 奥の巻き

声高だかに 読みあげて

其場で法華經 卷き納め

虎も成仏 いたせやと

即ち頭を はたとうち

虎の頭が ハツにさけ

ばつと立つたる 血げむりの

中に御仏 あらわれて

昔が今に 至る迄

虎の薬師は 十二神

南無薬師如來様

三遍唱

をしゃか和讀

帰命頂礼 をしゃかさま

今は無情と みいけるが

天から薬りが をりたまふ

ちよちくるいに いたるまで

なげど無情の けむとなり

二月十五が ねはんびで

花やよいでの ごくらくへ

四月八日が ごたんじよで

すぐのみどうを しつらいて

やねはうのはな こけらぶき

老若男女があつまりて

あまちやのうぶゆ かけられて

あまたせかいの てら／＼い

おしやか参りが くんじなす

南無あみだぶつ あみだぶつ

まくらのしたは じょうどなりけり

御詠歌

○○はしやかをき○ば

みだのたちすがた

まくらのしたは

じょうどなりけり

ひいてごしように なるなれば

ごしようぐるま

御所車和讀

帰命頂礼 御所車

ひいてごしように なるなれば

我れ等もひとひき

ひとひきひけば ちちのため

ふたひきひけば ははのため

みひきひくなら はがみため

ごくらくじょうどへ ひきつける

こがねのたいぼく はばかりて

いたのながきや はのひろさ

はちまんよじんへ ひろまりて

はるのひがんへ はなきて

あきのひがんへ みがなりて

そみをいちらう いただけば

せんにちせんやの しょくとなり

まんにちまんやの ごしとなる

これぞまことの くどくにて

さてもどうとや こしょうぐるま

南無あみだぶつ あみだぶつ

高祖弘法大師母御前和讃

母御をかいほう

なし給ひ

をんなつかしき

母君よ

女人禁制の 山なれば

是れより御帰り 遊ばせと

をすすめ申して ふもとなる

地蔵院にぞ をくらるる

かくて孝養 をこたらず

みろく菩薩と あがめられ

諸人の信行 いとふかし

南無大師遍照尊

くく

ゑんまままの御唱

をいんまさまの

くにはこうしう

いぬかみごうり

さわやまひこねの

ごじょうかは

をんたかさんじう

ごまんごく

かもんのかみの ごけらいで

たかまつななる ゼンのじよう

どうやくたけしま じうべいと

けんかがいこんの もととなり

あわれなるかや たかまつは

たけしまじうべの てにかかり

はかなきさいごを とげたもう

あとにのこりし むすめごは

としほじうさん なわをきぬ

ちからはさんじう ににんりき

をやのかたきが うちたきに

かんをんぼさつに せいがんし

うたせたまないと ねんじけれ

にくさもにくし たけしまよ

よもやてんには のぼるまへ

ましてならくへ しづむまい

やまはぎうばのか ようまで

うみはろかいの づづくまで

いづくのはてに ひそむとも

くさの根わけて たずねだし

めぐりをふたる そのときは

彦根ぶし

帰命頂礼

かんぜをん

ころはぶんきう

ねんかんに

くにはこうしう

いぬかみごうり

さわやまひこねの

ごじょうかは

をんたかさんじう

ごまんごく

かもんのかみの ごけらいで

たかまつななる ゼンのじよう

どうやくたけしま じうべいと

けんかがいこんの もととなり

あわれなるかや たかまつは

たけしまじうべの てにかかり

はかなきさいごを とげたもう

あとにのこりし むすめごは

としほじうさん なわをきぬ

ちからはさんじう ににんりき

をやのかたきが うちたきに

かんをんぼさつに せいがんし

うたせたまないと ねんじけれ

にくさもにくし たけしまよ

よもやてんには のぼるまへ

ましてならくへ しづむまい

やまはぎうばのか ようまで

うみはろかいの づづくまで

いづくのはてに ひそむとも

くさの根わけて たずねだし

めぐりをふたる そのときは

かたの岩に 押しあげて

折りしも血の雨 降りきたり

しんたい茲に きわまりし

時に大師は 出で迎ひ

かたの岩に 押しあげて

あぐとたぶきに てをかけて
なまくびひきぬき なきうちの
みはかにそないて ごむんを
やはかはらきで をくべきか
をと女ごころの ひとすじに
わするるいとまわ さらになし
ついにだいひの ごりやくで
めでたくほんかい とげたもう
あらありがたや かんせをん
なむあみだぶつ

あみだぶつ

西国第一番札打和讃

だい・いちば。ア・んに うつ・ふ・だ。ア・アは。
きのくにむらのオオ ふだくや
きしうつなア・みわ みくまア・ア
のオオのなア・ちのを やまにイイイ ひびきつ
みねよりをオオつる。たきつウウセの

○

帰命頂礼 観世音

一にあみだ 二におしゃか
三にあさまの こくぞさま
四には信濃の ぜんこうじ
五には奥州 湯殿山
六には日光 七つくば
八にはするがの ふじの山
九には熊野の 三社なり
十でをはたご 地蔵尊

是れをねんづる人々は
じうあく罪を のがるべし
じむあみだぶつあみだぶつ

釈迦如来誕生和讃

帰命頂礼 有りがたや
日數はみてり まやふじん
ひるのまなかに みそのふの
ばるさのとに たちませり
青葉はしげし みきなほし
時を知りけん 其の枝は
こころありげに まげくだし
ふじんのみをば をほひけり

○

なお、石の念仏・和讃集のほかに、別冊の綴りがもう一冊あった。(表紙なし。所蔵者右と同人)これには「壇坂靈現記」「武藏國小平村百觀世音」「なみこ」「南無大御經釈迦如來」の四篇が収録されていた。このうち「武藏國小平村百觀世音」の内容は、かつての浅間焼(天明三年の時のことと思われる)のとき、利根川へ流れて来た流死人の供養のために百体觀音を建立するまでのことを等が詠まれている。興味をひかれた和讃なので、つぎにその全文を紹介しておく。

武藏國小平村百觀世音

きみようちようらい こたいらの
百たいかんのん たてたるは
かんせい四年の はること
むかしささまの あれたとき
したるあまたの あわれさよ
みなとね川い ながれだし
ひこうのさいこを とげたれば
ほとけのかづにも うかばれぬ
くれのむつより あけななつ
たすけたまといと もうねんが

昭和九年五月二日 三反

自島村海太郎君送ラル

ここちにて
地にもろ／＼の 花ひらき
かたい／＼にちかき いわねより
たまのながれの きよらかに
わきてぞいづる いわしみず
ゆわみのために そないけり
かくしていたみの をぼへなく
ふじんのやすく うみませる
わこはをすがた そなわりて
三十二そうを あらはせり
なむだいしょ釈迦如來

三反

昭和九年五月二日

かのなくほとくに こいをあげ
あわいでたる いつそうわ
もうねんだけと いできたり
だいじだいひを うちまもり
なのかななよ かわせがき
もうねんのこらず じようぶつし
そのときしをにん かんじけり
あらたなるかや かんぜをん
それより百たい こころざし
しじょうをたのんで こんりうし
きんじよくにく かいをまし
はなのをいどに いたりしは
八百やちよの まちくを
しきようせっぽう とぎまはり
あまたのひとく かんじけり
こばんやこつぶを さしあげる
はなのをいとの かたわらに
しんよしわらとて なもたかき
をとにかくこいし ごちよまち
をうもんしめて ごしようにん
なかのちよなる みうらやで
さんせんよにんの じよろしゅう
ひとりものこらず よせあつめ
すまんのきよかん とげければ
かんるいながして じよろしゅわ
われわすれて いちどうに
たかをうたゆうを はじめとし
ぎんのかんざし きんかなど

わかみについたる かがみまで
われもくと さしあげる
しをにんよろこび いかばかり
きんぎんまじりの みすがたを
たちまち百たい こんりうし
むきしのくにわ なかこうり
こだいらむらいと たてまつる
しょかんのりやくが をうければ
きょうもあすもと ごさんけいが
くんじよなせし そのうちに
めいじわにちう いちねんの
さんがつけじんに やけをちて
あまたのひとく なげくわい
またもさいこん いたしたく
そむらいちどう たんこうし
をんかみさまい ねがいあげ
きんじよのむらく はじめとし
たしよのきしんも ありがたや
なむやだいひの かんぜをん
南無阿弥陀仏く く

ほとけのちかい ましまして
ちちぶばんどう さいこくも
これにてはいし たてまつる
かむやだいひの かんせをん
南無阿弥陀仏く く

帰命頂礼ごたらの

かんのんさまの をみどうは

いなかにまれなる ごこんりう

はなのをいどを よせあつめ

はるはかすみに やひあそび

なつわすずしき いとやなき

あきはもみじの ゆうひかけ

ふゆわまつかぜ おとしづか

人の一生

はじめに

子供を産む願いは、たとえ他の市町村の神仏であつても祈願をこめて授かるとする。そして人情の常とはいえ、この村の広範囲にわたる安産信仰の厚さも反映しているようである。著名な前橋市下大屋町の産泰信仰がこの地域にも分布しているが、それだけでなく各部落に各種の神仏が信仰されている。一面では江口、大佐貫には十九夜信仰、二十三夜信仰の対象物がなく、この場合大佐貫、入ヶ谷では川を渡つて館林市上三林の十九夜様に行く。そして具体的に借りてくるものもいろいろで、矢島の青龍様からはローソク、板倉町の觀音様、館林市の善長寺、大佐貫の觀音様からは腹帯、館林市上三林の十九夜様、中谷の東向觀音からは团子となっている。

神の信仰もみられる。帯は桐生市梅田町でも神様扱いされているが、一般にまたぐものではない、ふむものではないといわれる。この村でもお産の時に手伝ってくれる神様とされている。

妊婦が火事をみると赤アザ、葬式に会うと黒アザが胎児にできるので、鏡を腹に入れるとは各地でいわれていることがあるが、ここでは火事の方を向いて小便をしたらとか、葬式のときは腹を入れておいて捨てたり、入知れず落すと厄を除かれるという。また古くは普通のこととされていたことであろうが産婦の忌みは今でもかなり厳しい。特に天道さんに対して強調されている。

分娩方法についてはまだ坐産の話が聞かれた。昭和三十三年片品村でこの調査を始めて二十三年を経、産婦からその体験を聞いても、坐

産の経験者は少なくなつた。なかには母親、姑、トリアゲバアサンの世話をした坐産、産婆の世話になつての寝産と、両方を経験した人もいる時代となつていて。この場合誰しも坐産が楽であったと語つてゐる。

ウブタテメシを神様に進ぜるのは一般的であるが、県央の旧城南村ではその膳の上に男児は筆、女児は針道具を添え、西北毛の嬬恋村では男児は硯箱、女児は針箱の上にこれをとき、藪塙本町ではカマツブタにかぶせて先祖様や神棚にあげる。この村ではお釜様にあげ、同様に大勢の人たべてもらつて神と共食した。また千津井ではお七夜にカマドの前のタライで湯をつかわせてから屋敷神、便所神に詣つた。そして他の地方と同じくカマドの床でクライボシ（ヒタイボシ）をつけるが、これらは人生と善神様との信仰上の結びつきを見る例である。そしてお七夜にお詣りする便所神のお姿について、利根郡地方にみられるオーナ、セッチンビーナと同様のものが、入ヶ谷で聞かれた。また千津井、南大島の一部で、オビヤ、お宮詣りの日に井戸神、屋敷神と共にセッチン詣りをし、他の地区でお七夜を行うと同様にオカマ様にも詣つていて。このオビヤには構まいりも行うが、その日が男児二十一日、女児三十一日（入ヶ谷、南大島、斗合田、中谷）、男児三十一日、女児二十一日（千津井、矢島）、男児、女児共に二十一日（川俣、矢島、千津井、梅原、江口、大佐貫、大輪）と村によつて異なつていて。十九夜様がそうであつたし、クイゾメも川俣、千津井、江口で百日目、南大島、斗合田で百十日目となつていて。同一村内でありながら地域によって同じ習俗の有無、実施日などの相違がみられるのはなぜであろうか。

農業を生産する人々にとつては、祝儀にしろ不祝儀にしろ、多くの人に寄つてもらわねばならない行事は、秋の収穫が一通り終つてから時期が好都合である。「死なば十月かな十日」という言葉さえあり、結婚式も十一月（一月に挙げるのが多く、こうした時期以外の繁忙期に話が決まれば足入婚となつた。この「足入れ」ということはこの地域一帯に聞かれ、而も試験婚的意識をもつていた一面もある。「婚約」をクチガタメといふのは各地で聞かれることだが、千津井では祝儀当日行うというのは例の少いことといえよう。そして「結納とりひき」が終つて、女は「ヒト」になつたといはれた。

嫁入りより一足先にいるは一緒に、オトモによつて嫁入り道具は運ばれ、結婚式当日先ず婿方からイチゲンが赴くことは、本県各地にみられ、嫁入婚の一つの形と考えてよいであろうか、ここではこれを端的に「嫁入り」といつている。そして娘は自家から出るときは必ず縁側から出る。私の場合と同様である。これを婿方は村境あるいはカイドまで提灯をもつて迎え、中宿（チユウザともいふ）または祝儀の座敷で先ずオチツキボタモチが出る。入家に当つては、豆がらを燃したタイムツの迎え火をつき、箕であおぎ、杵でつき込むという習俗がこの地域一般にみられた。なお嫁入りの行列はドワロク神の前を通つてはならないとされている。この神は片目片足で加えて醜男なので嫁がもらえず嫁入行列が前を通るとやきもちをやいてその夫婦を別れさせたのだといふ。

結婚に当つてはお互に相手側の血筋、財産等が成立の尺度となるが、方位の善し悪しもやかましかつた。そして近在からのみでなく地域的にみて、利根川の対岸との婚姻も多かつたが、一部大佐貫では川向うとのものはないといふ。

一部地域では女イチゲンが往来している。これは本県全体としては点在的にみられるものである。

正月四日には嫁が里帰りする。これは嫁のご年始で県内各地でみら

れるが、矢島ではナベカリといい、東毛で聞くことである。これとは別に正月にヨメヨビの習俗がある。正月十五日の里帰りを「嫁の遊山」といつてゆつくりと実家で休んでくる。このとき大判餅と赤飯を重箱に持つて行くが、これを「親の力餅」といつて、親に力をつけるといつてゐるのは、誠にほほえましいことである。そして帰るとき「オケイハク重箱」に赤飯あるいは餅、シシなどを持つていった。

危除けは四歳から始まり、新田町の反町薬師に詣り護摩をたいてもらう。南大島では女の十四歳の厄年が聞かれたが、その他は他の地方と同様である。そしてこの村では女の三十三歳の厄年に、実家から菱模様の帯が贈られる習俗がある。最近は一般の厄年に六十歳の厄をいよいよになつた。特に栃木県佐野市の元三大師が、六十歳の人に参詣方を勧めている。

厄年には数えられていないが、東毛では秋の収穫の終つた頃に「十五の団子」という習俗があり、これが危除けとされている。五十五歳になつた者をその子供、兄弟、親戚あるいは知人が呼んで、五十五コの団子を御馳走する。従つて一人の人に対して何回も行われることになる。

なお娘の初潮に対しても赤飯をたいて祝つたといふ。古くはこれが女児の年祝いとして一般に行われていたと考へられるが、今ではほとんどみられない習俗となつた。

井戸に向つての魂呼び、神社でのお百度詣り、祐天上人の名号書を見せることなどは、何れも死に頻した人を何とか生きかえさせようとすむ家族、組中、親戚の人々の願いからの行為であるが、これも大正末期～昭和初期までのことで、こうしたなかにも人情の変化が察せられる。そして民俗の次の変化は大東亜戦のなかで起つたようである。

息を引取つたあと、死者の傍に一夜の添寝をする習俗も注目された。枕飯、枕團子、湯灌の湯は別火で用意し、使用後の始末にはしつかりと忌みが守られている。更には墓前に四十九の団子を串にさすかお盆

にのせて進ぜる習俗が東毛にみられる。旧城南村では枕團子と別に四十九の団子四十九コ、戸塚本町では飾り団子、ロッコの団子といつて七十二コ、千代田村、柏生市梅田町では枕團子七十二コと飾り團子七十二コを進ぜる。これは他の東毛独特の習俗が隣接の埼玉、栃木県の習俗のものと類型であることが多いとの同様であろう。

葬儀には多くの人の手伝いを要するが、これにドウパン、ハンドウパンとある。家の事情、葬儀の規模による。お勝手の仕事を手伝う人は働きばんといった。死亡通知に行く人は他の地方と同様に必ず二人で行く。サタ、ツゲなどの呼称が一般だが、ここではシニツカイ、ハヤツカイという。

出棺すると部屋でメケ、ザルを転がし（ザルコロガシという）念佛の人が念佛を唱える。前者はこれも東毛にみられる習俗である。

そして棺が縁側から出るとき、竹の鳥居をくぐるのも、今では遺習のようにあちこちでみられるが、斗合田では、穴回りのとき参列者も併せ鳥居をくぐる。そのとき豆木（南大島では巻きわら）を燃やしている。豆木を燃すのは嫁の入家式にもみられたことである。

隣の千代田村でもみられたが、葬列のとき辻ろう役によつて、墓地までの間辻ろうが六本角々に立てられる。死者の道案内、道しるべだといわれている。

トコホリは死者の組以外の人（大佐貫では隣組の者）、死者とは縁のうしい人が三人～四人で受持つ。これは葬式での大役なので、矢島では山の神、田島ではオニといわれた程で、他の参列者よりも厚遇された。埋葬が終つての墓つくりは、他の地方同様に家族、親戚の者が一、二握りの土をかけて、あとはトコホリがこしらえるが、この地域での新墓は別図の如く長方形に一段と高く土盛りして、四方に竹の押えと北側に竹を横に並べた階段というのを作る。この四方の竹は更に十六本の竹のメハジキをもつて押えられる。そして百かん日が終ると平にすることになっている。南大島では他の地方にみられるようなメ

ハジキを墓上に竹を折つてさすが、斗合田、梅原、千津井では、これは子供の墓にのみさすという。

葬儀の際には、先ず油揚げを買いに行つた。これは単に食事のお膳に用いるだけでなく、手伝う人や近所の子供にも一枚ずつ出した。葬式には油揚げがつきものというのであって、これは板倉町でもみられたことで、死ぬことを油揚げになつたときさえいう。葬式が終つて本来なら一七日にやることであるが、（事実戦前まではそうであつた）戦後今ではその日に七日の儀式を行ひ（ハカナオシも同様である）、親戚、組中の人に七日の膳を出した。このときも油揚げが注目される。そして前述の如く大役のトコホリは、ここでも上座に坐られた。その後もトコホリは年忌に際して特に呼ばれる。

一七日（四十九日、百かん日、一年忌）三十三年忌に生き塔婆（ワカラレトウバ）での供養は終り、死者は神様になる。お盆のときの仏の野回りは、一部西毛地方にも遺つてゐるが、今では東毛に濃く分布する習俗で、方法に地域によつて多少の相違はみられるが、この村でも各地域で聞かれ、その主旨は同様と考えられる。

墓制については、隣の板倉町は、本県でも点在する両墓制のなかで、他の地方のそれと相違はみられるものの、両墓の範囲に入る墓も東部に存在するものである。この村のものは、邑楽町、千代田村もそうであったが、一見両墓のようみられ、その要素を極めて部分的であるが残しているように考えられる。というは名称こそ聞かれないが、石塔を建てる部分と埋葬する部分が明らかに区別されている。換言するに埋葬する部分には次々と埋葬し、隣接しているが石塔は石塔で並べ建てている。土地がせまいからという説明もあるが、例えば片品村の如き山間部ではなく、このような広大な平坦地でその理由はうなづけない。今回の調査で、矢島、南大島には二つの墓をもつ家があり注目される。埋めた墓から一握りの土を持つていくこと、埋めた上は平氣で歩いて

いるように特別の配慮をしていないことなど、両墓制にみられる習俗であるが、墓参りのとき石塔にのみ詣るのが本来の型で（入ヶ谷）、両墓に詣るのは崩れた型といえよう。

新仏のできた家で十日夜に四十九の餅をつき、寺を持って行き、寺ではこれを本尊に進ぜたあと村の子供達に分け与え、またこのとき十三仏様にも十三ヶの餅を供える。これは中毛、東毛地方にみられるものであるが、十日夜のお祭りに仏教的性格が加わったもので、秋の収穫を祝い神に感謝するだけでなく、先祖への供養の一つであるとともに、共食することによって祖靈との結びつきを示す行事となっているのであるうと思われる。

最後に、おそらく他の項もそうであろうが通過儀礼においても大きな変化の節があつたようみられる。その一つが大東亜戦争で、あの物資の不足と物心共にすべてが戦争に指向された数年の間に、日本人の心の生活を大きく変えた。それが一段落したあとそれに輪をかけたようだ、高度経済成長期が、日本人の心から、信じないはともかく、伝統、信仰ひいては民俗行事を失わせてしまつて、潤いもなく常民の生活の歴史をふりかえることもなく、乾ききつた機械的な日々を送る毎日となつてしまつた。戦後三十六年、生れてからこの世を去るまでの習俗の消失も例外ではないといえよう。

（池田秀夫）

一、誕 生

(一) 妊 娠・出 産

妊娠祈願 邑楽町篠塚から観音さんを借りて来る。

石打のぶ觀音にお参りに行く。毎月十七日が縁日である。（江口）

妊娠 目に立つようになると、夫にいい、それから親にいう。（斗合）
子供ができると、いちばんはじめに亭主に知らせる。実家にはそれ

から知らせる。初めての子の時には「何か変だよ」とか言つたものである。（千津井）

ハラムといい、腹の中の児の予測は、妊娠の顔がやさしい、腹が丸い、横に出張ると女児、前方に出張ると男児だろうなどという。（斗合）

安産 妊娠したら、よく働いていればらくにお産ができると言つたもうだった。（川俣）

安産祈願 南大島の鎮守の弁天さまは、安産の神様なので、妊娠は一人で弁天さまにお参りする。南大島にはお産で死ぬ人がいないという。（南大島）

矢島の青龍様のローソクを借りてきて出産すると業にする。（田島）
長良神社と東福寺の間の觀音様の中に荒砥から受けた産泰さんの掛図がある。三月十七日が祭りで、子供を産む年令の女達が寄り、腹帯を借りてくる。ここには十九夜、二十二夜、二十三夜様はない。（大佐賀）

嫁をもらうと姑は引込んで嫁を産泰の講に入れた。嫁にきた年から仲間にに入るわけである。講中が集つてオゴリをし、代表者は下大屋の産泰神社に参詣する。そして底抜けひしゃくをあげてくる。（入ヶ谷）

長良神社境内に觀音様があり、本尊は十一面觀音。子育て、安産の觀音様で十七日が祭日。この村に嫁に来るとその晩お詣りするが、妊娠は晒布の腹帯半反（六尺）借り、腹帯の中に巻き込み安産祈願をし、安産すると倍の一返返す。周辺の村々からも受けにくる。毎月十七日この觀音堂の中で仏説が念仏を唱える。講中は七十～八十歳の婦人十四人で、毎回二人ずつ廻り番で準備などの役をする。昔は夜具をしょつてオコモリをした。（大佐賀・入ヶ谷）

大佐賀の觀音様で安産を願つてお札を受けてくる。また大佐賀には産泰様の講があつたが、川俣にはそういうのは無かつた。（川俣）

中谷の東向き觀音に安産祈願し、村の人の供えたダンゴを二、三コ

もらつてきて帰り、とつておいて障病が始まると焼いてたべると安産する。(斗合田)

館林市上三林の十九夜様は、一月七日の十九日が祭日。妊娠していなくともお詣りした。念仏をあげている老婆が団子をくれた。妊婦は晒布を借りて腹に巻くと安産するという。安産したら二倍にして(借りてきたのと新しいの)返す。(入ヶ谷)

お産の時、手つだつてくれるから、近いところの十九夜様にお参りする。元は三月十九日だったが、今は三月の都合のいい日曜日に、すしなどとつてあげる。(斗合田)

江口には十九夜、二十三夜のまつりはない。(江口)

栗島様は女の神様で安産ができるようにおがんだ。おびや(産あけ)に赤ん坊にいい着ものを着せて連れてつて、おさい錢を上げてお宮詣りをしてきた。(川俣)

安産の神様である、塩釜様のゴフを貰つてきて水でぬらしてのまされた。(大輪)

蕃神様 お産の時に、手つだつてくれるから、子どもが腹にある時は、帯をまたぐもんじゃない。(斗合田)

難産 難産の時には、三島サマに百度まいりをした。また、井戸のつるの青い苔をとつて飲ませると早く産まれる。枕を尻の下に入れておくと早く産まれた。昔はすぐつて出産した。(千津井)

腹帯 五ヶ月目の戌の日に、岩田の觀音様から半分借りて来る。これでは足りないので、つぎ足して巻く。返す時には、一反返す。(斗合田) 館林城沼の善長寺で安産の腹帯を借りて来るとき、寺の方で適当に出して赤の腹帯は女の子、黒は男の子といわれている。無事生まれると一幡にして返した。(千津井・田島・梅原)

妊娠五ヵ月目の戌の日に腹帯をする。今は病院ですが、昔は自分の家でした。

腹帯は、妊婦の親元からよこすか、あるいは板倉町の岩田の觀音さまから借りてくる。觀音さまから借りた場合は、子どもが生まれると倍にして返す。(南大島)

五ヶ月のイヌの日にしめた。(川俣)

妊娠五ヶ月目のイヌの日に腹帯をする。産婆さんのところへ行くので、嫁家で買つてくれる。(江口)

むかしの人は、旦那のしめていたふんどしを、腹帯にすると、安産できるといった。(矢島)

呪い 蛇のぬけがらを孕女が腹に巻いていると安産魔除けになると云う。青大将は弁天様の使いといつてある。

孕女は腹帯の間に入れて巻くとよいという。(南大島下)

女性の禁忌 女はホウキをまたぐな。

便所のそゝじをよくすると産が軽い。(江口)

しも(女の人の下べきなど)のものを干す時は洗濯ものの間に入れて、人に見せないよう干す。(花輪)

いい子をうむ為に、産しは便所掃除をよくしろ、キリヨウのいい子がうまれるといった。(川俣)

妊娠の禁忌 妊婦が火事を見ると、赤あざの子ができる。また夫がトコホリ(墓穴掘り)にあたった場合、他の人にかわってもらう。(南大島)

重たいものを持ち上げたり、高い所のものを取るものでない。また火事をみると赤いアザの児、死人をみると黒いアザの児が生れるといい、腹帯に鏡を入れておけばそれが避けられるという。(入ヶ谷)

妊娠している時、火事の方を向いて小便すると、あざのある子ができきる。火事があると、あつち向いて、しなければいいなど、実家の親が心配した。(斗合田)

妊娠中に火事を見ながら小便をするとアザのある子が生まれると云つた。また、葬式の時には産婦はニッカンはしない。鏡を腹に入れ

ておいて捨ててきた。(千津井)

子どもがおなかにある時、葬式があると、ふところに鏡を入れて行き、人に知れないように落すと、危険になる。(斗合田)
産は死びとにさわつちやいけない。さわる時はふところ鏡を持つてろ、といわれた。いつも持たないが(身近な人が死んだ時など)帯の間に入れておく。そうしないと赤ん坊に青アザができるから。また火事を見ると赤ん坊に赤アザができるので鏡を持つていろといわれた。(川俣)

(二十一日間は髪に櫛を入れてはいけない。頭がいたくなるから。からだがけがれるので、天道さまにあたると、天道さまがバチをあてるというので、外便所に行くにも菅笠をかぶつて行った。産婦の履物も天道さまにあてはいけないので、かけ干しにした。)(中谷)

女の忌み屋 むかしは、女が月のものがあると、ナンドに入り、そこへ食事を運ばせて食べた。家族と食事を共にすることを忌んだ。(梅原)

産の場所 お産はほとんど婚家で生む。実家へ帰って生むのは最近のことである。(江口)
はじめての出産は婚家で生んだ。産室は嫁の寝ている部屋であることが多い。(千津井)

産の部屋 北側の一一番奥の部屋で、六畳の寝室が産部屋になつた。

(江口)

自分の寝床で、特にきまつていない。(斗合田)

出産と夫 出産の時は、夫はあまり遠くには出かけずに、近所に行つてたりする。初子の出産時に夫が立ち合えば、次の子の時も立ち合ひものだという。(千津井)
お産のときは夫は仕事をしている。留守の方がいいといわれ、家にいると外に出ていろいろといわれる。(江口)
昔はみな親と同居だから夫はかまわない。産婆さんでも呼びに行く

くらい。親まかせだつた。(川俣)

分娩 腹が痛くなつた時はじつとして居られなくて往還(道)に出たり家へ入つたりした。總領の時は一日一晩病んだ。しうと(素人)のおばあさんを頼んできてもらつた。

フトンを畳んで積んでよりかかり、取あげばあさんの手を握つてうんだ。(川俣)

妊娠は陣痛があるまで働いた。嫁ぎ先のナンドで出産した。以前は坐産があり、五十年前までやつていた家があつた。坐産は布団を前に積みあげて、それに寄りかかるて産んだ。(南大島)

アンコによりかかるてつぐんで生んだ。(話者四人中二人)

仰向きになつて生んだ。(話者四人中一人)

力綱はなかつた。(江口)

産婆をたんのんで寝て生んだ。そしてお七夜までお湯に入れもらつた。この頃実家の母親が帰る。母親はわらにおつかかって生む坐産だつたという。わらを十二束丸めてフトンをかけ、毎日一束ず取つていく。頭を下げるとき血が上るといつた。(入ヶ谷)

寝所で坐つて生んだので、足をくずすとやかましく注意された。子取りばあさんや器用な人が取り上げてくれた。最初は寝所で産湯をつかない、お七夜に外へ連れ出して、土間にたらいを置いて産湯をつかわせるようになる。産婦の傍に二十一把の麦わら束を置いてよりかかり、一日一束ず取つて二十一日間はりつぱに坐つたまま過ごす。(千津井)

お産をしたあと、産婦は薬束を二十一本つみ上げて、これによりかかって寝て、毎日一束ず取り除き、二十一日たつと平らになつて、布団の上に身を横たえて、おお向きに寝ることができる。産後ワラクビリによりかかって寝るのは、子宮がよくおさまるようにするためだという。(中谷)

おお向きに寝て手ぬぐいの両端を両手で持つて引張つて力を入れて

お産をした。(川俣)

長く寝てお産をした。うしろの頭の下で両の指を組んで力を入れた。

(川俣)

昔の人は「天井からナワを下げて、それにつかまつてうんだ」と姑から聞いた。(川俣)

お産する時産びとは麻糸で髪をしばつた。お産が始まると「麻を買つてこう」などといって家族が麻を多目に買ってくる。ヘソノをしばるのに使うほか麻で髪をしばつた。

お産の時は血が騒ぐから落付くように、頭が痛くならないようこうしてしばる。(大輪)

ふだん寝ている中の間でお産をした。脛はそのまで上げない。油紙(ミノゴザにつけるカッパ紙)を買ってふとんの上に敷いて、洗つておいたボロを敷いてお産をした。汚れものとボロは油紙に包んで捨てた。(川俣)

姑の頃は取り上げばあさんが取上げたそうだ。一人で産んで一人で取上げたこともあつた。産婆さんが間に合わない時に自分で取上げた。

産室はふとんの「ねどこころ」でお産をした。脣を上げてお産した話は聞かない。フトンを汚さないよう、油紙を數き、古い腰巻きなどのボロを敷いてお産をした。お産が近づくと油紙とボロをまとめて置いた。(大輪)

産後は一週間ねかせてもらった。(川俣)

トリアゲ婆さん 出産の時には、トリアゲ婆さんが赤ん坊をとりあげてくれた。それ以前は姑がとりあげてくれた。(千津井)
六、七十年前までは、トリアゲバーサンといつて姑や近所の人で器用な人に取りあげてもらつた。その後、免許をもつたお産婆さんに頼むようになった。(南大島)

昔は無免許の近所のおばあさんがやつてくれた。(江口)
この辺の人はサカエさんを頼んだ。免許をもつた産婆さんだった。

(川俣)

お七夜までいくらときまつていて、きちんとお礼をし、あとまでの

縁は切れてしまう。(斗合田)

産湯 井戸水を沸して使い、すむと、方角を見て北側の穴を掘つて棄てた。(千津井)

産湯に使つた湯は、先達にみてもらい、屋敷内の方角のいい方に穴を掘つてそこに捨てた。おむつなどを洗濯した水もそこへ捨てた。(南大島)

方をみて産婆が教えてくれたところに穴を掘つておいてそこへ捨てる。産湯は捨てるもむしるをかけておいた。(江口)
うぶ湯は取り上げてくれた人がつかわせてくれた。使つた湯は明かりの方に穴を掘つて埋めた。

うぶ湯につからせると産着をさせた。(千津井)

ノチザン 胚衣をノチザンという。以前は七軒コウチの裏に捨て場という所があり、そこで旦那がノチザンを焼いた。家によつては自分の家の墓地に埋めた。(南大島)

墓場に埋めた。踏む方がいいとはいわない。(千津井)

後産は神主さんに方角のいい方を見てもらつてその方の土を掘つて埋めた。後産を二の産ともいつた。(大輪)

初湯もともに各家でアキの方に埋めた。(入ヶ谷)

エナは大昔は、人の歩く所に埋められた。トブグチの外側に深く穴を掘つて埋めたこともある。埋めたところを初めて踏んだ人を赤ん坊が恐がるという。

大正時代にはエナは墓場に焼場というのがあつて、そこに捨てた。(千津井)

ノチノモノは火葬場で焼く。(江口)

もとは、うちでお産をした。のちざんは方角をみて、屋敷内でいい

方角のところに埋めた。

うますんばに埋めた家もある。燃料をもつていいて、燃してきたりした。(矢島)

血のついおりものがある間は洗濯した污水は方角のいい方の山などに穴をほつてうめた。(大輔)

へソの緒 へソノ緒は男女ともハサミで切る。(川俣)

はさみで切る。もげたへソノオは屋敷稻荷様のうしろの土を掘つてうめた。(大輔)

へソの緒は多くの人にまたがれるといつて、トボグチに埋めた。(入ヶ谷)

へソノオは、とぼ口の下に埋めておけといった。とぼ口の敷居は、そのうちの主人よりえらいといふ。おとつあんのおしがきかないから、へソノオはとぼ口の下に埋めておけといった。そうすると、子どもがいうことをきくようになるという。(大佐貴)

ウブギ 誕生から、二十一日までにおくられた。これは、紋付のい着物で、あかんぼうは、これを着て、お宮まいりをした。(矢島)

実家で作ってくれた。肌着は親が自分で作つた。(入ヶ谷)赤子のきものはあまり用意しておかないと云つた。だが赤い地に白の麻の葉、青地に白の麻の葉の縫入れのきものを二枚縫つておいた。男女どちらがうまれてもいいように。麻のように丈夫に育つようといつた。(川俣)

妊娠九ヵ月頃、妊娠の実家から鯉が届けられる。(南大島)

おしめ ゆかたの古やふとんの古いものをおしめに縫つた。昔のおしめは現代のように輪つかじやなく、竿に通せないから広げて干していた。(川俣)

おしめの形のようにして中へ綿を入れてしみ出さないように自分で縫つたおしめカバーを作つて使つた。(川俣)

(二) 生児儀礼

乳づけ 赤ん坊に初めて乳をくれるときは、ホウズキの根を煎じてクチヅケにくれるといふ。産婆さんが教えてくれた。本当の産婆は砂糖水をくれる。便を下すためのもので、カナバはたんと出る方がよいといった。(江口)

ウブタテメシ 子どもが生まれるとすぐに米をたいて祝つた。一生いろいろにと、一升の米をたいた。これを、おかさまにあげるとして、かまつぶたをさかさにして、「ご飯をその上にじかにもつて、かまび(へつつ)」のところにあげた。

そこに居あわせた人に食べてもらつた。たくさんの人間に食べてもらつたほうが、運がいいといった。産婦にもくれた。(矢島)

お産がすむとすぐたいて嫁の母や近所の人達大せいに食べてもらう。一生食えるよう、と一升のごはんをたいた。(川俣・江口・南大島・新里)

子供が無事に生まれると、ご飯をたいた。これをおかさまにあげ、産婆さんとか、そこに居あわせた人に食べてもらつた。(入ヶ谷)

チカラ鯉 嫁いだ娘が妊娠して産み月になると、実家からチカラ鯉と云つて鯉を二ひき届ける。鯉のよう威勢よくはね出るようになりうことで、このときか、または生まれてからカツラ節とカンビヨウをつけて米を一年ぐらい持つて行く。遠慮なく食べろということである。(千津井)

妊娠九ヵ月頃、妊娠の実家から鯉が届けられる。(南大島)

お産見舞 お産見舞には、近所の人などは布を一丈もつてきてくれた。これでひとつみの着物がつくられた。近い親戚からは、いい反物(一反)がおくられた。嫁の里からは、さらしのじゅばん、おむつ、ふだんぎ、子守の帯、ねんねこ、おかげ、ぼうしなどが贈られる。むかしは、近い親戚などから、七夜までに、麻の葉の着物がおくられた。これは子供が丈夫に育つようといふことであった。

お産をした家に近所や親戚からお産見舞が届けられた。お金や着物

であった。(千津井)

お産の知らせがあると、オジ、オバや組合の人たち、結婚式のとき招された人たちが来てくれるが、招んでおいた人でもお産見舞に来ない人もいる。(江口)
品物で見舞をした。きもののきれを一丈贈った。これで子どものきものが一枚できる。(川俣)

産見舞のお返し 赤飯にイカをつけて返した。親せきとか組合うちに返す。今は金で品物を買って返す。(川俣)

チカラゴメ 赤ん坊が産まるとすぐに実家からチカラゴメが多くなる。そして産婦は二十一日間は、米、カンピョウ、カツオブシで食事をした。(千津井)

お産をすると実家からチカラゴメ一斗(音は五升)、力鯉が贈られる。チカラゴメをお粥にしてたべるが、副食はカンピョウと鰹節だけ。梅干しさえたべらなかつた。(入ヶ谷)

子どもがうまれるとすぐに、嫁の里から、米が一斗くらいと、かつぶし、かんびょうがおくられた。これは、さんびとにおかゆにしてくれた。この米のことを、力米といった。(矢島)

産婦の食事 おかげで、おかずはカツブシミソとか、カンピョウの煮たもので、油ものは食べさせなかつた。これは実家から届けられたものなどである。(アタの例では出産後栄養のあるものをくれると乳が出ない。ブタの尻が三角になるようでないと乳が出ず、太っているブタでは乳が出ないことが多い。)(江口)

お産をしたあとは、カンビヨウ汁で、カツオブシ味噌で食べた。一週間はお粥を食べた。それ以外のものを食べると乳が出なくなるといつた。(千津井・川俣)
かつおぶしを味噌の中に入れて、それをおかずにお粥を一週間食べていた。お汁のみはかんびょうで、それよりほかは食べさせられなかつた。今は何でも食べるから乳が出ない。前は乳が出すぎるるので、スイ

フクベというのを使って、乳をしぼつた。(斗合田)

産婦に許された食事は、お粥とカツブシとカンビヨウ入りの味噌汁だけである。ミョウガを食べると、バカツ子ができる。唐辛子を食べると、子供の眼が悪くなる。酢のものを食べると、乳が出なくなる。甘いものを食べると乳の出がわるくなる。ザツコ(鮓)を食べてはいけない。二十一日のオビヤが過ぎれば、何を食べてもよい。(梅原)

魚(特にサケ)イカは血を荒す。魚は産婦でなくともモノ日にしか食べなかつた。昔のことを言うのはずらしいようだ。だから魚が「さんしの腹に入つてみてえ」という笑い話がある。(川俣)

妊娠中はイカを食べる悪い。油っこいものはよくないといわれた。強いものを食べると子供がおりてしまうといった。(千津井)

里芋はいけない。乳が荒れる。鰐を食べると血が荒れてくだりものがする。いかは身持になると生れるまで食べではない。豚肉は四つ足の子が生れるから食べてはならない。ナスはナス(子宮)が下るからだめ。ナス汁などさせない。(大輪)

オヒヂヤ 産後七日目をオヒヂヤと言いい、赤飯を炊き、産婆さんに食べてもらった。この日まで産婆さんに産湯をつかわせにきてもらつた。(南大島)

このときは、親類縁者にスルメ一枚と赤飯をくばつた。嫁の里へは、スルメを一把くらいやつた。(矢島)

赤ん坊が生まれて七日目に、先ず福荷さま、次に荒神さま、次にかまど神さまにおまいりして、かまどのススをとつて、赤ん坊の額につける。クライボシという。次に井戸神さま、便所神さまの順におまいりする。オサゴ(洗米)にお金を入れて紙に包み、オガラの箸に麻でしばつて、これを便所の天井にさしておく。(中谷)

家の屋敷福荷様と便所におさごを上げておがむ。(川俣)

名前をつける日で、名前を紙に書いてはり出す。この日、お産見舞いをいたいたい家や実家へは赤飯を重箱に入れて届ける。そのときは

カを一枚くらい持つて行った。いまは女子二十一日、男子の子

三十一日に配るようになっている。

お七夜の朝、実家から産着が届き、お湯をあびせたあとに着せて、おばあさんが抱いて近所隣りのお便所にお参りに行く。(江口)

お七夜に名を付けた。昔はおじいさんの名をもらったこともあった。松竹梅の名をつけると縁起が良いという。三人の子に松竹梅とつけると勝ち負けができる。

女の子ばかり生まれてしまい、どうしても男の子が欲しいという時には女の子に男の子のような名をつけると男の子が生まれるという。一郎、二郎、三郎などと符牒のようつけることもあります。(千津井)昔は七夜に名を付けた。あらかじめ良い名を三つくらい選んでおいて半紙に書いてこよにしておく。それを大神宮様にあげて、小さな子に引かせた。(千津井)

名前は実家の者が出し合って話し合い、三つだけ選ぶ。それを小さく切った半紙に一枚に一つずつ書き、一升桶に入れて大神宮さまにあげる。しばらくしてから降ろし、幣束でかきまわし、一つだけくつついてきた紙の名前をつけた。昭和の初めころまでこうして名前をつけた。(南大島・七軒)

セツチンマイリ・オヘヤマイリといつて七日目の朝、自分の家の便所にお参りする。親元から米、かつぶし、かんびょうを寄こす。祝いの時歌う伊勢音頭に、「おばばどこ行く、孫抱きに、背中にしょふたはありや何だ、お米にかんびょうにかつおぶし」とある。(斗合田)
七夜には自分の家の便所におまいりした。ダイドコロのカマドの前にタライを置いて湯をつからせて座着をさせた。座着は、それから屋敷箱舟をまわって、便所にオサゴをあげた。ヒタエボシといつて額に二ヶ所墨をつけた。(千津井)

お産の時に髪の毛をしばった麻糸でお金とオサゴをオヒネリにして、便所をゆわえた。これは便所におさめた。七夜からはダイドコロで湯をつ

かわせた。(千津井)

外の便所と屋敷鎮守様とをおがんだ。この時は穂モロコシの茎で作つた一膳のハシ(おさばし)位に長いはし。姑はせつちん参りのハシは長い方がいいと言つた)と、おさごを込んだ紙包みを、お産の時に髪をしばつた麻でぐるぐる巻いて、下の便所の天井にさした。

髪をしばる麻はたくさん使つて髪をしばつて、タンスの引き出しにしまつておいた。コーデの時にこの麻で障子の棧から手を出して子どもに痛い所をしばつてもらう。この麻はもらいにくる人もいた。昭和十五年のお産の時はまだこうしたことを行つた。その後友達が資格を持った産婆さんになって、その人に世話になつたからしなくなつた。(大輪)

オヘヤマイリといつて七日目に便所の神にお詣りする。便所の神はトウモロコシの皮で作った人形で、麻でしばつてひさしにさした。オサゴと經節を紙で包み進せる。また金銭一~二錢も進ぜた。そしてオサゴをたべさせる真似をするが、その金銭の代りとしてマメガラを二本麻で結ぶ。これは便所の天井にさした。この麻はお産をすると産婦が髪を結えたもので、それをお七夜に取つたものである。子供のない人はこのオサゴをさげて煮てたべると生れるという。なおこの日屋敷の稻荷様、井戸神様、荒神様にも詣るが、荒神様にお詣りするときカマドで額にクライボシをつける。(入ヶ谷)

オヘヤマイリといつて七夜のときには、便所まいりをする。このときモロコシの箸をつくつて、かつぶしをけづつて、米(オサゴ)と一緒におひわりにして、箸とおひわりを、便所にさしてきた。これは子どもが、便所だけがをしないようにといつてある。(大佐貫)

所の屋根裏にはさんできた。(矢島)

オヒチャヤギモンを生後七日、外に出るとき着る。男児は小さい筒袖、女児は元禄袖。(入ヶ谷)

セツチン参りとして産後二十一日から三十日に、その子をおばあさんが抱いて便所・屋敷稻荷・井戸神を回る。お産した家のオカマ様の炭を生まれた子の額に塗って、自分の家のオカマ様とセツチンを回るが、炭を塗るのはお参りした印である。オボヤキとはいえない。(千津井)

オボケ お七夜に剃った髪の毛を、父親がはく下駄の上におき、足でふみつけてもらう。親の言うことをよく聞くようにとのおまじないである。(中谷)

生後二十一日めごろウブ毛をそる。その時、縁側で父親の駒下駄の上にせつけるを置いて、頭を洗いながらそつた。親の前で感ばれないよう、踏みつけてもらうためだとい。(千津井)

赤ん坊の頭は二十一日間はすらない。(川俣)
ヒアゲに塵毛をそつた。オチヨツボといつて、盆の窪のところの毛は少し残しておいた。子供が倒れた時に神様がひつぱつてくれるとい。(千津井)

オミヤマイリ 男は生後二十一日目、女は三十一日目にお祝いをする。長男、長女は特に盛大にする。母親の両親・兄弟 オナコウドママ、本家・分家、近いシンセキを招く。

この日、オミヤマイリをする。本家(本家の場合は分家)の主婦か、いない場合は赤ん坊の母親の祖母、それもいなければ父親方の祖母が赤ん坊を抱き、まず屋敷稻荷へお参りする。その時、米とお金(十円)を半紙に包んであげる。次に便所に行き、箸一本に半紙で包んだオサゴを麻紐で結んだものを便所の中のどこかへ刺しこんでくる。そのあとイロリ(カマド)へ行って、額のまん中に炭をつける。それから外に行き、鎮守の弁天さまにお参りする。七軒コウチはコウチの稻荷、八軒コウチの稻荷と天神さまにお参りする。次に橋で難にあわないよ

うに、近くの橋のたもとにオサゴを供える。これを橋参りといい、これがすむまで橋を渡つてはいけない。

お参りが一通り終わると、産湯をつかわせ母親の実家から贈られた産着を着せて、集まつた人に披露する。(南大島)

オビヤは男児二十一日目、女児は三十一日目。この日にオミヤマイリをするが、橋の渡り初めなのでハシマイリともい。(入ヶ谷)
メリソスの重ね着もの(一枚合せて着せる)を着せてお宮詣りをした。(川俣)

オビヤは男女とも二十一日目にしたこともある。ふつうは、男は三十一日目、女は二十一日目。

あかんぼうには、嫁の里から贈られたウブギ(もんつまなど)をひかけたこの日はうちのものがつれて橋まいりをしてからお宮まいりをした。

おさごとお金をおひねりにしてもつていて、橋のはじなどにあげて、橋を渡つた。それまでは、あかんぼうが橋を渡つてはいけないといつた。この日が、あかんぼうの橋の渡りぞめであつた。なお、この日はうちの井戸神様へもおまいりをした。子どもを抱いて井戸に顔をみせた。(矢島)

オビヤはお産をして二十一日目。この日にはじめて橋を渡る。それまで渡つてはいけないとされた。オサゴ(洗米)を持って、橋神さまにおまいりする。(梅原)

ヒアゲは男三十一日、女は二十一日であった。ヒアゲには、鎮守様に姑と娘の親が赤ん坊を連れていた。赤飯とオサゴをあげた。このヒアゲの時に橋まいりもした。橋まいりといふのはこの時、はじめて橋を三つ渡ることであつた。それまでは橋を渡つてはいけないといつた。(千津井)

産婦は二十一日間床を離れるなどいわれたが、一週間もたつと縫い物くらい始めた。一週間は実家の親が手伝いに来てくれた。(江口)

産後二十一日目をトコアゲといった。ヒアゲともいった。(千津井)

うぶあきの二十一日目に栗島様と橋をおがむ。栗島様には赤飯をふかして持つてって上げておがむ。子どもに分けてやる。橋を渡つておさこを上げておがんでくる。(川俣)

橋参り 男は二十一日目、女は三十一日目に、うちの近くの石橋を渡る。始めて渡るので、怪我のないようにという。本家役のものが抱いて行く。(斗合田)

生後二十一日間は橋を渡らないといわれ、この日、近くの橋へオサゴをもつてお参りに行く。このあと鎮守さまへお参りに行く。(江口)

男は二十一日目、女は三十一日目のオビヤの日に、赤ん坊を抱いて橋まいりをする。それまで産婦は、橋を渡ることを禁じられた。(中谷) 子どもがうまれて、二十一日たつまでは、橋を渡つてはわるいといつた。

二十一日目に、あかんぼうをつれて、橋まいりと、お宮まいりをする。(大佐貫)

三島様へ生児をおばあさんが抱いてお宮参りに行った帰りに、橋参りをして、おサゴ(米)をオヒネリにして上げる。橋神は別にいないが、三つ四つ回る。橋参りをしないうちは外へ連れ出さない。(千津井)

セッチン参り(お七夜ころ)とは別に、生後二十一日めにお宮参りに行つた帰りに、橋参りをしてくる。どこの橋でもいいが、しないうちは橋が渡れないという。(大輪)

娘の遊山 オビヤの日、お宮まいりをしてから娘は子どもをつれて、里へ体をやすませに行つた。三日とか、一週間とか里へ泊つてきた(一週間の場合には、八日目に帰つてきた)。初子の場合には、とつぎ先の母親が娘をおくつていった。帰りには里の母親がおくつてきた。このようにお嫁が里へお客様に行くことを娘の遊山といつた。(矢島)

神参り 産婦は、血ぼけ(血ぶく)で、一週間くらい神様に手をあ

わせない。三十一日神参りをしない。(斗合田)

くいぞめ 百日目のくいぞめは赤飯をたく。茶わん二つとはしを買つてお膳につける。茶わんに赤飯を盛つて食べさせる。ミソづけをつける。ミソづけにならないように。川から四、五センチの丸い、すべっこい石を拾つてきて洗つて膳につける。石のように固い歯が生えるようにと言つた。(川俣)

生後百日目に、実家の親元から膳椀をそろえてくれる。お膳の蓋に椀・箸を揃えて、ご飯に石のおかずを添えて、大神宮様へ供える。石は川の小石を拾つて来て膳に載せるが、歯が丈夫になるようにという。(千津井)

生後百日目にする。実家からお食い初めのための茶わんと箸を届ける。このお茶わんを使って何が食べさせる。(江口)

生後百日目に行う。家にある膳にお汁ご飯をのせ、利根川の河原や近所で拾つてきた形のいい小石をのせた皿をそえる。床の間の前に母親が赤ん坊を抱いて東向きに坐り、ご飯を食べさせる真似をして、小石をなめさせる。小石は「歯が丈夫になるよう」という意味である。(南大島)

百十日のわけだが、幾日かのばす。お膳を作り、歯が丈夫になるよう、石ころと一緒におく。コップ・皿・箸・茶碗など今はセツトになつて瀬戸物屋にある。昔は皆買ひそろえた。(斗合田)

初正月 以前は掛け軸をシンセキ中とクミアイからもらい、それを奥の間(テエ)、それで間に合わなかつたらザシキのぐるりに掛けた。掛け軸には男なら武将の絵、女なら女の絵が書いてあつた。

現在は男児は破魔矢、女児は羽子板を幕に母親の実家からもらい、

正月に飾る。（南大島）

子どもの初正月には、昔はユミハマとか、掛軸になつてゐる絵を贈つた。現在は男の子には弓矢、女の子には羽子板を贈る。（江口）

鬼つ子 十月十日で歯が一本だけ生えてくると鬼つ子といつて三本辻にサンダワラにのせて捨てた。トウバツコともいつた。近所のおばさんが拾つてくれた。（千津井）

赤ん坊の歯が十月十日で生えてくるとトウバといつて捨て子した。三本辻にサンダワラの上にのせて捨てた。近所の人間に拾つてもらつた。（田島）

とつきとうばといつて、歯が十月に生えるのはよくないとして鎮守様にお詣りする。（斗合田）

初節供 男児は鯉幟、女児はお雛さまを母親の実家、オジ・オバ、濃いシンセキ、本家・分家からもららう。また、クミアイから穢代をもらう。（南大島）

男はのぼり、女はひな様を親元からおくつた。五月は柏餅、三月は赤飯か草餅を親戚に配つた。（斗合田）

女の子はおひな様を、男の子は鯉のぼりを贈る。ダイバ（町）と違つてこういう田舎はそう丁寧にはしない。女の子の節供は三月三日。男の子は五月五日（川俣）

初誕生 誕生もちをつき、一升もちを子どもに背負わせる。背負わせる役はおばあさんの役で、実家の親元や親せきにもちを配る。もちらつた家ではお返しには昔はマメを入れて返したが、近年はお金を包んでくれる。（江口）

紅白の誕生餅をついて親戚に配つた。また一升餅を風呂敷に入れて座敷の上で赤児に背負わせる。現今と違つて歩ける児はほとんどなかつた。オムツが今と違い、従つていつまでも歩けなかつた。（入ヶ谷）

初誕生には、一升餅を背負わせる家もあつた。

そして、早く歩ける子は転がせたりした。

お産見舞いをもつた家に紅白のトリコモチを配つた。返礼に梅干しや豆をくれた。梅干しは年をとるまで丈夫なよう、豆に育つように、という意味であつた。（千津井）

生後一年の誕生日には餅をついて、風呂敷に包んで子供にしょわせる。座敷で立たせるが、箕の中には立たせない。（須賀）

生後一年の誕生日には紅白の餅をついて、生児にしょわせ歩かせた。（千津井）

餅を親戚や近所に配つた。（千津井）

誕生のお祝いはモチをつき、一升もちを作つて、ふろ敷に包んで歩わせる無理だ。親せきや近い人にモチを配る。お返しにおべた（データ）

赤児の一年目の誕生日にモチをつく。一升のモチを丸く正月のお供えのモチのようにして、風呂敷に包んで子にしょわせる。（大輪）

初誕生日に餅をついて、しょわせる。今の子は歩くが、昔は歩く子は少なかつた。（斗合田）

誕生もちは、うちうちだけの祝いである。一升もちをつくつて、風呂敷に包んで、子どもに背負わせた。わせの子どもでないしょえなかつた。おもてざしきでしょわせてみた。

紅白のもちを一かさねずつ、嫁の里、親戚の家、本家、懇意な家など、産見舞をもらったところへくばつた。（矢島）

誕生日のおかえし 祝いをくばつたときには、片祝いしないといつて、かららずおかえしをした。

誕生日のときには、ふつうははきものを贈つてくれた。遠い親戚の場合には、「革覆代」としてお金をよこした。（矢島）

初山着 館林市小桑原の富士嶽神社へおまいりするときには、嫁の里の親が初山着をつくつてくれた。子供はこれを着て初山まいりをした。この着物をつくつてくれた。

ときのおかえしとしては初山で買ってきたうちわを一本くばる。(矢島)

(三) 育児

香電坊主

頭をグリグリ坊主に剃つて、太田の子育呑竜の大祭(八月八日)に、父母と五里の道を歩いて行つた。三歳で呑竜様に申し上げて(弟子になる意)丈夫になるようにお願いする。年齢はその子供によつて異なる。五歳で行つてくると毛髪を伸すことができた。女兒でも五歳までカミソリで剃つて坊主でいた。呑竜様からは弟子にしたという証が送られてきたものである。(入ヶ谷)

子供が生れると、太田の呑竜さまへおまいりして、丈夫に育つようモウシアゲル(願をかける)。七歳までは坊主刈りにしていた。(中谷・梅原)

昔は弱い子の時、七つまで頭は伸ばしませんと呑竜様に願をかけた。頭から息が抜けるように、女の子でも頭の頂上を丸くそつて置いた。これを中ぞりといふ。(斗合田)

天神やっこ 呑竜坊主と同様に天神様に申し上げた兒を天神やっこといつた。左右のコビンを残してあとは剃る。こうした子が背負われて、一月二十五日を主として天神様にお詣りしたものである。(入ヶ谷) 子供のからだが弱いと、天神さまにモウシアゲ(願をかけ)て、もみあげだけを残してあとはツルツル坊主にしておいた。これ天神奴といい、七歳まで坊主刈りにした。(中谷)

発育の悪いヤッコは下げる。この好みの毛を残してあとは剃つてしまつて丈夫に育つといい、子どものころ見たことがある。(江口) 名替え 身体が弱いと名前だけだと、いつて名前を替えることもあつた。たいていは呼び名だけ替えた。また、嫁に来て、婚家に似たような名前の人人がいると嫁は呼び名を替えた人もいた。(千津井) 取り子 なし。呑龍坊主の話は聞いたことがある。(江口)

七歳児 七歳になるとタモトの着物をこしらえてもらつた。(入ヶ谷)

棄て子 四十二年の二つ子といつて、父親が四十二で、子どもが二つになると、三本辻に棄てた。拾う人を前もって頼んでおく。(斗合田) 四十二歳のとき二つの子は捨てる。近くの人や知り合いの人が拾つてくれる。(江口)

子育て 食事の時は子どもを抱いて、しつかり前掛けのひもで自分の腰にくくりつけて動いてても大丈夫のようにしておいて、自分でも食べながら家族にお給仕をしてやつた。こうして乳をくれたり、夜ナベもした。(大輪)

「子だから」育てるとよくいわれてそれが嫌だつた。よその子は機織りして稼ぐから「子宝」だ、と言つた。(大輪)

セキボリで洗濯する間、子は乳母車にでも入れておいた。炎天で、ホロも帽子もかぶせねばほついた。汗をダラダラ流して遊んでいたがそれでもカクランも起きず元気に育つた。親が一生懸命働く姿を子どもが見てたから、自然と弟姉妹、助け合い、仲良くできたろう。(大輪)

朝など年寄りが赤児を「はだっこ」というおぶいいたをした。袖なしで締入れの胸着など着せた赤児を年寄りが自分のきのを脱いで、背中の肌に直接おぶつてその上からきものを着る。そして前を合せてひもをしめたり、前掛けのひもでしつかりしめる。

朝はんちよとの間もりつ子する時などよくした。(大輪) 乳をのませたあと、すぐ湯を入れて、ふとんに寝かせると「ならしして(しつけて)」あるから赤ん坊は一人でうんうん語りながら静かに寝入つた。そんなに手をかけていられない赤ん坊もそうしたものと思つていたらう。子育ては仕事の片手間にやつてのけた。

烟仕事をする時は背中へおぶつて、夜なべや食事の時は前に抱いて、前掛けのひもで自分の腰にしつかりしばりつけて仕事をした。(大輪)

小判型の野菜を入れるコバンカゴ、竹の皮でできた丈夫な野菜を入れる竹ゴゼンカゴなどに入れてあやした。(入ヶ谷)

子守り おともり (子もり) は姑がして嫁は機織りをした。子どもも学校から帰るのを待つて弟妹のおもりをさせられた。だが家に小さい子がないと、おぶつて遊んでいる子がけなると思つた。近所の子を取りておぶつた。(須賀)

昔は子守りを頼んだ。小学校の三年生から四年生ぐらいの子どもで泊りこみでやつてきて、赤ん坊をおぶつて学校へも行つたものである。

子守りをした人はその家に長く出入りしている人もおり、関係は非常にノメツコイようである。(江口)

モリツコといって十二、三歳の子供が住み込みで子守りをした。夏、冬物の着物を与える程度で賃金は年十円位であった。(大佐賀)

子守りは手のないうちか、よっぽどのうちでなければ頼まない。子守りに歌を歌つたりするひまはなかつた。(斗合田)

四 そ の 他

子どもの人数 ふつう五、六人。多い人は十二人ぐらいなんだ。産む人もそばの人も大変だった。(川俣)

サカイナシ 初手の子があつて、次の子がある時、体が汚れないで、サカイナシだった。二つになって生れたのだから、年子ではない。(斗合田)

双子 昔は双子ができると恥さらしだといつた。男と女の心中の生まれ替わりだなどといわれた。

昔は、双子ができると主人が屋根棟にのぼつて「双子ができる!」と大声でどなつたこともあった。こうすれば、あらかじめ恥さらしを解消したことにもなつた。(千津井)

堕胎 ホーツキの根を子宫にさしこんで胎児をおろしたと聞いた。だからその辺に植えてある。昔の人はそうやっておろしたそうだ。(大

輪)

外見して判るように大きくなつてからおろすことを、アンマでやるのがいたという。またホウズキの根をさし込んでおろすとして親も胎児と共に死んだこともある。(入ヶ谷)

間引き 先の子が歩くようになると次のが生れ、生活に苦しむ人は間引きをして縁の下に埋めたという。いかを食べると流産するともいわれた。(南大島上)

話に聞いたことだが、生れるとすぐ布団をかぶせたり、紙をぬらし

て顔につけて殺したという。(入ヶ谷)

二、婚 姻

(一) 婚 礼

結婚 今は恋愛というのが、前はナレアイといつた。今は遠くからも来るし、遠くへも行くが、板倉、館林、川向うの埼玉が多かつた。(斗合田)

見合いがほとんどであるが、恋愛してクツツイたら仕方がない。両方の親が話合いをした。恋愛結婚はナレアイといつたが、かけではよくいわない。(大佐賀)

仲人から話があつて、くれ方、もらい方とも「よかんべえ。」ということになると見合いをした。仲人が男を連れて娘の家へ行き、娘とその親が迎えた。仲人が「これはこういう家のこういう男だ。」と男を紹介すると、娘の父親が「これはこういう娘だ。」と娘を紹介した。紹介が終わると娘は男に茶を出した。男がこの茶を飲めば、娘を気に入つたということでお話を決まつた。(南大島)

恋愛はナレアイといい、親が結婚を認めないと家を出てしまうこともあつた。ナレアイで結婚する時はナコウドは頼まれナコウドである。(南大島)

結婚式の時期 昔は十一月、十二月、正月が多かった。この辺は、正月に「嫁呼び」というのがあるので、たいていは、十二月に式をあげることが多かった。(千津井)

祝儀の時期は秋の取入れがすんでからが多かった。今は式場がとれ次第だ。(斗合田)

仲人 結婚は仲人が話をすすめていくが、親戚の人や他人が仲人になることが多かった。仲人は婿と嫁の家を行ったり来たりするので「足袋を三足切つた」「下駄をすつきつた」などと言つたものだ。昔はそのくらい足を運んで話をすすめていった。

また、仲人は「仲人ぐち」といって、幾分話に誇張があつたりしたものだ。(千津井)

仲人は夫婦一組。仲人が何回行つてもまとまらないというのもある。「仲人のナナテンボウ」といわれるが、おおごとしたものである。

「三百仲人の五百損」という。仲人札は金錢でやる。與れ方ともらい方四、六の割合。トンビノハネとはいわない。(大佐賀)

好きで商売している人もいる。「仲人七うそ」というが、まとめるには、多少の「ごまかし」もある。仲人は、自分が世話をなったからお礼に一つはするもん、三つすると、親の恩をおくるという。(斗合田)

仲人にはつけ届けをした。「仲人三年、実家は一年」という。(千津井)

クチガタメ クチガタメはこの辺では祝儀の当日に行なつた。クチガタメの時には、仲人が酒を一升持つて嫁と婿の家に行つた。はじめに仲人は、嫁の家に一升持つて行き、半分の五合飲んでもらう。次に婿の家に行つて五合飲んでもらう。これは「一生(升)暮らせるよう」、「一生(升)暮らせる」という意味であった。

クチガタメは、オクミアイの人が東向きに坐る。仲人が東向きに坐わなければ、クチガタメの時だけで、誤つて東向きになると笑わ

れた。(千津井)

話が決まつたお礼に、嫁の方へ、仲人が酒を一升持つて行く。口がためから御祝儀まで、昔は早かつた。(斗合田)

タルイレ、クチガタメともいう。よい日をみて行う。(大佐賀)

結納取り引き 結婚式の前に、結納取り引きといつて仲人が嫁の家に結納金を持っていった。目録も一緒に持つていく。(千津井)

結納はタルイレをしてすぐでもよいが、よい日をみて行う。クチガタメのとき金額など決めた。またこのとき御祝儀の時期など相談する。(大佐賀)

結納金はざつと五十年前になるが、十円だった。家によつてはいろいろで、やりとりなしといふ家もある。もらつても結局はタンスひとつさお持つにも足りない。(川俣)

結納トリヒキが済むと、女性は「ヒトになつた」などといわれていた。(千津井)

嫁ごの支度 歩いて行つて支度をしてもらつた。支度ができたら一人で歩いて帰る訳にいかずリヤカーにのつて、自転車で家まで送つてもらつた。(須賀)

大正十三年結婚した時江戸襷を買つたら三十五円だった。叔母が祝いに贈つてくれた帯が八十五円だった。(大輪)

嫁入り道具は、結納の関係で少しづつ違つていた。結納をたくさんもらうとたくさん品物を持参せねばならなかつた。昔は、嫁入り行列と一緒にオトモが担いで持つて來た。オトモというのは嫁のオクミ

アイ。若い衆が頼まれたりした。(千津井)

嫁入り道具はクミアイの人がひいて、嫁入り行列よりも先にもらつて行く。その際、荷物を守るために、嫁のミカタ(血縁の人)が二人つく。これをトモという。(南大島)

嫁入り道具を買ひに館林へも行つたが羽生へ行く人が多かつたろう。(川俣)

ムコイリ 祝儀の日の昼頃、婿と仲人夫婦、それにもらいの方の満い

親戚、本家（本家の場合は分家）の戸主が、ムコイリと称してくれ方へイチゲンに行く。行く人数は、くれ方ともらいの方で相談して決める。

ムコイリの客はみな奥の間（デエ）のオモテから家にあがる。一同が座につくと、もらい方、くれ方それぞれの親族の紹介が行なわれる。紹介がすむと冷酒がである。その間に嫁は本家の主婦、いなければ近所の主婦と一緒に鎮守にお参りしてくれる。

冷酒を飲み終わると三々九度をして、くれ方の親族は引っこむ。最後に料理が出て、それを食べるとイチゲンの客は、仲人夫婦を残して帰る。（南大島）

結婚式の当日の午前中、婿一見の一行が嫁方へ行く。一見は親戚などで構成するが、多い人で仲人まで入れて十人くらいである。嫁方では女の姉妹たちも一見座敷を紹介される。（千津井）

結婚式の当日昼ごろ、婿一見の一行が嫁方の家へ行く。これを「ムコウイディチゲン」という。婿方の親戚とともに仲人が婿を連れて行き、嫁方で酒を御馳走になる。仲人はそのまま嫁の家にイツクマリ（居たま）になって、婿と一見の人だけが帰つてくる。婿一見が通つて行った同じ道を、嫁の一行も通つて来ることになっている。その時、道祖神の前は通らない習慣があり、わざわざ回り道をしても避けた。いわれは不明。（須賀）

婿入りは嫁入りをする日の中前に婿と仲人と親戚の人が嫁の家に行つた。ムコイリをすると、男仲人が婿を連れて嫁のオクミアイまわりをした。手拭に婿の名を書いたのを配つた。（千津井）

婚礼の朝、婿方から仲人と親戚が、くれ方に行き、御馳走になつて婿も一緒に帰る。そのあと嫁が家を出る。（大佐賀）

嫁一見 夕刻、仲人が嫁一見を見つけて婿の家へ来る。嫁は一旦中宿に落ち着いてから、婿の家へ入る。（須賀）

夕方、嫁の身内の者が嫁一見として婿方へ来る。この時、婿一見に

行かなかつたツレアイ（女衆）が紹介される。（千津井）

嫁が家から出るときは玄関からでなく必ずオモテ（縁側）から出す。これは仮の場合と同じでこのあと戻つて来てはいけないというわけである。（千津井）

中宿 嫁の一見が嫁方に着くと、中宿に一旦入つて待機した。お待ち女房はない。（須賀）

婿方の家の本家が親戚をチユウザにあて、家を出た嫁の一見が仲人と一緒にここでお茶を飲んだりして休み、婿方の家の準備の都合をみる。（大佐賀）

嫁迎え もらい方の隣組の人が三人ほど、ムラさかいまで、嫁迎えにいく。このときは、昼間でも提灯をつけて迎えにいった。

嫁方からは、嫁の親戚の者と隣組の代表（一名）が、嫁を送つてきた。

嫁は迎えて中宿へ案内した。ここで嫁一行に休んでもらい、また、仕度をかえてもらつた。その後、迎えにいた人が案内して家までつってきた。（矢島）

時刻を見て、隣組の人や本家の人が、高張提灯を持って、カイドまで嫁を出迎えに行く。（須賀）

入家式 嫁を迎えてくると、うちの入口のところ、両側で迎えて火をたく。ここから、嫁には菅笠をかぶせる真似をし、そのうしろから

箕であおぎ、杵でつきこんだ。これをするのは隣組の人たち。

一見客は隣から奥座敷にあがるが、嫁はとぼくから入る。このとき、あがりはなのところに姑がいて嫁の手をとつて座敷あげた。

奥座敷に、嫁と一見客を入れて坐つてもらう。おちつきといつて、そこへ、お茶ときなこぼもちがである。おわんに二つずつ入れて、一見客にだした。（矢島）

嫁が婿方のカドグチに来ると、近所の人が嫁の頭に菅笠をかぶせてあおぎ込み、杵で嫁をつき込む。かたくおさめ二度と出ないよう

にという意だという。このとき近所の人が豆がらをタキビして燃す。そして嫁はダイドコから上る。このとき姑が嫁の手を引いてやる。イチゲンは縁側から上る。次いで嫁は一番奥の床の間のあるコザに入る。

(大佐賀)

嫁の一行が婿の家に着くと、屋敷のカドグチの両脇に豆がらをおいて、火をたきつけてたき、足もとを明るく照らす。嫁が通ると、その豆がらを一所に集めて燃やす。よく集まる、よくまとまるようにする

といふ。嫁の後から、村の人が餅つき杵で地面をつき固めながらついてきた。縁を固めるためといふ。家に入る時、後から村の人が箕であるおき込むようにする。嫁はトボグチから入る。嫁がトボグチから家に入る時、しううとめが迎えに出で、トボグチの所で嫁の手を引いて座敷へ引き入れる。トボサカツキの式はない。二人でしきいをまたいだりせず、手はどちらの手でもかまわない。嫁の一見(イチゲン)の者は外の縁側から家に上がるのと、はき物は台所の方へ、村の人が回しておく。(須賀)

午後六時頃、もろい方のクミアイの人が提灯を持ってカイドウ(ムラの道から屋敷に入るまでの私道)に嫁を迎えて出る。カイドウで嫁入り行列の仲人と迎えのクミアイの人が提灯を交換する。

嫁は家に入る前に、庭で菅笠をかぶり豆殻を燃やした間を通る。「火の中(豆殻)、水の中(菅笠)もいといません」という意味だといふ。また、「あおきこむ」といって、豆殻の間を通しての後から箕であおぐ。さらに「つきこむ」といって、嫁が通ったあと、庭を杵でつく。

この儀式がすむと、嫁と仲人の奥さんはトボグチから、イチゲンの客はオモテから家中に入れる。(南大島)

結婚式の当日、ヨメゴが屋敷に入つてみると、クミアイ(隣り組)の人が迎えに出て、ヨメゴの後から一人が箕で嫁の尻をあおぎ、もう一人が杵で土をドシンドシンドシングながら歩く。家の庭の入口(門松を立てるところ)に豆がらを束ねたものに火をつけタマツとして、

両側に立ち、その間をヨメゴが通つて家に入った。(中谷・梅原)
嫁が庭へ入る時は豆がらを積んで両脇の二ヵ所で燃やす。その間を通つて嫁は庭へ入る。その時ミでおきこむのとキネでつきこむのを同時にする。玄関をまたぐ時は、すげ笠を嫁の頭の上にさしかける。これから上を見るな、下をみてろといふましめにする。姑が嫁の手を引いて玄関をまたがしてくれる。庭から見て向つて左に姑が立つ。

(川俣)

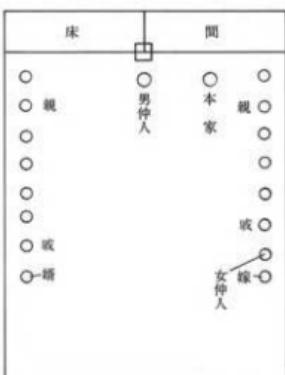
嫁の荷物が嫁よりも早く着き、荷をおろして部屋に備えつけたところに嫁の一行が来るので、婿方ではカイドまで弓張提灯を持って紋付で出迎える。ここで提灯を相互にとりかえる。カイドのところで豆がらのタイミングをオクミアイの人が燃す。豆がらは一ヶ所に纏でしばつておいて火をつけ、引つ張つて両方に分けて道をあけ、そこを嫁が入つて来る。通りすぎると一ヵ所にまとめて燃す。そして菅笠を被せて、後の方から箕であおきこみ、杵でつきこむようにした。「福の神」を迎えるという。(矢島では後から杵でつきこんだ)

豆がらを燃やすのは、火の中でも辛抱できるようにといふことで、箕であおぐのは、風が吹いてもいらるようによくいうまじないであるといわれていた。

嫁は両親の捕つている女二人が手を取つてアガリハナから座敷にあげる。また、嫁はトボグチから入り、付添いの者が嫁の頭上に菅笠をかぶせ、姑が手を引つ張つて家中へ入れるところもある。(千津井)

嫁の来る両側に、組の者が豆がらに火をつけたいまつを燃して、嫁が通る時にカチカチ叩き、菅笠をさしけ、杖をつかわして、箕であおきこむ。杖は機織りに使う棒を使う。場所によつては、杵で追いかむ所もある。豆がらは、まめに百まで、わしや九十九まで、ともに白髪の生えるまでといつて、縁起がいい。(斗合田)

(2) 親戚紹介。(3) 同じ部屋で披露する。式をナンドで行う家もある。オ



マチニヨウボ（一人）は席に出ないで、ナンドにいて嫁の着物の面倒を見る。シマダイは飾らない。（大佐貫）

トリムスピは、テエ（オクノマともいう）で行う。すわる座は図のとおりである。（千津井）

床柱に仲人が坐り、その前の左右に嫁・婿が向き合って坐り、末座に相伴様が正面を向いて座る。オショウ・メチョウが出て、酒をつぎ、盃（盃））とをする。

組合代表が「嫁さんをもらつて来ました」と挨拶したあと、酒もりになる。組合の力が大きく、式のすべてを始末した。（千津井）

トリムスピは、一見客も同座して、おくざしきでおこなつた。

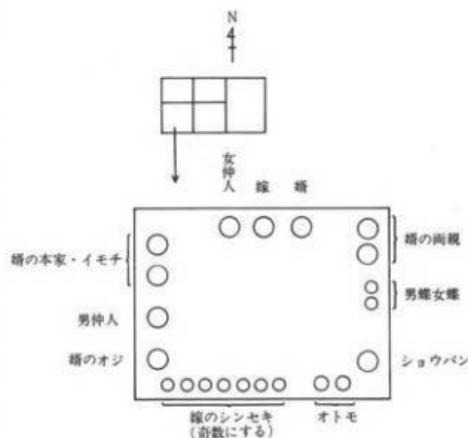
嫁のトリムスピがすむと、そこで、親子盃がかわされる。男女の子どもがでお酌をした。（矢島）

嫁との両親と酒をくみかわした。これがすむと、式が終つて、嫁はおめしかえをする。（矢島）

客間（テエ）で行なわれる。イチゲンの客が座つくると、まずオチツケボタモチといつてきなこのぼた餅を黒椀に二個入れて全員に配る。

次に冷酒が出る。冷酒は、床柱を背にした仲人から両開きに酌みかわす。その後、それぞれの親族の紹介が行なわれる。オショウバンサマ（クミアイ代表）がもらい方の親族を、仲人がくれ方の親族を紹介する。親族の紹介が終わると、三々九度の盃をかわす。それから宴會となり、オショウバンサマが中心となつて、イチゲンの客に酒をすすめる。十分飲んだ頃をみはからつて、オショウバンの合図で、嫁が茶葉子をもつて客やお勝手で衛い人全員に茶をついでまわる。これでお開きとなり、イチゲンの客は帰る。（南大島）

相席順は仲人夫婦が床柱をせおうことが多くたが。本家・分家・お相伴の順で坐る。お相伴は目上の年配者がやるが、いなければ隣組の



ものがやる。嫁は南向き、婿は北向きに向き合つて坐り、三々九度の盃をかわすが、子供が指図されながら盃にお酒しづぎをする。子供は近所の子やメカタ（身内）の子、おい・めいなどがやるが、オチヨウ・メチヨウとはいわないで、「お酒ソギ」と呼ばれる。仲人が分家の年寄りが両家の紹介をする。外側の障子はあけておくので外からぞきこむ、障子をしめておくと穴をあけられる。ノゾツコミ酒は出さない。

（須賀）

一見座敷 嫁・婿の三々九度の盃ごとがすんで落ち着くと、嫁は着がえる。嫁方・婿方の一行が並んで、親戚のお近付きの紹介をする。仲人が嫁方を紹介し、お相伴が婿方を紹介する。膳・椀（大尽の家から借用）は一人前ずつ付いて宴会をするが、一見の一行は奥に坐り、手前の方に女衆の席がある。宴会は夜明けまでやつたこともある。宴会の半ばに、嫁が親戚や女衆の所へ顔見せに出でてお茶を出し、持参した茶菓子を出して、顔を知つてもらうようにする。（須賀）

（二）婚礼俗

婚姻 地昔は方向を重んじた。近在の村々と通婚するが館林市も含めて一里四方位。川向う（埼玉県）との婚姻は絶対にしなかつた。（大佐賀）

結婚 年頃の娘や若者が多いと、シンセキや近所の人が両方の財産の釣合いを考え、仲人として両家を何度も行つたり来て話をまとめた。血筋・系統も調べた。そうした話があると娘の女親は、相手の近所へ行つて見てきたりして決めた。

通婚は、以前はせいぜい隣りムラまでであった。また、コウチ内の結婚は少ないという。（南大島）

方位 昔は方位のことをやかましくいっていた。昔は方位が悪いといふ理由だけで破談になることも少なくなかった。方位が悪いと「生き別れが死に別れ」といわれていた。

方位が悪いところから嫁をもろう時には、いつたん違う所に出たり、道を進えて入つてくれればよい。（千津井）

合いが楽であった。（田島）

年まわり 結婚する時には年まわりを氣にした。男は、おおなみ二十歳くらいが適齢で、女は二十歳が嫁盛りといわれていた。

女の十九、男の二十五は厄年でよくない。

また、女の二十二歳は「二の並びはよくない」といっていた。（千津井）

厄年の結婚はいけない、といった。（川俣）

年まわりで丙午は一般的にきらわれる。寅年は、千里行って千里帰つて来るとか、おやじを食う、身上を食うとかいうが、よくもなければ悪くもない。（斗合田）

イトコ婚 イトコ同士はよくないといつていていた。（千津井）

足入れ クタガタメが終つて嫁が婿の家に泊ることで、足入れをすればあと続いて泊つてもよい。婿方に女手が少ないため式をあげずにすぐ行くものもある。また家風に合うかどうかためす「タメシ」というのもある。こうした場合嫁は入籍しないので第一子は私生児である。第二子が生れて入籍するものもあるし最初の子供が生れて初めて入籍することもあり、家風に合わないと縁切れとなる。この場合は相手で話合い、涙金を納めてすませる。「タメシ」は女中奉公のようであった。（大佐賀）

経済的な理由から式をあげないで婚家に入つてしまふのをアシレイといった。

このような場合嫁は普段着を着て仲人とともに婚家のクミアイをまわり、手拭いを一本ずつ配つた。

子どもができるから式（本祝儀）をやりなおす人もいた。（南大島）

口がためをして、祝儀がすぐできない場合には、娘が婿のところへ行く。九月に足入れをすると、苦労するという。また、話が決まるとき人が酒一升もつてきて組の人を呼んでよろしくたのみ、組の人不了解すれば娘は泊る。そのあと式まで出入りは自由である。試験の意識があつた。(斗合田)

祝儀ができるないような時には、「足を入れておくべき」ということある。たとえば、年内に祝儀ができずに、多忙な春先に祝儀をするような場合にアシイレをした。

クチガタメをすれば、アシイレをしてよいと言われた。

昔は、たいていがゴシュウギ前に娘は行つたり来たりしていたものだつた。(千津井)

□ガタメを前にしてから、気変わりしないように、結婚式の前に本人(娘)が先に泊りに来た。仲人は相手の娘を連れて婿になる男の家へアシイレに来て、組合の者や旦那に立ち合つてもらつて、アシイレ祝いをする家もあつた。たとえ本人が来なくとも、下駄片一方でもその人の下駄を持つて行けといつて、仲人が持つて来たという。□ガタメしても、年回りが悪い時、たとえば二十四歳は四二(死に)で悪いから、二十三歳のうちにアシイレしておくこともあつた。また、婚家の予定の家が忙しい時には、結婚式前でも内緒で手伝いに来たりした。

(千津井)

□がためをすればいつでも往来しても泊つてもよい。式をあげなくともその前にちよつと足だけ入れておくといふ。□がためと足入れを大体一緒にするが、幾日か日をおくこともある。仲人、組合代表(もとは組の者全部)本家、分家人達を寄せる。こうすれば式を挙げたのと同じで、従つてあらためて式をあげないのもある。一方親の気に入らないとか働きでがないようなときは破談になることもあつた。試験的な考え方の存在したことでも事実である。(梅原)

オチツキ 結婚式のとき、娘や一見客が着くとオチツキというお茶

を出す。ほたもちとオコウコと一緒に出す。食べてから仲人によつて家族の紹介をする。(千津井)

嫁が座敷に上ると、オチツキのぼた餅が出されるのを食べる。(須賀)ご祝儀のおはぎのおちつきがある。もち米のおはぎで吸物わんに一個つけて出す。いちげん座敷に坐るとすぐ出る。おちつきだからね。

こあしのお膳におちつきだけ出して、すぐさげる。(川俣)

おちつきに、僕みたいに細長く握つたぼたもちを食べる。オチツ

キボタモチという。黒親碗に三つ並べて出す。この時御相伴様が、ぼ

たもちの食いで、お客様が、酒を飲むかどうか見きわめる。(斗合田)

お茶 祝儀のとき、お茶を出すときはちょうど飲みごろのぬるいお茶を出す。これはシンキヤクに対しても同じで、やけどをしないよう

にということである。(千津井)

祝儀の料理・飯・吸物(タイなど)・おひら(芋の煮ころがし)・シンカンモリ・酢の物・てんぶらなどが盛つて、膳の向こうの方に置く。(須賀)

オチカツキ トリムスピが終わつてオチカツキの時にオクミアイの人が、あらかじめ作つておいた男女性器をかたどつたものを盆にのせてさし出した。

また、庭先で見ている若い衆には、キナコボタモチを配つた。(田島)

嫁のお茶 式のあと嫁は着換えをした。女仲人が皆さんに紹介した。

そのあと、嫁はお勝手の皆さんにお茶をだした。うちから茶葉子をもつてきて、それを手伝いの人にだした。むかしは、いり豆をもつてきただ。(矢島)

イチゲンの客が帰ると、お勝手をしてくれたクミアイの人たちを客間に坐らせて、嫁が酌をして慰労した。床柱は背負わせないといい、東向きには坐らせなかつた。終わるころ夜が明けた。(南大島)

ナビロメマメという豆をいって来て、誰それですがよろしくお願ひしますと炒つて食べてもららう。(斗合田)

嫁に来るとき豆炒を持って来て近所の仲間入りになるのだといつて

茶菓子代りに出した。来た晩に勝手の人たちに配つた。このときアラレも作つて出した。これらを嫁の手土産とか土産と呼んでいた。(新里)

近所廻り その晩のうちに、提灯つけて廻る。今は近所の人があみな集まっているから、同じことにして、というので廻らなくなつた。(斗合田)

式のつぐ日、嫁はムラの鎮守様におまいりをしたり、組合内の家を一軒一軒あいさつまわりをした。案内してくれるのは、本家のおばさんなど。

婿入りした場合には右と同様にムラの中をあいさつまわりをした。男の場合は、本家などの男衆が案内した。婿は区長のところをはじめ、ムラのおもだつた役員のところへもあいさつまわりをした。(矢島)

祝儀の次の日、鎮守参りをすましたあとで、婚家の本家の主婦あるいは近所の主婦が嫁を連れて、コウチの各家を訪問し「これがどこそこの嫁です。」と紹介する。これをムラマワリという。(南大島)

式の翌日、嫁はポンケまたはイモチのオバサンに連れられて宮まいりをした。そしてこの時、婚家のオクミアイにも手拭に名を書いて「今度、嫁に来ましたから」といつてアイサツにまわつて歩いた。(千津井)

祝儀の次の日、嫁は婚家の本家の主婦か、いなければ近所の主婦と一緒に鎮守参りをする。また、それに先立つて婚家の屋敷神(屋敷稻荷)にお参りする。(南大島)

フタツメ 嫁と嫁が仲人につきそわれて嫁の家に里帰りする。この島) 日のオハグロは古い昔のことと聞いていただけである。オ二日目に里

帰りすればミツメはないが、実際はミツメに里帰りする例が多い。(大佐貫)

式の翌日にはフタツミといつて婿と嫁と仲人が嫁の実家に行つた。このフタツミには兄弟がいれば下駄とか足袋などを持つていった。(千津井)

嫁の里帰りといつて結婚式後、二ツメ(一日後)か、三ツメ(三日後)に嫁は婿の両親とともに実家へ、道を開くために行く。女一見はない。(千津井)

嫁の里帰りには、髪洗いをしろという。実家に帰つて髪を洗つた。(千津井)

アタマアライといつて式後三~五日たつた頃、嫁は実家に一人で行き、頭を洗つて油を落し普通の頭にする。このときは泊らないで帰つてくる。(大佐貫)

女一見 女一見の例はすぐなかつた。

式の翌日、もう一方、くれ方双方から女一見がいつたり来たりした。このメンバーは嫁娘とおばさんなど女の人たち。(矢島)

二日目か三日目に、仲人が嫁の姉妹・親戚をつれて女だけでくる。(梅原・斗合田)

言葉はないが、結婚式後二日めに嫁の里帰りをする時、嫁の姉妹などが付いて行く。婿・婿の姉妹など二、三人を、仲人が連れて行く家もある。(南田島)

ミツメ 式の三日目をミツメといい、嫁が里帰りをする。手土産を持つて姑がついていく。泊つてはこない。(南大島)

ミツメというのは、式の翌日に行うフタツミにまわりきらないとやるくらいで、この辺はたいていミツメというのではなくかった。(千津井)

ナコウドヨビ ミツメが終わると、仲人をよんで御馳走し、お礼をした。これをナコウドヨビという。(南大島)

なべかりり むかしは、一月四日に、なべかりりといつて、嫁が里帰りをした。(矢島)

女衆の年始 初嫁は来てから一、二年は一月四日に夫婦で嫁の里に行く。お客は二晩泊る。男は一晩で帰つてくるのが普通。

「嫁(いとこ)の年始は十五日。女の年始は十五日すぎ」とも言つた。(大輪ヨメヨビ) 御祝儀をしたあと、正月には嫁呼びというのがある。嫁家の母(しゅうとめ)が親戚の家につれていくつてくれた。嫁呼びの時には砂糖、菓子、手拭を持つていった。嫁呼びされると嫁は行つた家で祝儀をもらえた。しかし、嫁は、初めての客というので行く先々で子供たちにお金をやるので、大変であった。

嫁呼びは、正月以外にもやることはあったが、ほとんど正月十五日前であった。(千津井)

嫁の遊山 一月十五日に、嫁は大判のもちをもつて、里へお客様にいた。このときは、たんと泊つてきた。三晩くらいは泊つてきた。子どもが大きくなると、いかなくなるが、親が丈夫なうちは行く人もいる。なお、大判もちは、一升ますの底の大ききのものを一枚かねね、水ひきをかけて、里の親のところへ持つていったもの。ほかに手拭一本くらい持つていった。(矢島)

一月十五日には、嫁は里帰りをした。二十日正月には帰つてこないわれた。二十日にはたいてい帰つてきた。この時には、大判もちはつていつた。一升ますの底(しつ)くらいの大ききのものを、一枚もつていた。これは、里の親に力をつけるようにといつて、親の力もちといった。里の親は、このもちをみて、娘もふつき(富貴)に暮らしているといつて喜ぶ。嫁が里から帰つてくるとき、とつぎ先の姑に、「おけはく市霜」といつて、重箱に赤飯をいれてもつてきた。嫁が里から遅く帰つてきても「おけはく」があるから、姑さんは嫁

にこごともいえないといつた。(おけはくとは、お軽薄の意味である。お世辞のことをいう。お世辞の上手のことを、あの人は、おけはくが上手だという。)(大佐貫)

嫁が里に帰れる日 蔵暮 金を持参する。鮭の塩びきも。

オケイハイク 右のように嫁が里に帰ると、里でもいろいろに気をつかう。里から嫁家に帰るときには、牡丹餅、餅、いなりすしなど、相手の家の親戚、近隣など考えいろいろなものをつくつてもたせてやつた。帰るときには、女親がついていたが、女親がないか都合悪いときは、父親が兄弟姉妹がついていた。こうすることをオケイハイク(軽白?)といつた。昔は、オケイハイクしなかつたらたいへんだった。娘に来て泣かれ、一晩中しゃべつて泣かれてたいへんだった

といつた。里の親は、娘に連れられて実家に帰つた。嫁はお土産として、すしや赤飯などを持つていつた。泊まつてもよかつたが、あまり長居をするものではないといわれた。婿がついていくことは多くはなかつた。(千津井)

里帰りとして一月十五日、姑が送つて行く。これが嫁の年始で、正月十五日に、嫁は姑に連れられて実家に帰つた。嫁はお土産として、すしや赤飯などを持つていつた。泊まつてもよかつたが、あまり長居をするものではないといわれた。婿がついていくことは多くはないといつた。里の親は、このもちをみて、娘もふつき(富貴)に暮らしているといつて喜ぶ。二十一日正月間に合うようによつて、四日には御年始には行かず、また六日の年取りもない。三月、五月の節供、七夕、お盆などにも実家に帰る。

八朔は最後の節句で土産は別に持つていかないが、実家からは算ま

たは一升餅を持たせる。一生うまくいくようという。あとは暮にお歳暮をもつていく。(大佐賀)

嫁は、旧三月三日、旧五月五日、旧七月七日(七夕)、旧八月一日(八朔)に、婿と二人で実家と仲人の家の家へ行つた。お金を包んでいた。

八朔には節供返しといって、「一生ミマス」という意味で箕と一升餅、あるいはどちらか一方を実家と仲人の家から贈つた。(南大島)

結婚して嫁が実家に帰る機会は、三月節供・五月節供・七夕・八朔・歳暮があった。

八朔の節供にはお金を持っていった。節供の土産に箕をくれた。これは身持ちになるようという意味であつた。丸くおさまるようによオハチをくれることもあつた。

歳暮には必ず鮭を持つていった。(千津井)

節供 嫁に来た一・二年は、盆暮には行かないが、節供(三月・五月・七夕・八朔)には、親元と仲人の所へ、お金を持つて行く。八朔には、生れたうちから、箕と餅をもらつて来る。一生みますといふだけだ。(斗合田)

婿のお客 嫁が嫁の里へお客様にいくことについては、次のようなことがいわれている。

「娘みたさに婿呼べば、娘来ないで、婿がきた」

これは、婿にお客にきてくれといは、氣をきかせて嫁(娘)をお客によこしてくれるだろうと期待したのに、婿がお客様にやつてきたので、嫁の里の親ががっかりしている様子をいつたもの。

「一晩泊れば上の客、二晩泊れば中の客、三晩泊れば下との下の客」

これも婿のことをいつたもの。

婿が嫁の里へ行つた場合のことである。(矢島)

嫁入りの風呂 嫁に行く時に風呂に入ると出たり入りするのでよくない。(江口)

(三) そ の 他

ハッセンヨメゴ 貧乏人の嫁入りのことで、結納金が八錢だった。

明治二十七年頃のはなし。(中谷)

緑切り稻荷 稲荷山の緑切り稻荷の前は、嫁入り行列は通つてはいけない。(南大島)

離縁 離縁のことをエンキリといつた。どちらともなく別れるようなこともあるが、先に嫁がいやだといえ、「結納倍げえし」といわれ、倍の金を返した。

離縁のことを「三下り半を書かれた」ともいつた。大正時代に三下り半をもらった人もある。子供が生まれてから離縁する時には男性の方が子供を引き取つた。(千津井)

離縁された人のことをデモドリといつてはいた。タビガエリとは言わなかつた。(千津井)

仲人は、まとめ役には出るが、こわれる時には立合わない。(斗合田)

ウレノコリ 婚期をすぎてても嫁に行かない人のことをウレノコリといつた。(江口)

婚期を過ぎても嫁に行かない人のことをデオクレといつた。(千津井)

婿取り 娘の所へ婿をもらう時には、当日、嫁は近所の家か親戚に一旦出でていて、婿が先に家に入つてから、嫁として家に入つて来る。この時にも、カドで豆がらの火を燃やし、杵で庭をたたきながら、嫁をトボグチから迎え入れる。(須賀)

婿は会合の時など、先にしまつて、皆にお茶をついでやる。小糠三升持つたら婿に行くなといつた。(斗合田)

逆縁 兄が死ぬとその弟が兄嫁と再婚することがあつた。これを逆縁といい、家庭円満のためによいといつた。(南大島)

嫁のつとめ 嫁のつとめについては、つきのようにいつている。

「あしかけ三年、石の上でも十年」これだけがまんしていれば、嫁のつとめを果すことができるといつた。(矢島)

嫁入りの俗信

嫁は屋敷を出るまで後ろを振りむくな。

赤飯におみおつけをかけて食べるとの結婚式に雨が降る。

ドウロク神は、片目片足で醜男なので嫁がもらえない。それで嫁入行列がその前を通るとやきもちを焼いて、その夫婦を別れさせるといい、嫁入行列はドウロク神の前を通らない。(南大島・七軒)

三、年 祝 い

(一) 厄 年

厄年 この辺でいっている厄年はつぎのとおりである。

子どもの厄年は男女とも四歳。

大人の場合は、男二十五歳と四十二歳。

女は十九歳と三十三歳。

四歳のときには、一月四日に、反町(新田郡新田町)の薬師様へおまいりにつれて、護摩をたいてもらつてきた。ほかに、赤岩の光恩寺(ここは昭和のはじめごろから、厄除けをはじめるようになつたもの)とか、佐野の元三大師へもおまいりにくくらい。

十九歳の女性は、ムラの神社へおまいりにくくしない。三十歳の厄年の場合には、嫁の里の女親が菱形のうろこ模様のついた帯をくれた。この時期はいつでもよかつた。親の都合にもよつた。おかげではない。

二十五歳と四十二歳の場合には、佐野の元三大師へおまいりにくくない。最近では子供たちが寄つて御馳走する。(斗合田)

女は、四十九、三十三、男は、四、二十五、四十二、後厄と前厄がある。神参りをするだけで、特に厄落しの行事はない。(斗合田)

女は十九と三十三が厄年、男は二十五と四十二。災難がきないよう自分で氣をつける。(川俣)

男は二十五歳・四十二歳・五十五歳、女は十九歳・三十三歳で、前厄・本厄・後厄などもある。(須賀)

男は二十五歳、四十二歳。女は十九歳、三十三歳を厄年といった。

四歳は男女とも厄年といつたが、特に厄除けに行く神社仏閣はなかつた。

三十三歳の厄年には、嫁の実家から三角模様の帯をくれた。

厄年の年に生まれた赤子は苦労する。(千津井)

女は十九、三十三歳。男は二十五、四十二歳が厄年である。三十三歳の時は実家からウロコ帯をもらった。(田島)

男女共四歳のとき厄除けに、佐野市元三大師に行つた。本人を連れていけないとときは、そのままの着物を持って行つて厄除けをしてもらつて来た。太田市の大光院にも行つた。女は十四、十九、三十三歳

で、男は二十五、四十二歳が厄年だつた。その外の厄年は聞いていない。(南大島上)

四歳の年には四月に千代田村赤岩の光恩寺へお参りに行き、護摩札をたいて厄除けをしてくる。(須賀)

六十歳になると、佐野の元三大師から正月三日に厄除けのお参りの案内が来る。(須賀)

五十五歳の団子(五十四歳になると、近くの親戚の者(兄弟とか子供)

がその人の呼んで、米の団子を五五個つくつて食べさせる。それは何が何でも食べてしまわないことないから、小さい団子にする。五十五歳の厄を除けたことになる。五十六歳になると呼びかえして御馳走する。

五十四歳になると兄弟、親せきが、それぞれ招待して、五十五個の団子を食べさせ厄除けをしてくれる。何回も食べることになる。本当

は五十五歳になつてからかも知れないが早く食べさせる。団子は極め

て小さく、めし茶碗の中に全部入るくらいのものだった。(南大島上)

男女とも五十五歳になると、秋シノウ(収納)が終えたころ(期日)

不定、兄弟や子どもが呼んで、ダンゴを五十五個御馳走してくれる。米のダンゴで小さいあんこ玉にしたものだが、五十五個食いきれないとうまくないので、小さいものを作つてくれる。呼ばれていく方はいらっしゃるが、包んで行く。(須賀)

元五十五歳になつた人をその子どもや濃いシンセキが家によんでも、小さい団子を五十五個作り茶碗に入れて食べさせる。厄をころがり出すように、という意味で、全部食べないとよくないという。厄を払うので早い方がいいとき、正月贈行。(南大島)

數え年で五十五歳になると、子どもとかきよだいなどが祝つてくれる。一合の米で粉をひいて、米の粉のだんごをつくってくれる。茶碗一杯にもり、あんこをつけて食べるようになりした。本人だけが食べる。日はいつでもかまわなかった。

男女とも行なう。

子どもなどによばれると、酒などをもつてお客様にいって、このだんごを食べてきた。

これは、むかしはなかつた習俗のようである。(矢島)

五十四歳になると、親戚(兄弟とか子供など)、知友が呼んで、五十五歳の厄を除けるようにする。五十五個の団子を食べさせる。時期は、百姓の忙しくないとき。(上江黒)

昔やつた。五十五歳になつた人の厄除けで、親せきで招いてこちそうをするのだが、これは何回でもいいといわれ何軒からも招かれていなた。小さいだんごを五十五個つくり茶わんいっぱいに盛りつけたあんこをつけたもので、飲んだあと食べるもので必ず全部食べることになつた。(江口) その家から出た人が五十五歳になると、呼んで祝つてやる。その家

の人はよそから呼んでくれる。一合の粉で五十五個のだんごを作り、あんこのついただんごを、呼ばれた人が全部食べる。(千津井)

親が五十五歳になると、嫁に行つた者が親を呼び、五十五個の団子を作つて全部たべさせる。一方他家に嫁に行つた娘が五十五歳になると親を呼んで五十五個の団子を御馳走するという。例えば親が二十五歳のとき生れた娘が嫁に行つて五十五歳になるとき、親は八十歳であり、従つて五十五のダンゴをたべないで死ぬ親もあることになる。(梅原)

親が五十五歳になると子供達が親を呼ぶ。子供のいない人は、友人、親戚、普段から懇意にしている人が呼ぶ。茶わん一杯に五十五個の団子を入れて全部たべる。「ダンゴになつたかい」というのは五十五になつたことをいう。(川端・大輪)

五十五歳は厄年の一つとみる。厄逃れで五十五のだんごをつくつて祝う。(江口)

□ 年 祝 い

六十歳、還暦とはいうが特別な祝いはしない。(江口)(田島)(大佐貫)

七十七歳、古稀というが特別なことはしない。(田島・江口・大佐貫)

七十七歳、火吹き竹をつくつて配つた。(斗合田)

喜の字の祝いといい、吹き竹をつくつて親類に配つた。吹竹はとつておいて火事の時に火に向つて吹くと延焼を免かれる。(田島)

喜の字の祝い。記念品(オチャハジヨコ)をつくつて配つたり、

火吹竹をつくつて配つた。火吹竹は、火事のとき吹くと火がこちらに

来ないという。(江口)

七十七歳の時は、火吹き竹を配つた。これで吹くと、火事が向うへ行く。燃し火だから、吹き竹が必要だった。(斗合田)

七十七歳の祝いは自分で吹き竹をつくつて親類縁者にくばる。祝いの

日は、いつでもかまわぬ。（矢島）
数え七十歳になると、吹き竹をつくりシンセキに配った。終戦後
なくなつた。（南大島）

八十八歳 祝う人はある。赤いチャンチャンコに帽子で祝うことも
ある。（千津井）
八十八歳の祝い あかいちゃんちゃんことあかいぼうしをかぶる子
どもたちがつくって、祝つてやる。（矢島）
数え八十八歳になると、赤いちゃんちゃんこに赤い帽子をつくつて
着せた。五十年前までやつていた。（南大島）
八十八歳は米寿で、赤いチャンチャンコを着て祝つてもらつた。（田
島）

九十九歳 やつた人がない。（江口）

（三）そ の 他

初潮 昔は、初めてオコシをつける時に、三針ぬうと三日で初潮が
止まるといわれていた。初潮の時は、赤飯を炊いて祝うといわれてい
た。（千津井）

四、葬 送

（一）死 と 霊

予兆 鳴きが悪いと誰かが亡くなる。しかし、身内の者には聞こ
えない。ボックリ、ボックリと頭を振つて三回鳴くのはよくない。

ウドングの花が咲くと変わりことがある。

人が亡くなる時、寺で戸を開けてくる音がすると男人、オカツテ
の方で水仕事をする音がすると女人が亡くなるという。（千津井）
カラス鳴きが悪い（悪い声で鳴く）と死人が出るというが、その家
の人には絶対聞こえない。（南大島）

鳥なきが悪い。然し死に頻している病人の家族には聞こえないとい
う。

死に頻した人が男の場合はお寺の表から入る音、女の場合はお勝手か
ら入る音がしたり、何かしらのシルシがあるという。（大佐賀）
ヒトダマ 夜、ヒトダマがとんで、ある家の所で消えるとその家に
死人が出るという。（南大島）

いくらか波を打つてとぶ。横に引く。（斗合田）

光りだまの色は青く、うしろにノロを引く。二十歳に見なければ見
ない。（斗合田）

かねだまはほかの光りものより赤い。（斗合田）

人魂は青い色で飛んでスーツと消えた。人魂が飛んで一二、三日たつ
てから人が死ぬこともあつた。（入ヶ谷）

魂呼び 死にそうな病人の場合に井戸の中に向つて親戚や近所の
人たちが、その人の名前を呼んだ。こうしたら重病の人に聞えたとい
われる。又、病気が重くなると神社の社殿を組の人たちが回つて、お
百度参りといふこともした。（新里）

井戸に向かつて死にそうな人の名を呼ぶとその人の魂がもどつてく
る。息をふきかえすともいう。（千津井・入ヶ谷）

お百度語り 病人の死が近づくと近所の人が、神社の周囲を廻つた
り、階段を登つて何んで降りるなどしてお百度語りをした。皆がワラ
を切つたクジを持つてお語りする。人数が多い程よい。須賀地区では
お百度語りが盛んで、誰か悪いとすぐやつた。（入ヶ谷）
大病の人があると、夜、クミアイおよびムラシルイの家から一人
ずつ、たいてい女の人が出て天満宮でお百度をふみ、病人の回復を祈つ
た。お宮のまわりを一回まわると麦薬を一本あげた。お百度をふむの
は、病人の家人には内緒であった。

お百度をふんでいるうち、誰かがけつまずいたり、すべつたりする。
あるいは、みんな一べんに終わらなくてはならないのに終わらないな
るといふ。

どの不思議」とは、その病人はもうだめだといった。

お百度は、昭和初期まで行われていた。(新里)

九死に一生のとき、神社へ来て百回参拝することをお百度参りとい

い。百本のわらを切つて来て一本ずつ数えて参拝した。大正のころの

ことで、オクミアイの人や一族の人たちが一緒にやつた。(千津井)

病気が重くなると親戚の者が神社(長良様)に行き、拝んでは引返

した拝む動作をくりかえす。わらを小さく切つて百本つくり、これ

でお百度の勘定をする。十人でする場合は分けて拝む。(十人なら一人

十往復すればよいことになる)。(大佐貫)

祐天上人の掛軸 むかし、祐天上人がここへきて書き残したという

「南無阿弥陀仏」という掛軸がある。矢島には奈良原家と田口家で保

管している。

人が、死ぬか、生きるかというときに、この掛軸を借りていって、

病人に聞いてみせると、生死がわかるという。(矢島)

これを借りてきたのは、昭和五、六年までのことである。(矢島)

末期の水 そばにいた人がとる。間に合う人は少い。(斗合田)

頗ほどし 願をかけていて途中で亡くなつた人の場合には、残つた

人がかわりにやつた。(千津井)

そえね 身内の者が亡くなると、同じ部屋に寝た。親が亡くなつた

ときには、子供が一緒に寝ろといわれた。仏様のわきに寝た。

あかんぼうがなくなつたときには、親が同じ布団の中で寝た。

このことをなんといつたかわからぬ。(入ヶ谷)

ジャンボン 葬式のことをジャンボンという。(南大島・千津井)

友引 この日は葬式はやらない。いじつても悪いという。(斗合田)

友引の日に葬式を出すとあとを引くという。(千津井)

死なば十月中十日 十月半ばは陽気はいいし、イモ(里芋)はそれ

るのでいい時期だ、というわけで、死なば十月中十日といつたろう。

(川俣)

死なば十月なか十日といつてそれ秋に死ねば後生が良い。(千津井)
神かくし 人が死ぬと血のつながっていない近所の人、半紙を神棚にはつてもらつた。これを神カクシという。(南大島)
亡くなつた時に神棚に、半紙をはる。(斗合田)
人が亡くなるとすぐに家族の者が神棚に半紙を貼つた。一週間後にとりはずした。(千津井)
魔よけ 死者はナンドに寝かせ、北枕にする。死者の布団の上、腹のあたりに、鎌や鉈などの切れ物を置く。ケモノに喰われないようにであるという。(南大島)
死者は北枕にして、胸の上には刃物をのせておく。この刃物は魔除けになる。
猫は死者のいる部屋には入らせない。(千津井)
目を閉じたら、庖丁でも何でも刃物を、そばに置く。(斗合田)
枕かえ 死ぬと北枕を枕にかえしてネドコロに移す。病人はよい部屋に寝ているから、死ぬとオクリに移す。そして猫にかじられないようシンダンボウを北向きにすると、布団の上に刃物をおき、それをマヨケとする。(大佐貫)
死者は北枕に寝かせる。その時、枕団子をつくつてあげた。(千津井)
枕飯 汁椀に一杯の米を別盛でたいて茶碗にもりつけ、箸を垂直に立てた。倒れる悪いので、心棒を立てることがある。この時の灰はとつておいて、仏様が出る時にシャモジと一緒にサンダワラにのせて三本辻やカイドウに送り出した。(千津井)
枕ダンゴ 死者がでると直ちにあるいは葬儀の行われる日の朝、六つ(丸い形のもの三コ、平たい形のもの三コ)の枕団子を煮て供える。これをぬでた湯でおつゆを作つて進ぜ、次で枕飯を七輪でたく。これは箸を立てて進せる。(大佐貫)
クミアイの人が、普段使つていない小さな鍋で米一合分作る。丸い

団子の上に細長い団子をのせたもので、死んだ人が使っていた茶碗に入れて供える。(南大島)

枕だんごでは六個のうち三個は丸、あと三個は平たくする。(千津井) 田植 初を振りこんでから、四十一日目に、苗を植えるもんじゃない。枕団子になるという。(斗合田)

四十九の団子 葬儀のとき供える。米の粉三升四合あるいは四升四合、その中から四十九コの団子(経三センチ程の大きさで、七コを一串にさしたものを七本わらつとつこの周りに結え、串の間には小麦粉で作ったカシをつける)を二つ供えた。今は四十九コ盆にのせたのを二盛進ぜる。残った粉で墓詣り(葬後すぐやる)の団子を作り、またその後七日毎のお詣りのとき進ぜる団子を作る粉を残しておく。なおこの四十九の団子は板木県佐野でもみられる。(大佐貫)

お通夜

近親だけ寄る。(斗合田)

組内的人が寺に死を知らせるとき坊さんが来て拝み、その夜はお通夜でそのときも坊さんがお経をあげ、近親者が死者をしのんで語りつゝ夜を送る。昔はこのとき酒飲みながら「お通夜バクチ」をしたという。(大佐貫)

ドウバン むかしは、中之手と荒寒(合せて中荒と略称)の両コウチで、葬式に際しては、手伝いがあった。葬式のとき、両方のコウチの家全部を皆さんよびにするのを、ドウバンといふ。中之手は中之手だけ、荒寒は荒寒の家だけをよぶのが半ドウバンといった。

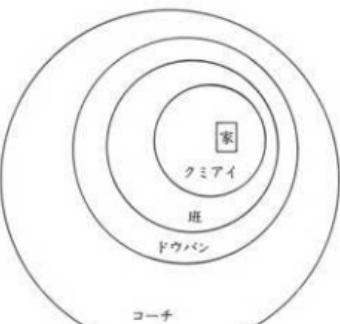
通照寺ゴウチでは、ゴウチ中の人のよぶのがドウバン。半ドウバンにする場合には、伍長のところへ、半ドウバンにおねがいしますといつていく。組合だけをよぶのである。

それぞれの家の事情によって、ドウバン、半ドウバンのどちらかにする。

このことばは、葬式のとき限つていう。(矢島)

葬式に立ち会う人をドウバンといい、たとえば千津井の下組は四班

あるが、一班の人が亡くなると、二班の人がドウバンをつとめた。ドウバンには施主とクミアイの人が頼みに行く。ドウバンは一軒一人出るが葬儀の規模にもよる。(千津井)



かった。

現在は、ほとんど隣組の人たちに手伝ってもらう程度になつていて。

なお、ここほりのことは大役といい、半どうばんの中からつとめてもらつた。(大佐貫)

葬式の時は道を境にして前側がドウバンになつていて、十三軒がみんな出てくれる。このように、ドウバンの皆さんを頼む時と、旦那を頼む時とある。(千津井)

ドウバンの人たちが、お勝手の仕事を手伝つた。この人たちのことを、はたらきばんといつた。

この人たちにも、施主とか親戚の人たちが、お金とか、かつぼうぎなどをくれてやつた。

また、お客様が帰つたあと、はたらきばんの人たちに御馳走をしてやつた。(矢島)

葬式のときなど、組の人(女衆)がお勝手の手伝いにくる。その女

樂のことを、はたらきばんとよんでいる。(大佐貫)

シニツカイ 死亡の通知は、必ず二人で歩いていた。これをシニツカイという。すでに死亡を知っているシンセキの家にも行った。シニツカイが来た家では、「シニツカイはどうもごくろうきました」と言いい、必ず金を包み清めといつて出した。その時忘れても、葬式の時に必ず出した。

シニツカイはクミアイの人たちに頼んだが、行く家の多い家はドウパンの人も頼んだ。

シニツカイは終戦まであった。(新里)

ツゲともい必ず二人で行く。二人が羽織を着て歩いていると、シニツカイとみた。迎えた家では昼食の時間であると酒、昼食を出した。また小遣錢も出した。(入ヶ谷)

死亡の通知は、ハヤツカイあるいはシニツカイといい、クミアイの人が二人で行った。(南大島)
葬式のサタ(ツゲ)のことをハヤツカイといい、二人で行く。来てもらつた家では幾分の志を出すことになつていて。これは瑠璃の方でも出したものだが、電話がひるまつた今日では行くことも少なくなり、略されることもある。(千津井)

葬式の死亡通知人のことをハヤツカイと呼んだ。たいてい二人連れで知らせにいつたので、普段、人が二人連れて来ると「ハヤツカイみたいだ」などと冗談をいつた。

ハヤツカイは、近所の男の人がなり、「○○さんが亡くなりましたから、葬式は〇時からです」と言つた。行つた先では清めを出されたり、ごくろう質としてお金の包みをもらつた。行つた先でごくろう質をもらわぬ時には、施工者がわざりに出したものです。(千津井)
ハヤツカイは、二人でからなげなく行く。自転車が早かつたが、今は電話で伝える。行けばお茶の代りにといつて、きよめを出し御馳走をする。それがなければ、きよめといつて、お金を出す。(斗合田)

湯灌 死者と最も近しい人がする。湯はカマドの釜に荒縄を巻いてわかし、竹を割つて編んだその上にふいた。終つて湯は裏川から持ち出し、以前はウマヌスチバに桶と共に捨てた。今は縁の下に捨てている。湯灌をするに当つては、服装は薄着で線香を持つ人、キヨメ酒を持つ人などあり、湯灌をする人はキヨメの酒を一口に飲んで始める。(大佐貫)

湯灌は身内のものが、ナンドでした。身内のものがうわぎをとつて、シャツ一枚になつてする。
湯灌のときには、いちばん近い縁のものが、湯灌の仕度のままで、捨て場(馬捨場)で死馬とか流行病で死んだ人をここで焼いたに捨てに行つた。ナンドのうしろから出て、捨てに行つた。帰りにはうしろをふりむくなどといった。(矢田島)

湯灌はナンドでした。身内のものがうわぎをとつて、シャツ一枚になつてする。

湯灌のときには、いちばん近い縁のものが、湯灌の仕度のままで、捨て場(馬捨場)で死馬とか流行病で死んだ人をここで焼いたに捨てに行つた。ナンドのうしろから出て捨てに行つた。帰つてくるときうしろを振りむくなといわれた。(入ヶ谷)

湯灌の湯は、先に水を入れた醤油樽に足して温める。近親者がその湯湯で死者の体をふいてやる。湯灌の湯は壇(用水路)に捨てる。(南大島)

湯灌の湯は、家の裏口から持ち出して、入れ物(多くは樽)と共に川に捨てる。(入ヶ谷)

アンジキ 竹を十三本並べて、四角に籠に編み、これを敷いて、湯を浴びせる。(斗合田)

ニッカン ニッカンは、死者の近親者とする。男は上半身、女は下半身をふいた。自転車が早かつたが、今は男はシャツ一枚、女は襦袢であった。裸足でやつた。ニッカンに使つた湯は川に捨てた。(千津井)

ニッカンザケを、集っている者が、一杯ずつ飲む。(斗合田)

入棺のとき死者の生前特に好んでいたものを棺に入れてやる。その

他布製のうすい足袋を左右対反にはかせ、コハゼはとめ、ラジも左

右にはかせる。着物の下にシノビ銭(三途の川に行く道中に要る銭

という)をつけてやる。(大佐貫)

死葬束 絹帷子はクミアイの女の人が穴棒を使わず、目見当でつく

る。また、縫う時に糸尻は止めない。(南大島)

絹帷子はぬけてもいいように、結びたまを作らないで縫う。(斗合田)

カタビラを左前に着せた。昔はサラシを女衆が縫つた。結び玉はつ

くらなかつた。現在は葬具店が用意してくれる。(千津井)

死者にはサラシの着物を着せるが、作るには幾人かかつてもよい。

普通の着物は一枚は一人で作る。(大佐貫)

棺に入れるもの 棺には、女人なら髪の道具、男人なら煙草や

キセルを入れた。また、六道錢といって、頭陀袋に銭を勘定せずに入

れた。

入棺が終わると、それに携わった者はきれいな水で手を洗い、清め

として盃を回して酒を飲む。(南大島)

棺に入れる物はわらじ、はばき、白たび、六道錢。これは勘定なし

といって、勘定しちゃ悪い。その他酒が好きだから一升瓶入れてやれ、

煙草好きだからきせる入れてやれといった。(斗合田)

頭陀袋はサラシでつくつて、中に六道錢を入れた。死者が三途の川

を渡る時の渡し賃であった。中に食物は入れなかつた。(千津井)

力飯 坊さんが拌んでいる時、一はさみずつ箸ではさんでやる。(斗

合田)

チカラメシは出棺前の統経中、重箱にごはんを入れて箸一本つけて

親戚参列者の間を廻し、少々オテノクボでたべるのをいう。(大佐貫)

仏様を座敷からおくりだすときに、白いごはんを参列者にはさんで

やつた。

これを力ごはんといつた。(入ヶ谷)

〔二〕 葬 送

棺 棺おけのふたは近親者が石で釘をぶつた。(千津井)

出棺 棺はデイから直接外に出た。出るとすぐ、左まわりに三回半

まわつた。これを穴まわりといふ。穴まわりが済むと、四本柱とか四方張りというのをぐぐつて外に出た。棺が出たあとは、メケエをころ

がして外に出し、ホウキで掃き出した。(千津井)

仏様を座敷からおくりだしたあと、となり組の人がざるをころがし、

その座敷をはきだした。(入ヶ谷)

座棺には下に座布団を敷いて、死体を入れる。ふだん使っていた物

も入れてやる。棺は縁側から持ち出す。(千津井)

葬儀の役割を親戚の者が読み上げ、それに従つて棺は縁側から出る。

出棺すると部屋をはき出し、ザルコロガシする。そのあと墓場に行つ

た人が帰るまでアト念佛を念佛講の人がする。(大佐貫)

表座敷から縁側に出て庭に出る。棺をかつぐコシカタは普通死者の

子供である。出棺すると帶ではき出し、ザルコロガシをして清め、念佛講の老婆達は念佛を唱える。(入ヶ谷)

棺は以前は近親者が四人で担ぎ、客間(デエ)のオモテから出した。

出棺した後、カド(道から屋敷へ入る口)に逆さにしてカマドの薦灰

をのせたサンダワラのまん中に杓子をたてたものを置いた。(南大島)

棺の出たあと、メカイを転がして掃き出す。メカイがなければ、目

のあるものなら何でもいい。(斗合田)

出棺したあと、座敷にメケエを転がして掃き出す。そこで十三仏念

仏を唱える。(千津井)

興がかり 仏様に近いもの(たとえばむすこなど)が四人でつとめ

た。この人たちにはわらじをわたした。これは実際にはかなかつた。

途中ですてた。これを近所の人などが拾つた。かいこのときにこのぞ

うりをはくとかいこがあたるといった。(大佐貫)

興をかついだのは仏様と近いつながりのあるものが四人。たとえば、上がなくなれば子どもがかついだ。(下江黒)

葬列 葬列はおおむね次のようであった。

1 高張り提灯 2 ハナ 3 セシバナ 4 水 5 香ろう

6 位牌 7 棺 8 リュウタツ 9 ゼンノツナ

セシバナは造花の蓮の花。リュウタツは棺のまわりに五つで、ゴリュウといわれた。四つは棺のまわりに、ひとつは棺の上にかぶせたものである。ゼンノツナは、棺のうしろと前に、サラシのひもを持つて参會者が送つてくれる。ゼンノツナは葬式が終わると坊さんにやつた。(千津井)

葬列の順は、花輪→辻ろう→タイマツ→ドラ、ミヨウハチ→水→お膳→位牌→タンモツ→高張提灯一本→天蓋→リュウタツ→ニコ→コシ(遺骨)→リュウタツ二本の順で、タンモツ(反物)は一番よい着物で後に往職にやる。お膳にのせててもいい。(大佐貫)

穴回り 葬列には供え物、あげ物を數多く持つて、輿の後に付く。寺の墓地へ着くと、葬列は穴の回りを左回りに三回廻る。そこへ棺を安置して、坊さんは経文をあげ、親族が焼香し、親戚代表が挨拶して式を終る。(千津井・大佐貫)

葬列が寺の庭を回る時に、巻きわらを一本持つて行つて、火を付けて燃す。(南大島)

穴回りのとき竹製の鳥居を仏を初めて葬列全部がぐり、そのとき豆木を燃す。そのわれた音がよいとゴシヨウがよいといふ。(斗合田)

白無垢 現在は黒い喪服がほとんどであるが、昔は(昭和の初期まで)白無垢を着たものである。(千津井)

ゼンノツナ 今はないが昔はあった。坊さんが持つてくる晒の布を棺の中心からしばり、残りを親戚の女衆がまつ。袖かぶりはない。三角の白布はしないが、白い紙を三角に折つてその頂を麻でしばり、こ

れを親戚十十五人に配りもたせるが、墓に行くまでに捨てている。

(大佐貫)

ヒタイボシ 三角の布で、サラシをさいたひもをつけた。送る人が身につけた。ヒタイボシは家から墓地に行く間に捨ててしまう。

(千津井)

葬具 リュウタツ・天蓋・タカハリは、クミアイの人がジャンボンの朝つくった。

(千津井)

リュウタツは竹で龍の頭をつくり、目玉を三つつける。半紙をはつて鱗を書く。

天蓋は竹を十文字に割つて曲げ、色紙をはつてつくる。

タカハリは白提灯を買つてきて左巴を書き、竹の棒に縛つて笠をつける。(南大島)

龍立 今は買つて来て、五龍といつて五本作る。そのうちの一つに、天蓋をつける。ヒトガタを龍立につける。(斗合田)

花輪 花輪は寺へ持つて行くが全部でなく、三つくらいにする。あとは寺に納めた形にして花屋に引取つてもらい、その代金は社寺総代が預つて寺の營繕費にしている。(千津井)

投げ銭 なくなつた人の子どもとか、親戚の人たちが、会葬のとき、たもの(ポケット)に、お金をいれてきて、穴まわりのときにもいた。

花かご 今はお金を入れてまい。これを投げ銭といつた。(矢島)

辻ろう 葬列が行くとき、隣組からの一人の辻籠役の人が家から寺まで角々に六本の辻ろうを立てる。竹の先を割つて火はつけないが、コーガンジローネークを立てる。角が多いと不足するが、そのときは途中をとばして立て、六本以上は立てない。しまいの辻籠は、墓地の入口に立てる。死んだ人が歩いていくための道案内、道しるべだという。

葬式が終つてもそのままにしておく。なおタイマツ(約五十センチ)を庭で燃す。家から寺まで二本だから形式的だともいふ。(大佐貫)

てた辻ろうを立てる。あとはそのままである。(入ヶ谷)

野辺送りのときに、家から墓地までの間の、辻々に、ろうそく(竹)

の先につけて、をたてた。たてるのに組の人。ろうそくの数は六本であつた。

火をつけなかつた。(矢島)

出棺の前に割つた竹の先にろうそくを付けて先頭を持って行き、寺

の墓地へ行くカドカドへ立て行く。(千津井)

かどかどに、竹を割つたのに、蠟燭をともす。このつじろうが案内

をする。(斗合田)

トコ掘り 組合以外のドウパンの人を頼む。回り番でうすい人をえらぶ。トコ掘りは新しいわらじかぞうり、ツツカケなどを履いて穴を

掘る。トコ番がはいたぞうりは、使うと足が丈夫になるというので、持つて帰る。(千津井)

穴掘りは部落半分ずつ当り、三人ずつが当番を掘る。施主が場所に

印しを付けた所に穴を掘る。清めにお金をやる。(南田島)

墓穴掘りをトコホリといい、ジャンボンの前の日にクミアイを除いたコウチの人を三人(寝棺は四人)頼んでおく。ジャンボンの日の朝、

施主の家の道具を使つて、トコホリをする。(南大島)

人がなくなったとき、どこほり(穴掘り)の役は、隣組の人があつた。この順番はきまつてている。

江黒 トコホリは大役であった。下江黒ではむかしから五人であつた。(下

とこほりのものには、わらじをやる。これを腰につるして、途中で捨てた。

現在は、火葬になつたので、からうとの穴を開けるだけの役目になつた。(大佐貫)

トコホリは順番を書いた帳面があつて、これを区長が持つていて、その順番につとめる。昔は四人でしたのがいまは三人である。姪婦の夫

はこの役をつとめられない。穴を掘つていると施主が酒一升とサカナを持つてくる。酒を半分しか持つて来ないと半分掘つて、これでよいだろなどといったという。(入ヶ谷)

穴掘りをトコホリという。もとは四人組んでいた。現在は二人。葬式のある家とは縁のうすい人をたのんだ。穴掘りと棺かつぎをした。

穴掘りは大役だというので、山の神といった。

穴掘りの人は、親戚の人、仏様の子ども、施主などがお金をやつた。

穴掘りの人は食事もだが、このときふつうの人に、おひらにあつあげを一枚のせてだすが、穴掘りの人に、二枚ずつだ。(矢島)

穴掘りの人をトコホリといい、ダイヤクともいつた。トコホリは三人ずつ回り番であつた。キヨメの席では東向きに坐つてごちそうにする。

トコ掘りは、施主に指示された場所を掘る。この時はキヨメ(酒一升と金)がもらえる。葬式の日に掘る。トコ掘りには、白黒の鼻緒の草履を施主が渡す。棺を埋ける時にナワを切るのはトコ掘りの仕事であつた。(千津井)

トコホリは大役であった。下江黒ではむかしから五人であつた。(下

とこほりの人のことを、オニとよんでいる。土葬の儀代には四人で

つとめた。(田島)

トコ掘りは土葬の時は四人、お骨にしたら二人。(斗合田)

奥さんが孕むと、葬式の時、トコ掘りはするもんじゃない。その前

に大丈夫かと聞く。(斗合田)

カメ棺 昔は、桶に入れた。明治末年、河川改修をして墓地が移転するについてカメ棺が使われ出した。(千津井)

四方門 紙で端に麻をつける。ここを三通り半廻つて、ぐぐつてか

ら穴を入れる。(斗合田)

埋葬 棺を担いで寺の庭で左廻りに二回半廻つた後、棺を置く。焼

香をして、坊さんが引導をさすける。次にシンセキの代表が挨拶し、それが終わると墓へ行く。

穴には縄でつるしむが、その時、縛った縄を切る真似をする。穴に入ると近親者が土をかけ、残りはトコホリの人が土をかけて埋める。埋めた所には犬などが掘り返さないようにバチ竹を置く。また、棺の上あたりにリュウタツをたてる。(南大島)

座棺が多く、兄弟・子どもたち四人が、棒一本を縄を通して棺を担ぎ、北向きにして穴の中に入る。縄をゴショ繩といい、一尺(二十ヒロ)の荒縄で棺を十字に縛り、先を長くして棺を吊るして穴におります。その荒縄をスコップかヘラで必ず切る。「縄切ったか」と確認してから、近親者から順番にシャベルで土をかけて埋め始める。その後、トコ掘りが形を仕上げる。(千津井)

埋葬は穴の中に棺を縄で吊るし込む。立ち合つた者が少しづつ土をかける。他の者は寺の内外で待つていて、やがて女衆がだんごを作り、花を持って墓参りに来る。一緒になつて墓参りをする。その時に墓直しをする家もあり、翌日に本人の親戚が来て墓直しをする家もある。(南田島)

棺を穴に入れると親戚の者が土を一、二握りずつ入れ、あとはトコホリが埋めてボッチをこしらえ、リュウタツ四本、提灯を立てる。そして、隣組の人が作つた竹を割つたので四方からのおさえと、階段をつくる。更に雨が降つたり、犬などが掘り返してボッチが崩れないと云うに、四方の竹及び階段を十十五センチ位の竹のメハジキをもつておさえる。百からにちがすむと、ボッチを崩して平らにする。こうするとあと病人がでないといふ。(大佐貫)

穴に埋めたあと、土盛りは長四角形にして、竹で境を付く。北西に竹を並べて階段を作る。飯、香炉、水などを供え、花や線香を立てる。

竜タツ五本、四方マク四本、計九本の竹を土盛りの其中におつ立て、そこに麦わらを置いて火をつけて燃す。竹が爆発していく音がする。その人は後生がいいといふ。一本の竹を六八本に割つてメハジキを立てる。ことはしない。(千津井)

目ハジキ 墓の土盛りの中央に、竜タツの竹を割つて立て、先を折り曲げて土にさしてはねるようにする。竜タツの竹は親戚の關係が持つて行くもので、長さ約三mあり、五本あれば五本とも全部土にさす。(南田島)

墓土盛りの枠を竹で四角形にしきり、北側に竹を横に並べて段を作れる。(南田島)

上方を四角にした。墓こしらえをしたとき、四方に十六本のメハジキで押える。角々も押える。根本のをツカミともいう。(斗合田)

子供が死んだときは 立てる **M型のメハジキを**

埋葬は穴の中に棺を縄で吊るし込む。立ち合つた者が少しづつ土をかける。他の者は寺の内外で待つていて、やがて女衆がだんごを作り、花を持って墓参りに来る。一緒になつて墓参りをする。その時に墓直しをする家もあり、翌日に本人の親戚が来て墓直しをする家もある。(南田島)

棺を穴に入れると親戚の者が土を一、二握りずつ入れ、あとはトコホリが埋めてボッチをこしらえ、リュウタツ四本、提灯を立てる。

そして、隣組の人が作つた竹を割つたので四方からのおさえと、階段をつくる。更に雨が降つたり、犬などが掘り返してボッチが崩れないよう、四方の竹及び階段を十十五センチ位の竹のメハジキをもつておさえる。百からにちがすむと、ボッチを崩して平らにする。こうするとあと病人がでないといふ。(大佐貫)

穴に埋めたあと、土盛りは長四角形にして、竹で境を付く。北西に

竹を並べて階段を作る。飯、香炉、水などを供え、花や線香を立てる。

竜タツ五本、四方マク四本、計九本の竹を土盛りの其中におつ立て、

そこに麦わらを置いて火をつけて燃す。竹が爆発していく音がする。

その人は後生がいいといふ。一本の竹を六八本に割つてメハジキを立てる。ことはしない。(千津井)

(三) 供養・忌明け・年忌

清め トボグチの外に餅をつく木の白を口を北向きにしてころにし、塩を入れた瓶と水の容器を置く。埋葬から帰ってきた人は、それで清めてから家にあがつて酒を飲む。(南大島)

出棺のあと、玄関のわきに白を転がして置き、手桶・バケツや塩を置く、戻ってきた人がそこで清める。(南田島)

埋葬から帰つて来て、北向きに下に向けてある臼の上に置いてある塩できよめる。臼の上には、塩とおはらいと水を置く。(斗合田)

埋葬後、帰つて来て家に入る前に、庭先で臼を北向きにして、そこの塩をぶりかけて身を清めた。たらいに水を汲んで置き、ひしゃくで水をかけて手を洗う。(千津井)

葬式の清めのときに臼を使用した。逆さにして家の入口に置き、塩と手桶に水を置いて、野から帰つた者が臼の上の塩を振りまいて清めとした。(南大島下)

あぶらげ 人がなくなると、第一にあぶらげ(あつあげ)を買ひに行つた。これを、手伝いに来た人とか近所の子どもたちに一枚ずつ、おひらにのせてお膳(お屋)にだした。そのあぶらげをみて、人はよく働いたから、あぶらげがでつかつたといつたりした。おこもり(子守り)でいくと、子どもの分まで一枚だした。このあぶらげのことを、厚いので、のこのこのあぶらげといった。昔は子供のともらいができると、かならずあぶらげを出すので、人がなくなると、あのは、あぶらげになつたといった。(大佐賀)

葬式の食事 葬式の膳椀は、寺に寄附されたものが保管してあるのを、みんなで利用した。料理は煮豆・アツアゲなどのシンカンモノが出た。「きょうは布子ノアラゲだ」というと、葬式のことをさしてい

る(須賀)

早買もん 油げなど葬式にすぐ使うものを買つて来る。(斗合田)

七日膳 葬式がすんでから、その日にまたお膳をだした。七日という儀式を行なつた。このとき、親戚とか隣組の人をよんで、七日膳をだした。このときも、あぶらげをだした。なお、あぶらげの残りは、親戚のものにわけてやつた。(大佐賀)

この七日の膳は、親戚の者を先にし、このとき四十九のダンゴを紙

に包んで二つずつ配り、トコホリにも二つ配る。次で隣組の人の膳となるがこれには四十九のダンゴは廻らない。トコホリの人は東向きに上座に坐るもなしで、坊さん(他の人より先に帰る)はトコホリより下座である。またトコホリには二三円のお布施を出し、その後の年会のときもトコホリは呼んだ。(大佐賀)

ハナオシ 七日というが遠くからも人がくるので葬儀が終るとハナオシをすぐする。その為墓外で待つていて、墓が仕上るとダンゴをもってお詣りをする。七日毎のお詣りは家族、親戚で、二・七日以後は家族の者のみです。(大佐賀)

葬儀のあと埋めてすぐハナオシをする。これは一たん家に帰つて親戚や仏に近い人が行つてやる。(斗合田)

昔は、葬式の翌日に墓なおしをした。メハジキもした。昔は子供のハカだけにやつた。(千津井)

墓直しは墓の上で火を燃したあと、炭などをおろしてきれいにし、竹で階段をつけ供え物をして、墓参りをする。(千津井)

墓参り ジャンボンの次の日、練香と水と、クミアイの人が買ってきた団子を持つて、シンセキ、葬式の時の手伝いの人とともに墓参りをした。終戦後はジャンボンの日に墓参りをしてしまうが、その場合も埋葬後、寺の門の外へ一旦出てから行う。(南大島)

七日のお墓詣りのとき(葬儀のその日墓から帰つてお手伝いの人がいる)女衆の一人がサンダーラを三本辻に出す。これには御飯をたいた灰、御飯を盛ったシャモジ、葬式の道具と一緒に作つた竹箸などをのせて出す。(大佐賀)

七日には親類が集まつてお墓参りをする。七七日(なななぬか)四十九日までやる。団子、お茶、おけを作る。この日百から日までこめてやる。そのあとは、一周忌・三年・七年・十三年・十七年・二十三年・三十三年、やる人は五十年までやる。三十三年には、イキトウバといつて、杉の木の生きているのを立てる。今は先に杉の葉をしづる。

(斗合田)

法事の餅 家の力によりもちをついて、つぶしんで塩あんの丸めたものを四つとか六つとかにして村の人に配つたりした。また近所の子どもにも一つずつくれた。秋山という家などは墓参りに行つた人にもくれたことがある。しかし生活改善ということで廃止になった。(千津井)

四十九日 七日ごとに身近な人が墓参りに行く。団子を持っていく。

七本木を折つてきた。

四十九日には親戚の人に来てもらつた。四十九日経つと死者の魂は屋根棟を離れる。(千津井)

人がなくなつて、四十九日たつと、たなあげをする。仏様の位牌は仏壇にあげた。この日、親戚の人をよんでも墓まいりをして、供養をする。

四十九日すぎると、仏様は屋の棟をはなれるといった。このとき、仏様が着ていた着物が、ぼろぼろになるので、四十九日のいわい(供養)をしてやるものといふ。(大佐賀)

位牌 椅子は、四十九日まで床の間の前にちやぶ台を出して、その上に置いておく。その後、仏壇へ納める。(南大島)

葬式の見舞い 見舞いには、コウチの全部の家、すべてのイッケ、

シンセキ、知己がいる。

昔はシンセキは、香薫の轍を持つて見舞いに行つた。(南大島)

謝礼 葬式の時、手伝いに来てくれたムラの人たちに現金で謝礼を出す。墓所へハタを持つたり、花輪をもつて行く人にも謝礼を出す。

このお金は、仏の子どもと親せき一同と相談してそれぞれの金額を出しあつて出すことになつてゐる。謝礼の金額は家によつてちがうこともあるが二〇〇〇円くらいで、ハタモチは三〇〇円くらいである。埼玉の方ではよそへ手間とりに行つたくらいのお礼を払い、東京では一万円という。(千津井)

年忌 一週忌から三年、七年、十三年、十七年、二十三年、と三十年忌にワカレトウバ(イキトウバともいふ)を立てて、仏に対する供養は終りとなる。(入ヶ谷)

百日目をヒヤツカニチといい、団子をつくって墓詣りした。一年目をイッセイキといい、二年目を三年忌といふ。その後、七、十三、十七、二十三、三十三年とある。(千津井)

死後三十五年たつと終りだというので、墓に生き塔婆を上げる。三十年の塔婆は杉丸太の片面だけそいで、三十五回忌などと文字を書く。杉の枝が少し出ている四寸角の角材を使う家もある。三島、梅原の光明寺から坊さんを頼んで作らう。(川俣)

三十三年には生き塔婆といわれ、杉の木で塔婆をつくつた。坊さんが削つた個所に戒名を書いてくれた。これで神様になるといふ。(千津井)

イキトウバ(ワカレトウバ)を三十三年の弔いのときに立てた。杉の芯を切つてきてお經をかいて墓に立てた。(斗合田)

三十三回忌に、イキ塔婆をたてる。イキ塔婆は杉の木を六尺ほどに

切つつき、上に葉を残す。片側の皮を削つて戒名を書く。

坊さんは、「イキ塔婆をたてるのは、神様になるからだ。」と説明する。(南大島)

人が死んで、三十三年たつと、みな神さまになる。三十三回忌をワケレネンブツと称し、生きた杉の木を削つて、これに戒名を書いて墓に立てた。イキトウバといふ。略式の場合は、卒塔婆に杉の枝をしばりつけただけでもよいとされた。(中谷)

仏も三十三年忌の法事が終れば神さまになる。(千津井)

流れカソジヨウ 離産で亡くなつた人の場合には竹を四本立てて注連を張つて小川のところに飾つた。ひしゃくを置いて、通行人に水をかけてもらうと成仏するといつた。(千津井)

お産で死んだ人があると、用水堀などの橋のすぐそばに白い布を掛

けた四本の竿竹を立てて、壊れるまでそばを通る人に柄杓で水をかけられた（江口）
子どもの頃、谷田川のほとりに竹を四本立てて一・五メートル四方
ぐらいの布をはってあつた。橋のすぐ下だつた。そばにヒシャクが置いてあり、通る人が水をかけてやつた。（大輪）
妊婦の葬儀 みごもつた人が亡くなつた場合には、赤子をとり出してから埋けた。二度あることは三度あるといつてワラ人形をこしらえた。（千津井）

四 墓 制

二つ墓のある家 仏様を埋める墓と、墓石をたてる墓と、二つの墓のある家がある。矢島では、大野家と泉田家の二姓の家で、この形をとつている。この両家とも、もとから矢島に住んでいた。菩提寺の宗派は真言宗である。

墓石は、人がなくなつて一年でたてる家もあるし、三年でたてる家もある。年忌をおつてたてる墓石をたてる場合には、埋めた墓から土をおひねりにして、墓石をたてる墓へもつていく。この土はその家のものなら誰がもつていいともよい。
親の墓石は子供がたてるものという。ふつうは、十三年忌くらいまではたてる。親の墓石がたてられないと一人前ではないといわれた。墓参りは、仏様の命日、彼岸のいりくち、盆のときなどにする。この場合、埋葬地のほうへ先へおまいりをし、そのあと墓石のある墓へおまいりしていく。いつでも、双方の墓へおまいりをする。埋葬地に地蔵様がまつてある。
このように、一人の仏様について、二つの墓のある形は、明治前からのことであるという。埋める墓、墓石のある墓とも、特別のよび名はない。

埋める墓は中内前に、墓石のある墓は荒寒にある。埋めたところには、くいん棒をたてる程度で、とくにしるしはない。その上を平気で歩いている場合もある。大野、奥田家以外の家は、中内前の墓地に埋めたり、墓石をたてたりしている。
二つの墓の距離は、千メートルにたらずである。
一方の墓には、石塔（石ぼとけ）だけたてているのだから、ぜいたくともいわれている。
共同墓地のことは、ラントウバといつていて、一説によると、先祖様はあるほうで、新しくべつのところに埋葬するようになったともいう。
南大島にも、このように、埋めるところと、墓石をたてるところがべつの形をとっている家があるという。（矢島）
飾り墓地 特定の家では埋め墓と石塔を立てる場所が異っている場合があった。これは主に財産のある家で行なつたようだつた。（南大島上）
当主の墓 川俣や大佐貢では大家の当主が亡くなると、館林の茂林寺の墓地へ葬る習慣がある。他の家族は地元の墓地に葬るので、二重になる。（川俣）

墓地 現在商工會議所のある所にラントウバ（墓地）があり、万日堂が建つていた。葬列が寺の門をくぐると二百円取られるので、死体はこのラントウバに埋葬し、石塔だけ寺にたてた。墓参りには両方へ行つた。ラントウバは道路ができるつぶれた。（新里）

土地が狭いので、石塔を建てるに埋める場所がなくなり、石塔の前の空いている所に埋め、從つて掘りかえすことになる。石塔の下には埋めていない。石塔が建つと石塔にお詣りする。（入ヶ谷）

幼児の葬式 小さい子の葬式は、オクミアイと兄弟くらいを呼んで小さくやつた。子どもはリンドゴ箱に入れ、好きなものを入れてやつた。「七つ前は神の子」というが、生臭と一緒に埋めることはなかつた。

(五)そ の 他

水かけぎもん 人がなくなつた場合に、七日間、水かけぎもんをする。死んだ人の着ていた着物を洗濯して、しばらく北向きにして干す。七日間、うちのものが、柄杓で水をかけた。

この着物を、内緒でもつていかれると、その仏様は、後生がいいといつた。むかしは、困っている人は、水かけぎもんをもらいにきた。

ふだん、洗濯物は北向きに干すなどいう。(矢島)

死んだ時着ていた着物はすぐ洗つて家の裏で北向きに干す。これをミズカケギモン(水掛け着物)といふ。干したら「早く下げた方が後生がいい」といふ。乞食などにくれてしまふ。乞食がいない時は、家のがなるべく早く下げる。

これに関連して「夜干しするにはホトケの着物」などという。(南大島)

死者の着ていた着物は家のうらに北向きに干して、ひしゃくで水をかけた。水かけ着物は仏様が出たあとにすぐ水かけをした。早くなく

なつた方が後生がよいといふ。(千津井)

禁忌 洗濯物は北向きに干さない。水かけぎもんと同じだから。

かけぎもんとは死びとの葬式の翌日、死んだ人の身につけていた着ものを洗う。よそいぎのぬかたや、ちょいちょい着の着物の洗濯をする。

山の中だの方に干すが、竹竿の太い方から洗濯物を通して水をしぼらずに干す。

太い方を木の枝などにしばりつけておく。

死びとが袖にたまる水をのみながら旅をするのでしばらく干す。

抜く時は通した方と反対から抜く。太い方からさして細い方に抜く。

水かけぎもんをその日のうちに貰いにくる人がいた。誰かが貰つてくれる方がいい。翌日もその次の日も誰ももらひ手がない時は家でとりこむ。そうならないうち、前以つて人に頼んで下げるにきてもらった。

幸福な死だつたら早くもらい手がきて後生がいい、と言つた。(大輪身代りの人形) 一軒のうちで一年に二度葬式があると、二度あることは三度あるといつて、二度目のときに、わらで人形をつくつて墓にならべて埋めた。ミカン箱に人形をいれて小さい墓をつくつて埋めた。人形は隣組の人がつくつた。(入ヶ谷)

シラジ 盆に死ぬと、お客様に来るのに、向うへ行くので、シラジ(すり鉢)を被せてやる。(斗合田)

年末の死者 年末に死者があると正月がなくなつてしまう。改めて正月をするということはなかつた。(千津井)

伝染病死 伝染病や流行病で亡くなつた人は焼いて埋けた。(千津井)

土左衛門 利根川で川流れで土左衛門が流れつくと流れついた所で始末する。身元が分つて引取つてくれる人がいるといふが、そうでなければ検死を受けて、広告を出して皆に知らせるようにして引き取り手を捜す。それでも引き取り手が無い時は村の費用で無縁仏として埋葬し供養する。だから土左衛門が流れついても見つけるふりをする

ことともあつたと聞いた。(大輪)

川流れ 溺死者を川流れといふ。無縁仏として供養して墓地に葬つた。(千津井)

生まれ替り 亡くなつた人の手や足に字を書いておくと生まれた子に字が書いてあつたという話がある。(千津井)

北の国 人が死んだ場合、北の国は広い国だから、今度生まれてくるときは、北の国に生まれてこいといつた。(矢島)

盆棚 既製のものが各家にあって、前面の柱に竹を一本しばり、その前にカツモで繩をなつて張り、ホーヴキと色紙を飾りにつける。杉の葉を垂らす家もある。最近はゴザ、ハナ、オガラ、線香など盆の必要品を専門に矢島の人々が売りにくるようになった。(入ヶ谷)

管理したり記つてくれる人のいない仏様をショウウヨウ様といつ

て、盆棚の下に祀る。蓮の葉か芋の葉にオサズケでナスを細かく切つて食物をあげる。(入ヶ谷)

盆の餅 十三日の迎え盆にオハギあるいは餅をつく家もある。家の入口でつく家もある。餅はアベカワにして十三～十五日三日間あげる。

ウチのボタモチはムコダマシという。(大佐賀)

野廻り 八月十五日の朝、主人が施餓鬼の折に仏様にあげた色紙をおガラの杖にしばつたのを持って、田畠を見て廻る。そこで盆までに烟をきれいにする。そうないと盆様に怒られるという。(入ヶ谷)

野廻りのとき煙の豆、さつまいも等季節のものをとつて仏様にあげた。(大佐賀)

お盆の八月十五日線香をつけて持つて田畠を廻る。仏様を案内してみてもらうのである。このとき煙のものいなどとつて盆棚に供する。(斗合田)

盆棚の先に線香をあげたあと何も持たないで田畠、畑を回る。帰りに畑からいも、大豆などの野菜物をとつて帰り(お土産を持つてくる意だという)盆棚にあげる。昔はどこの田は出来がよいなどといつて仏

八月十五日田畠を周り、里芋、甘藷、稻、カブなどとつて御先祖様(盆棚)にあげる。このとき大輪では何も持たず、須賀では線香もつて、川端では提灯もつて周る。(大輪)

新盆見舞い 元はうどん、今はお金を持って行く。新盆の時は、「お静かな新盆でおめでとうございます」、新盆でない時は、「お静かなお盆でおめでとうございます」というが、普通ことばだ。(斗合田)

彼岸 「お静かなお彼岸でおめでとうございます」、「結構なお彼岸でおめでとうござります」といふ。(斗合田)

四十九のもち 新仏ができる家では、十日後に四十九のもちをついて、寺へもっていった。寺では、鐘をたたいて、子どもをよんでもそのもちを分けてやった。(矢島)

四十九のもちを十日後につく。

四十九のもちを寺へもつていつて、「本尊様にあげる。また、十三仏様へも十三コあげた。四十九のものは、つぐ日、ムラの子どもたちをよんでも分けたやつた。(江口)

三仏様に進せる。一般の家では仏様に十コあるいは十三コの餅を納める。寺ではご本尊様に供する。新仏のある家では仏様から集まつた多くの餅を、鉢をたたいて子供に知らせ、集まつた子供達に分け与える。家によつては集会所に子供を呼んで一つずつ与えた。あんなし餅である。

この餅をたべると、後生がよいといわれる。(大佐賀)

岩船地蔵 新仏ができた年にお行つた。向こうから迎えに来て、月牌が年牌にするかを決めた。(千津井)

新らしい仏ができるときは岩船地蔵にお詣りした。死んだ人に似ている地蔵さんが岩船にはいるもので、山の岩の欠けている高い所に、塔婆を立ててくる。(梅原)

一杯茶 仏様と同じだから、一杯はよくない。二杯目を注ぐまでもする。(斗合田)

仏様のめし 山盛りにして、箸を押す。(斗合田)

南大島の権那寺 七軒コウチを除いた南大島の各家は、宗龍寺(曹洞宗)の檀家である。ただし、稻荷山コウチの森尻の本家は、旦那とその奥さんは茂林寺で、他の家族は宗龍寺である。

七軒コウチは、今成イッケを除いた他の家は、館林市赤生田の永明寺(真言宗)の檀家である。今成イッケは江口の普濟寺(曹洞宗)の檀家であったが、今は普濟寺に住職がいないので茂林寺の檀家となつている。(南大島)